立山町文化財調査報告書第３冊

辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要

1987年

立山町教育委員会

序

文化財は祖先の営みを物語ってくれるもので、過去のみならず現在の文化を理解するためにも重要なものであります。中でも埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵となるものです。

立山町にも数多くの埋蔵文化財が存在しています。これまでも、上段や吉峰をはじめとする丘陵上では頻繁に発掘調査が行われ、旧石器時代や縄文時代の資料がたくさん出土しました。

このたび調査が行われた立山町北部地区にも、県内最大の円墳である稚児塚古墳など、弥生時代から中・近世までの遺跡が数多く知られていました。しかし、この時期の遺跡で本格的な調査が行われたことはなく、その実態はよくわかっていませんでした。

この辻遺跡・浦田遺跡の報告書では、弥生時代・古墳時代・古代・中世の資料がかなりまとまって報告されています。これは立山町のみならず、県下全体の歴史資料の不備をうめるものであり、今後の研究を進める上での貴重な資料といえましょう。本書が地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いであります。

最後に、調査に際しご援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査にご協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝いたします。

1987年3月

立山町教育委員会

教育長　　坂井　市郎

例　　言

1．本書は、昭和61年度に国庫補助金及び県費補助金の交付をうけて実施した、富山県中新川郡立山町辻遺跡・浦田遺跡緊急発掘調査の概要である。

調査期間、発掘面積は次のとおりである。

辻遺跡　　試掘調査：昭和61年１月９日・10日、発掘面積約100㎡

本調査　：昭和61年４月10日から同６月28日まで延49日、発掘面積約1,200㎡

浦田遺跡　試掘調査：昭和61年１月13日・14日、発掘面積約60㎡

本調査　：昭和61年７月６日から同９月３日まで延27日、発掘面積約550㎡

2．調査は、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、立山町教育委員会が行った。

3．調査事務局は立山町教育委員会におき、社会教育課主事森秀典が事務を担当、社会教育課長松井哲男が総括した。また調査期間中は、富山県埋蔵文化財センターの指導・助言を得た。

4．調査担当者は次のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事池野正男、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典。

5．自然遺物の分析については、金沢大学大学院吉井亮一氏にお願いし、その報告を本書に掲載させていただいた。また、木製品の赤外線写真撮影については、富山県警察本部鑑識課にお願いし、写真を本書に掲載させてていただいた。記して感謝の意を表します。

6．発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表します。

富山大学教授秋山進午、同助教授宇野隆夫、同助教授櫛木謙周、田嶋明人・湯尻修平ほか「土器をみる会」のメンバー

7．本書の編集・執筆は、池野・森・北川美佐子（辻・浦田遺跡発掘調査補助員）が、富山県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得て行った。なお文責は文末に記した。

8．遺物写真は原則として３分の１で、それ以外の縮尺はそれぞれに記した。

凡例

1．遺物実測図中のスクリーントーンは、次のことをあらわす。

赤彩

炭化

目　　次

Ⅰ　位置と周辺の環境 ---- 1
Ⅱ　調査に至る経緯 ---- 1
Ⅲ　調　査　概　要 ---- 3
　1．辻　遺　跡 ---- 3
　　(1)　立地と層序 ---- 3
　　(2)　弥生時代の遺構 ---- 3
　　(3)　奈良時代の遺構 ---- 6
　　(4)　中世の遺構 ---- 8
　　(5)　弥生・古墳時代の遺物 ---- 9
　　(6)　古墳時代後期～平安時代の遺物 ---- 26
　　(7)　中世の遺物 ---- 29
　　(8)　植物遺体 ---- 35
　2．浦 田 遺 跡 ---- 37
　　(1)　立地と層序 ---- 37
　　(2)　弥生時代中期の遺構 ---- 37
　　(3)　弥生時代後期の遺構 ---- 40
　　(4)　平安時代の遺構 ---- 43
　　(5)　弥生時代中期の遺物 ---- 45
　　(6)　弥生時代後期の遺物 ---- 51
　　(7)　古墳時代後期の遺物 ---- 51
　　(8)　平安時代の遺物 ---- 52
Ⅳ　調　査　成　果 ---- 56
　1．辻　遺　跡 ---- 56
　　(1)　弥生・古墳時代の遺物について ---- 56
　　(2)　中世の木製祭具について ---- 59
　2．浦 田 遺 跡 ---- 61
　　(1)　弥生時代中期の遺構と遺物 ---- 61
　　(2)　平安時代の遺構 ---- 65
　　(3)　法光寺谷１号窯跡の遺物 ---- 66
　　(4)　上末窯跡群について ---- 67
　註・引用文献
　写真図版

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　地形と区割図 …… 4
第３図　遺構全体図 …… 5
第４図　遺構実測図 …… 7
第５図　溝－01実測図、調査区北・南・西壁土層図
第６図　壺分類 …… 10
第７図　甕分類 …… 11
第８図　鉢・高杯・器台・蓋分類 …… 12
第９図　遺物実測図 …… 16
第10図　遺物実測図 …… 17
第11図　遺物実測図 …… 18
第12図　遺物実測図 …… 19
第13図　遺物実測図 …… 20
第14図　遺物実測図 …… 21
第15図　遺物実測図 …… 22
第16図　遺物実測図 …… 23
第17図　遺物実測図 …… 24
第18図　遺物実測図 …… 25
第19図　遺物実測図 …… 27
第20図　遺物実測図 …… 28
第21図　遺物実測図 …… 31
第22図　遺物実測図 …… 32
第23図　遺物実測図 …… 33
第24図　遺物実測図 …… 34
第25図　植物遺体図表 …… 36
第26図　地形と区割図 …… 38
第27図　遺構全体図 …… 39
第28図　遺構実測図 …… 41
第29図　遺構実測図 …… 42
第30図　遺構実測図 …… 44
第31図　遺物実測図 …… 47
第32図　遺物実測図 …… 48
第33図　遺物実測図 …… 49
第34図　遺物拓影・実測図 …… 50
第35図　遺物実測図 …… 54
第36図　遺物実測図 …… 55
第37図　第２群土器 …… 58
第38図　板碑状木製品墨書 …… 60
第39図　遺構変遷図 …… 62
第40図①　浦田遺跡出土土器群の位置（甕） …… 63
第40図②　浦田遺跡出土土器群の位置（壺・鉢） …… 64
表　口径・法量表 …… 67
第41図　法光寺谷１号窯跡出土遺物 …… 68

Ⅰ　位置と周辺の環境

立山町は、富山県の東南部に位置し、広大な常願寺川扇状地上に拓けた町である。

地形的には、三角洲や扇状地・河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらに山岳高地におよぶ多様な地形が、標高約10ｍから3,000ｍの間に、面積約300㎢にわたって展開されている。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面から見ても大きく４区分できる。

標高400ｍ以下は、暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食料資源であったカシ類が多い。

これに続いて標高600～700ｍまでは、暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食料資源であるクリ・コナラ・クヌギ類の生育帯で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場でもある。

さらに標高1,500ｍまでは、ブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500ｍ以上は、亜寒帯の針葉樹林帯となっている。

今回調査を行った辻・浦田遺跡の所在する町北部地域は、常願寺川扇状地の端部湧水帯にあたり、栃津川や白岩川をはじめとする中小河川が流入して、三角洲・小支谷・自然堤防等による複雑な地形を呈している。

周辺には、先土器時代から中・近世に至るまで、ほぼ切れ目なく遺跡が多数存在する。

これらの遺跡の中で、今回調査を行った両遺跡に関連のあるものとしては、江上Ａ遺跡（弥生中・後期）、江上Ｂ遺跡（弥生中期～古墳前期）、中小泉遺跡（弥生中・後期）、正印新遺跡（弥生中期～古墳）、日中源兵衛腰遺跡（弥生後期～古墳前期）、利田仕入遺跡（弥生中期）、稚児塚古墳、塚越古墳、藤塚古墳、本江・広野新遺跡（古墳）、利田横枕遺跡（平安前・中期）、上末窯跡群（奈良末～平安中期）、弓庄城跡（鎌倉～戦国）などがあげられる。

Ⅱ　調査に至る経緯

１．辻遺跡

遺跡は、昭和31年水田整地時に発見され、『町史』には辻西吉原遺跡と記されている〔安田　1977〕。また、昭和53年に行われたほ場整備に先立つ予備調査では、弥生時代から古代にかけての遺物が多数出土している〔酒井　1979〕。

昭和60年10月、新川レジン工業㈱の工場・倉庫の同地への建設が申請された。このため、町教育委員会は昭和61年１月９・10日の２日間試掘調査を実施し、溝などの遺構と多数の遺物を検出した。

この結果をふまえ、富山県教育委員会・立山町教育委員会・工事主体者の三者により協議・調整が行われ、工場建設予定地のうち建物及び進入路の敷地となる部分を対象として、立山町教育委員会が調査主体となり、国庫補助をうけて記録保存調査を実施することとなった。

発掘調査は、４月10日～６月28日の延49日間にわたって実施された。発掘面積は約1,200㎡である。なお、調査実施にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。

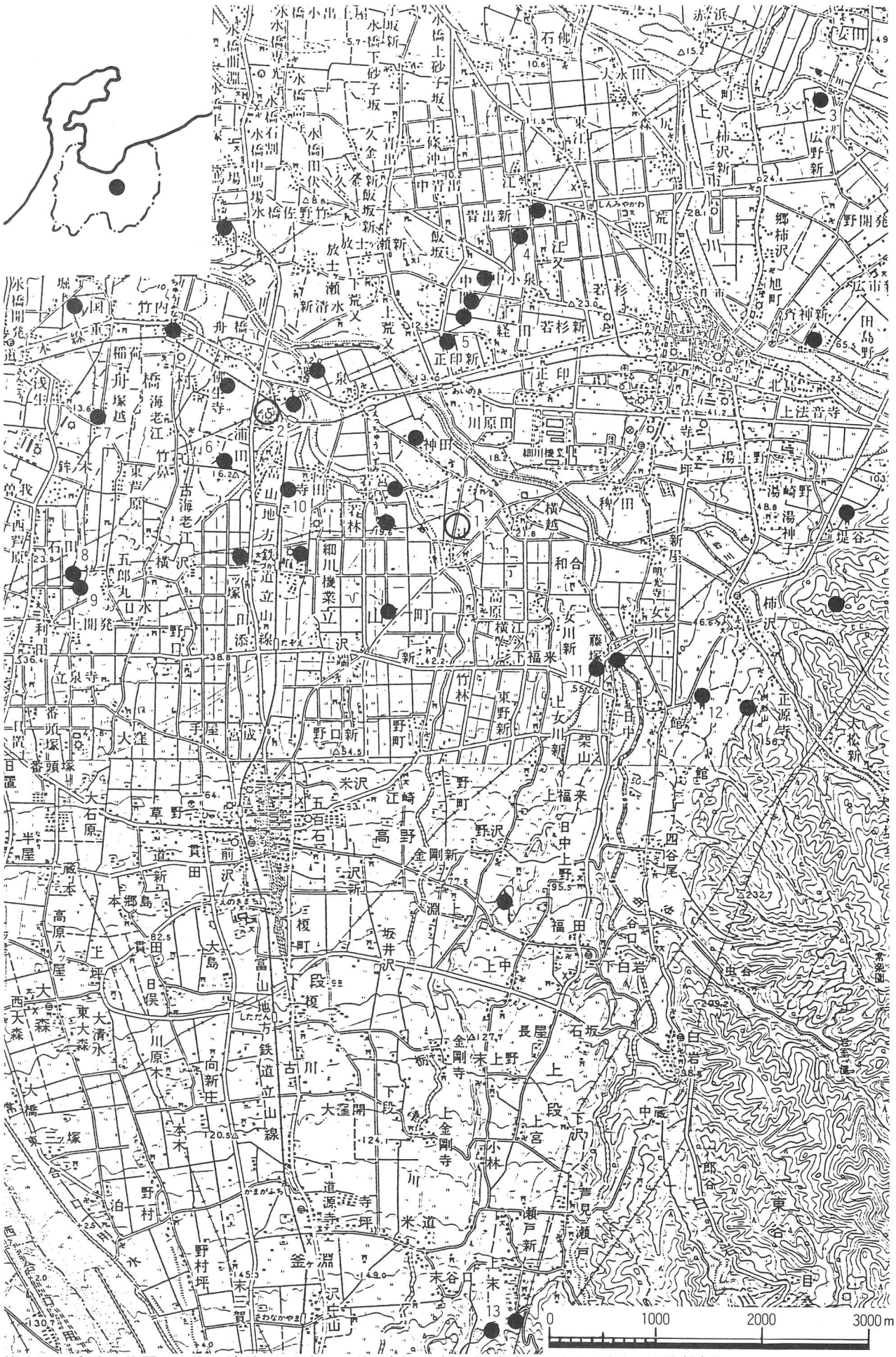
２．浦田遺跡

遺跡は、昭和47年家屋新築に際して弥生土器が出土した事により発見されたが、遺物包含状況など遺跡の性格は一切不明であった。『町史』には浦田靄気（あいのき）遺跡と記されている。

昭和60年11月、家屋新築に伴う宅地造成の申請が提出された。このため、町教育委員会は昭和61年１月13・14日の２日間試掘調査を実施し、溝・穴などの遺構と数多くの遺物を検出した。

この結果をふまえ、富山県教育委員会・立山町教育委員会・工事主体者の三者により協議・調整が行われ、立山町教育委員会が調査主体となり、国庫補助をうけて記録保存調査を実施することとなった。

発掘調査は、７月６日～９月３日の延27日間にわたって実施された。発掘面積は約550㎡である。なお、調査実施にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。　（森）



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　1.辻遺跡　2.浦田遺跡　3.本江・広野新遺跡　4.江上Ａ遺跡　5.正印新遺跡　6.浦田西反遺跡　7.塚越古墳　8.利田横枕遺跡　9.利田仕入遺跡　10.稚児塚古墳　11.日中源兵衛腰遺跡　12.弓庄城跡　13.上末窯跡群

Ⅲ　調査の概要

1　辻遺跡

(1)　立地と層序（第2・3・5図）

辻遺跡は、北陸自動車道立山Ⅰ・Cの北東部約1㎞、立山町辻字西吉原に所在する。このあたりは、常願寺川扇状地扇端部の湧水地帯にあたり、さらに栃津川・白岩川という河川に挟まれた地形になっており、周囲は水田が広がっている。

遺跡は、栃津川東岸の小支谷によって開析された微高地上に立地する。この微高地は、南北約1㎞・東西約500ｍの広がりをもち、北にゆるく傾斜している。遺跡の範囲は、昭和53年に行われた予備調査で、微高地のほぼ中央部に東西200ｍ・南北200ｍにわたって広がっていることが確認されている。標高は、21～24ｍを測る。

層序は、第1層・耕作土、第2層・砂層、第3層・茶褐色粘質土層、第4層・青灰色粘質土層の順序で堆積しているが、地点によってはかなりの変化が見られる。耕作土は平均20㎝程度の厚さであるが、砂層は調査区西側から10ｍくらいには存在せず、茶褐色土層は調査区西側から約15ｍまでの範囲に存在する（第5図）。また、調査区中央以東には、礫層が砂層と交互に帯状をなして存在する。（第5図）。

第3層の茶褐色粘質土層は、弥生土器・土師器の包含層で、平均40㎝の厚さで、溝－12の西側にのみ広がっており、調査区東側では見られない。

(2)　弥生時代の遺構

住居－01（第3・4図、図版3）

調査区の西北隅、Ｘ5・6Ｙ5・6区で検出された。隅円長方形の平面プランをもつ竪穴住居跡であり、南北長辺4.3ｍ・東西短辺3.5ｍ・床面積15.1㎡を測る。壁高は、北側が23㎝・南側が8㎝と南側が極端に低く、南壁は明確な立ちあがりをもっていないが、床面はほぼ水平を保っており、後世に溝－01の掘削に伴って削平されたものと考えられる。

床面の検出時は、覆土と床面の見分けが困難な状況で、柱穴は検出できなかったが、住居ほぼ中央と東壁近くから穴（P_1・P_2）を検出した。P_1は径35㎝・深さ15㎝の不整円形、P_2は長径48㎝・短径44㎝・深さ30㎝の楕円形で東側に段をもつ。また、P_1の北側に、比較的まとまって焼土が検出されており、直上から炭化物が多量に検出されていることもあわせて、炉跡と考えられる。

覆土は3層からなる。第1層は明黄灰色粘質土で、炭化物をわずかに含む。第2層は暗青灰色粘質土で、炭化物を多量に含む。第3層は暗青灰色粘質土で、住居の南側から第1・2層の下へ流れ込む様に堆積している。また、住居中央の床面直上から、かなりの広がりをもって炭化物の薄い層が検出された。

遺物は、少量ではあるが比較的まとまって出土しており、2個体（第9図4・8）が復元できた。両者とも、肩部に刺突列点文を施す甕で、時期は弥生時代後期と考えられる。

遺構の時期は、遺物と同じ弥生時代後期と考えられる。

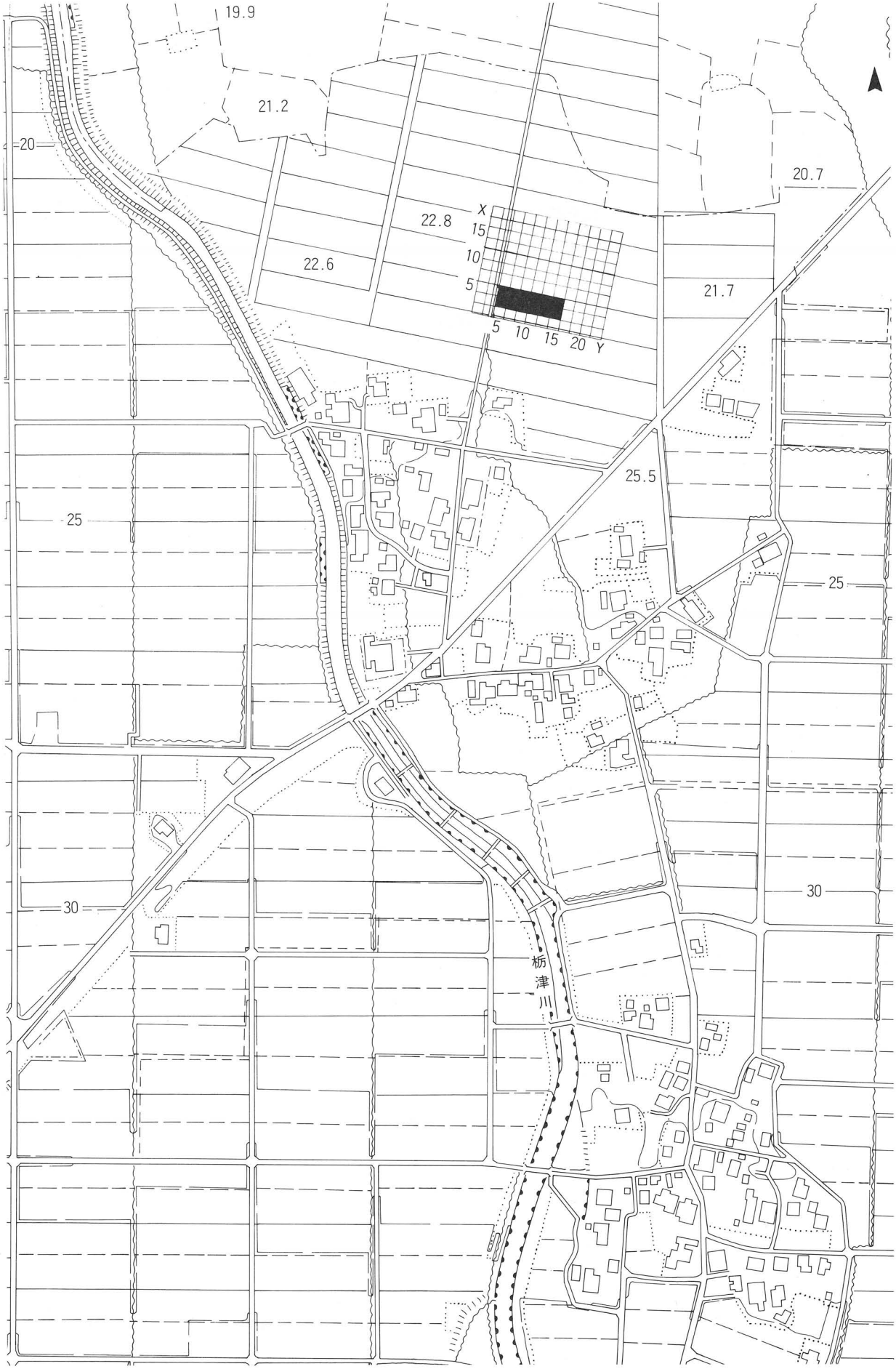
穴－31（第3・4図、図版3）

調査区西隅近く、Ｘ4・5Ｙ5・6区で検出された。隅円長方形の平面形態をなし、長辺2.5ｍ・短辺1ｍ・深さ12㎝を測る。主軸はＮ－48°－Ｗをさす。覆土は、遺物包含層と同じ茶褐色土の単層である。遺物は出土していない。

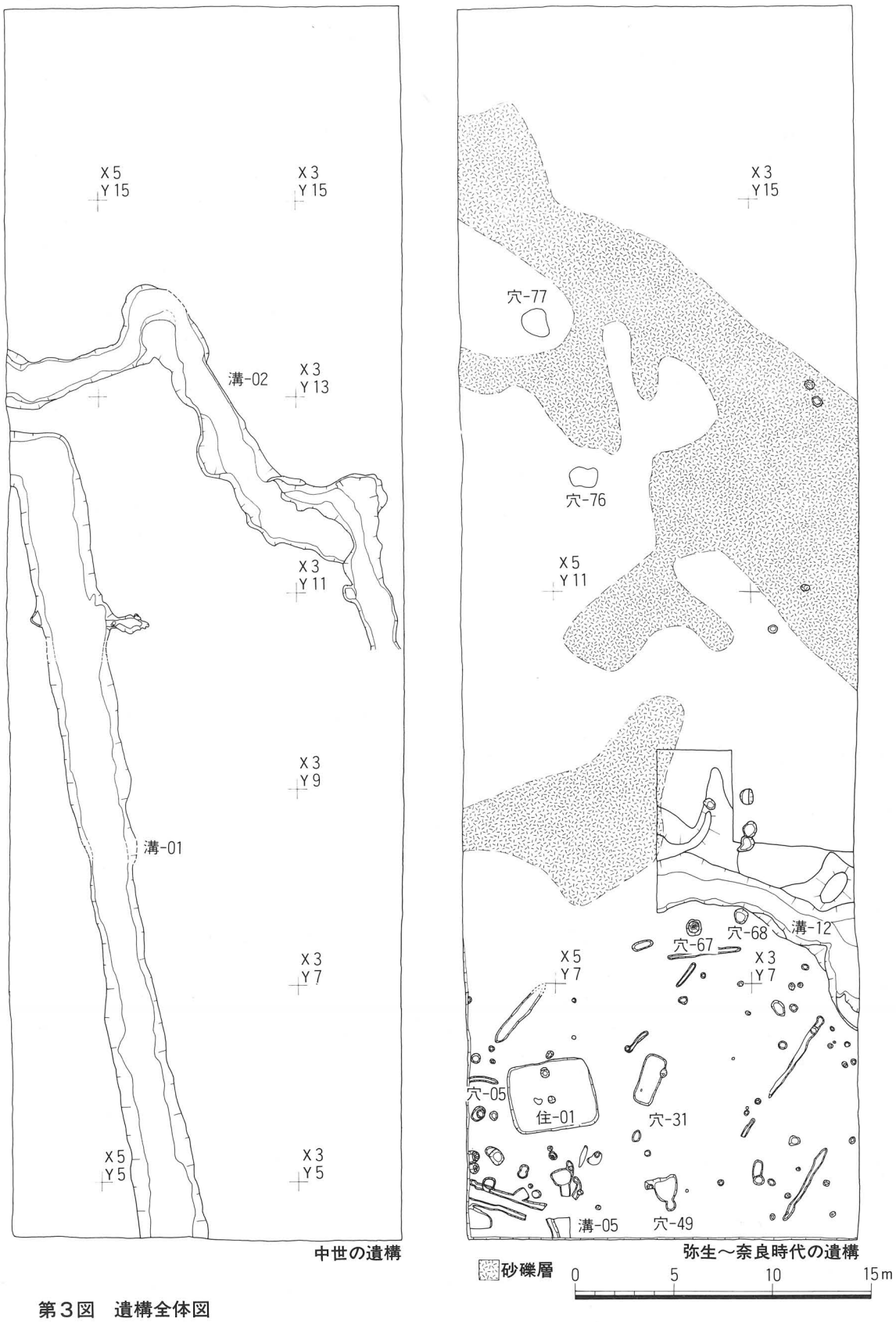
平面プランから見て、土壙墓の可能性があるが、時期等の詳細は不明である。

なお、南西壁にある穴は、後に掘られたものである。

穴－49（第3・4図）



第２図　地形と区割図


X5
Y15
X3
Y15
溝-02
X3
Y13
X3
Y11
X3
Y9
溝-01
X3
Y7
X5
Y5
X3
Y5
中世の遺構
X3
Y15
穴-77
穴-76
X5
Y11
穴-68
溝-12
穴-67
X5
Y7
X3
Y7
穴-05
住-01
穴-31
溝-05
穴-49
弥生～奈良時代の遺構
砂礫層
0
5
10
15m

第３図　遺構全体図

調査区西端近く、X４Y４・５区で検出された。平面形態は、不整円と半楕円の接した形で、長軸1.6m、最大幅1.1mを測る。主軸はN－89°－Wをさす。覆土は、遺物包含層と同じ茶褐色土の単層である。遺物は、高杯の脚部（第９図18）、長頸壺（第９図１）、底部（第９図６）が出土している。

時期は、弥生時代後期と推定される。

穴－67（第３・４図）

調査区西側、遺物包含層の東端近く、X４Y７区で検出された。平面形態は楕円形で、長軸75cm・短軸70cm・深さ42cmを測り、３段掘りになっている。覆土は、遺物包含層と同じ茶褐色土の単層である。

遺物は、甕（第９図12・15）・有孔鉢（第９図13）が出土している。特に15は、穴－68出土の破片と接合し、復元できた。

時期は、弥生時代後期と推定される。

溝－12（第３・５図）

調査区中央西寄りで検出された。西側の遺物包含層を切る形で、南西方から北東方に走る大溝である。

層序は、第１層明茶褐色土、第２層暗青灰色土、第３層明黒褐色土、第４層砂礫層となっているが、かなり複雑な互層を形成している。なお、第４層に含まれる礫は、角のとれた川原石であり、調査区中央から東にかけて広がる礫層の石と同質のものである。

また、この溝を境にして東と西では土質が全く異なっており、溝以東には砂礫の層が広がり、西側に厚く堆積していた茶褐色粘質土（遺物包含層）は見られない。

遺物は、第３・４層から小型の蓋（第９図14）、長頸壺胴部（第９図７）、甕口縁部（第９図11）、鉢（第９図16）等が出土している。

以上から考えると、この大溝は自然流路であり、恐らくは栃津川の氾濫によってできた支流（あるいは本流）であろう。また土層形成の順序は、まず西側の遺物包含層が堆積し、次に包含層を削って流路が形成され、その後砂層が堆積した上に奈良時代以降の人々の生活が営まれたと考えられる。

(3) 奈良時代の遺構

穴－76（図版３）

調査区東側のX５・６Y12区、溝－01と溝－02の間で検出された。焼土穴で、中央がややくびれた楕円形（繭形）の平面形態をなし、長軸1.5m・短軸１mを測る。主軸は、ほぼ南北線に沿っている。覆土は、周囲と同じ黄灰色砂質土である。

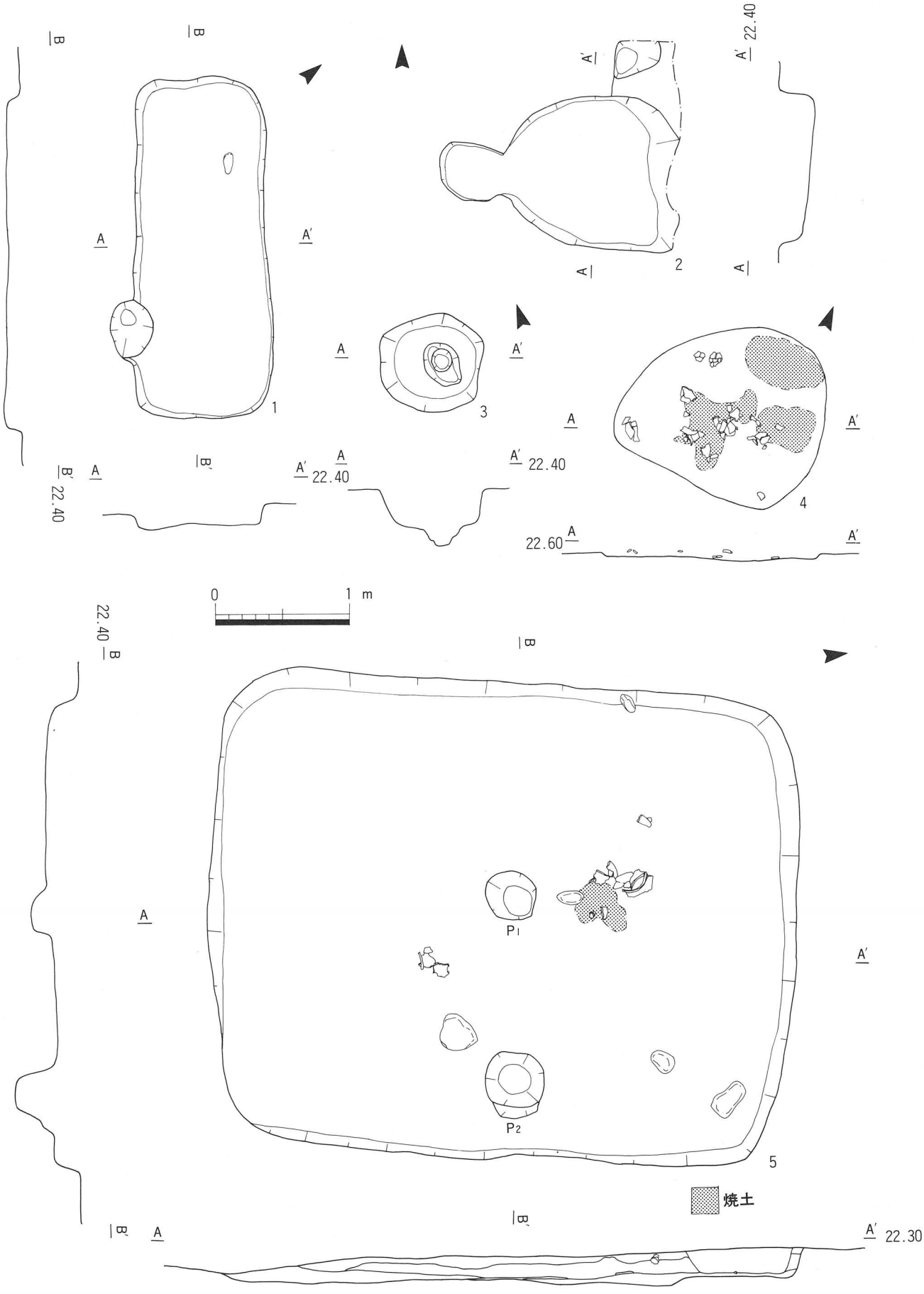
遺物は、遺構から直接は出土していないが、隣接した（北東50cm）位置からハケメ調整の土師器甕３個体（第19図９・12・13）が一括出土しており、出土状況から見て遺構に伴うものと考えられるが、性格等は不明である。また、覆土が周囲の土と同質なのは、冠水を受けたためであろう。

穴－77（第４図、図版３）

調査区東側のX５・６Y13区、溝－02の東側で検出された。部分的に薄い焼土が見られ、不整形の平面形態をなし、直径1.3m前後・深さ５cmを測る。覆土は、周囲と同じ青灰色砂質土である。

遺物は、ハケメ調整の把手付小型土師器（第19図８）・ロクロ成形の土師器甕が出土している。

遺構の時期は、遺物から奈良時代（８世紀前半）と考えられるが、性格等は不明である。また、覆土が周囲の土と同質なのは、冠水を受けたためであろう。（森）



第4図　遺構実測図　1.穴-31　2.穴-49　3.穴-67　4.穴-77　5.住-01

(4) **中世の遺構**（第３・５図、図版２）

遺構は、表土・旧耕作土を掘り下げた面で大小２条の溝が検出された。発掘区を東西に横切る大溝を溝－01、南北に走る小溝を溝－02とする。

溝－01　発掘区の北側半分を東西にほぼ直線的に走る大溝で、Ｘ５Ｙ12区で北方に大きく直角に曲がり、「⌐」形を呈する。全長42ｍで、上面幅約2.2～3.2ｍ、底面幅約1.5～2.4ｍ、深さ約0.3～0.7ｍを測る。断面形は「⌣」形を呈し、溝底は平らになっている。発掘にあたり、任意に西側よりＡ～Ｈの８区に分けた。溝底面の状況は場所により異なった様相を示している。約0.5～0.7ｍと比較的深いＡ～Ｃ区は、粘性の強い暗青灰色土となっている。急激に約0.3ｍと浅くなるＤ区の一部には拳大の礫を含む暗青灰色砂礫土がみられる。Ｅ～Ｈ区においては粒子の細かい暗青灰色砂質土となり、深さは約0.3ｍを測る。これらのＤ～Ｈ区の土は溝の肩の堆積土層に呼応するものである。覆土は、大まかに３種類に分類でき、レンズ状に堆積している。①層は、明黒褐色土層中に明茶褐色土が小さなブロック状に混入する暗茶褐色土。②層は、明黒褐色土層中に黒褐色土・暗青灰色土が小さなブロック状に入り、僅かに炭化物を含む明黒褐色土。③層は、粘性が強い黒褐色土層中に暗青灰色土ブロックを多く含んでいる黒褐色土である。比較的深い西側の２つのセクションには、③層の下に粘性が強い黒褐色土がブロック状に混じる暗黄灰色土が堆積している。

遺物は、大量の木製品と若干の土師質小皿が出土している。②層の明黒褐色土層中にも幾らか見られたが、大半は③層の黒褐色土層中、及び溝底面で検出された。木製品の出土は、ほぼ溝全区に渡っているが、特にＢ・Ｃ区に集中している。各区に分けてその種類内容をあげると、Ａ区（工具の柄）、Ｂ区（漆器・底板・杭・幅約10㎝で長さ約３ｍ以上の板等）、Ｃ区（漆器・箸・曲物・糸巻き部品・人形や刀形や陽物等の木製模造品・板碑状木製品・柄等）、Ｄ区（板碑状木製品・駒形等）、Ｅ区（箸等）、Ｇ区（糸巻き部品・箸等）、Ｈ区（杭・抉入りの約60㎝の板等）である。この他に大量の建材を砕いた板・棒状の木片が出土した。特にＢ～Ｄ区の出土品は祭祀的色彩の濃い遺物が多く、それも集中して出土している。各区における出土遺物の絶対レベルはほとんど変わらないため、遺物堆積時における溝底面のレベルも全体に渡って高低差が無かったと推測される。当時の溝は、流れというものがほとんど無い、澱みのような状態を呈していたのであろう。遺物は、付近で何らかの祭祀を行なって、一括投棄され、それが溝底に溜ったものと推測される。祭祀の回数については不明である。

溝－01は、プランの形状からも建物の周溝のように考えられるが、発掘区内においては柱穴等の遺構は確認されなかった。上市町江上Ｂ遺跡〔宮田　1981〕では、溝に区画された15ｍ×20ｍの長方形の中に３棟の建物跡が見つかっている。溝－01もこのような性格を有し、溝が伸びる発掘区北側の隣接する水田下に関連する建物群があると推測される。

時期は伴出の土師質小皿によって、13世紀前半と考えられる。[註1] 他に、自然遺物として、桃核・トチの実等が出ている。

溝－02　溝－01Ｈ区の1.5ｍ東側に隣接し、蛇行しながら南北に走る「Ｍ」字状の溝で、南端は試掘トレンチによって断ち切られている。全長33ｍ、上面幅約1.5～3.3ｍ、下面幅0.8～1.8ｍ、深さは最深部では54㎝、浅い所では11㎝を測る。溝－01に比べて企画性に乏しく、いびつな形を呈する。断面形は「⌣」形で、覆土は２層より成る。上面は粘性がある黒褐色土、下面は有機物を多く含んだ柔らかい黒褐色土が堆積する。特に深く、幅広になっているＸ３Ｙ12地点では柔らかい黒褐色土層が深く、その中に薄い黄灰色粘質土が入り込んでいる。

遺構に付属する遺物は全く検出されなかった。時期は土層堆積状況から推測するしかないが、発掘区は栃津川の氾濫原であり、第５図の南北壁土層図が示すように複雑を極める。溝－02の溝底面の砂礫層は発掘区東側のみに見られるものである。北壁土層図を見るに、奈良・平安時代の遺物を含む暗青灰色粘質土層を断ち切って掘り込む事から、これより新しい事は確かである。覆土が、溝－01と大きく異なり、自然流路とも考えられる。明確なる時期は判定し難いが、とりあえずこの項で述べた。　（北川）

西壁土層図

23.30

A区 B区 C区 D区 E区 F区 G区 H区

A A′ B B′ C C′ D D′ E E′ F F′ G G′ H H′

0 10 20cm

0 5m

22.80

遺物包含層
砂　層
礫　層

23.70 北壁土層図

23.70 南壁土層図

第５図　溝-01実測図、調査区北・南・西壁土層図

(5) 弥生・古墳時代の遺物

弥生・古墳時代の遺物は調査区西側のＹ３～７ラインまでに残る暗茶褐色包含層からの出土が大部分である。Ｙ７ライン以東の調査区には暗茶褐色包含層が認められず、砂層、砂礫層中からの散発的な出土であった。出土状況は、小破片で出土するものが多く、その中で、完形に近いもの、大型破片がわずかに見られた。またＸ５Ｙ５区からは、直径３ｍ程に広がる土器ダマリと呼べるほどの遺物が集中した地点があり、ここからの遺物は、復元個体の割合が高かった。土器以外の遺物としては、石器・土製品がある。石器類には、ヒスイなどの原石・緑色凝灰岩の未成品・台石・砥石があり、土製品には紡錘車がある。

土器の分類は、包含層からの出土が大部分である状況から、住居跡、穴、溝などの遺構出土遺物も含めて一括して器種ごとに分類した。また、全形を知り得ない器種が多く、主に口縁部の形態差によった。

器種は、壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋がある。

壺（第６図）

壺は、A_1・A_2・B・C_1・C_2・D・E・F_1～F_3・G・H・I・J・K・Lがある。全体に出土量は少ない。

壺A　（第９図１・19～23）A_1（１・19～21）直線的にのびる長頸の壺。19はやや丸味をもった体部が付く。頸部内・外面はハケメ調整が多い。A_2（22・23）外傾気味にのびた長頸の壺で、23の頸部外面にヘラ書きがみられる。

壺B　（第10図３）直線的にのびた頸部は口縁部近くで肥厚し、端部は内傾した幅広の口縁帯をもつ。

壺C　（第10図11・15・16、第12図13）C_1（第10図11）張った体部に大きく外反した口縁部が付き、端部はヨコナデによって面をもつ。体部調整は外面がハケメの後ヘラミガキ、内面はハケメ調整。C_2（第10図15・16、第12図13）はC_1に口縁形態が似るが、縁端部を上下方向に広げた壺で、15・16には２条の擬凹線を施す。

壺D（第10図５）稜が明確でない有段状の壺で、狭い口縁帯をもつ。３条の幅広の擬凹線をもつ。

壺E（第10図10）大きく外反した口縁部の端部を尖り気味におさめた壺。頸部外面に低い段を設けるが全周しない。口縁部・体部上半外面に赤彩。

壺F（第10図１・２・６・８・９・13・14、第18図６）F_1（第10図１・２、第18図６）比較的広い口縁帯をもつ有段の壺で、２の端部は外反して尖り気味におさめる。１の口縁部は細かなハケメ調整され、内・外面赤彩する。F_2（第10図８・９）大型の有段口縁の壺で、９の外面にはスタンプで押された同心円文に、同心円文の上下を結ぶ２本の沈線による装飾を施す。F_3（６・13・14）狭い口縁帯をもつ有段口縁壺。14の体部内・外面はナデ調整。底部は尖り気味になると推定される。

壺G（第９図２・３）丸味をもって内傾した口縁部に、端部がわずかに立ち気味におさめた無頸壺。２の外面は赤彩され、内面は浅いケズリ調整。

壺H（第９図６・７・24・25）細頸の長い頸部をもつ小型壺を一括した。全形がわかる資料はなく、赤彩品が多い。

壺I（第18図13）装飾壺。全形を知り得ないが、体部下半は直線的に外傾し、途中で鋭角に折れてのびる。頸部は有段状になり、２～３条の幅広の擬凹線がめぐる。

壺J（第10図４）直線的に開いた口縁部に丸味をもった体部が付く小型壺。体部の内・外面ナデ調整。

壺K（第10図12）「く」の字口縁に大きな平底の底部が付く。口縁部は甕D_1と同一形態、体部外面は、ナデ、内面はハケメ調整する。

甕（第７図）

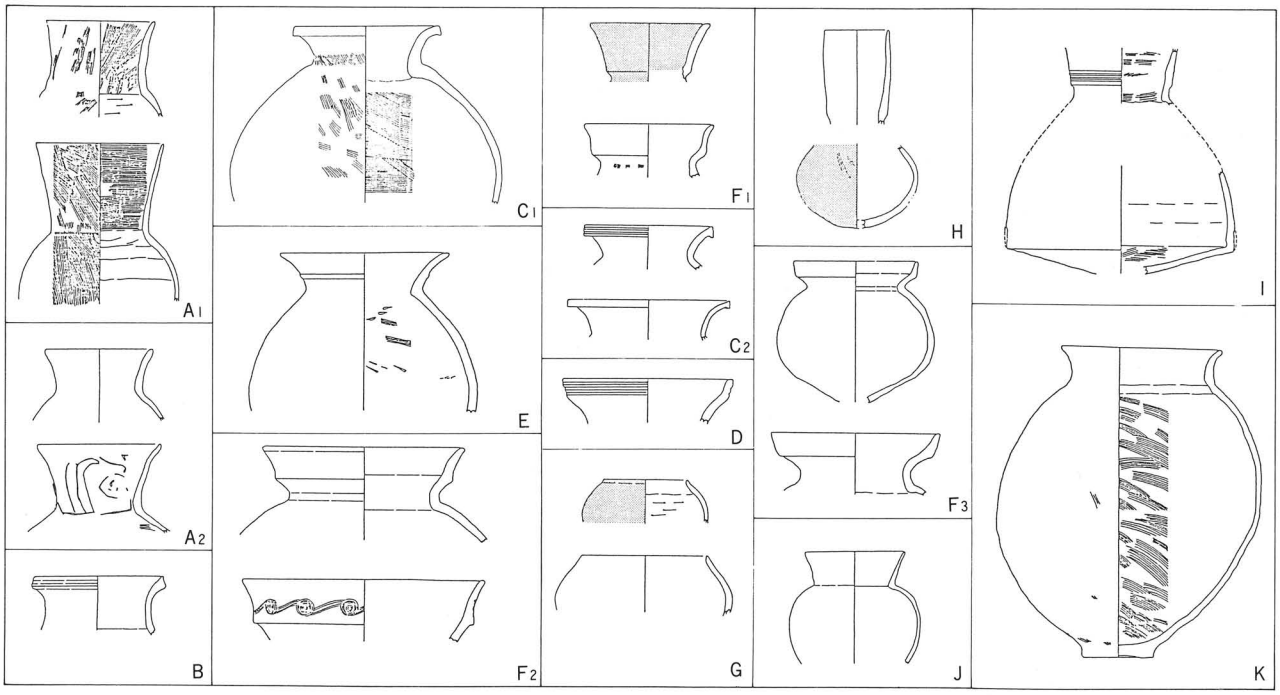
甕は、A_1～A_5・B_1～B_7・C_1～C_5・D_1・D_2・E・F・G・H・I・J・K_1～K_8・L・M・N・O_1・O_2があり、出土量は最も多い。

甕A（第10図19、第11図１～７・19、第16図11～13、第18図１・５）擬凹線を施した有段口縁の甕を一括した。

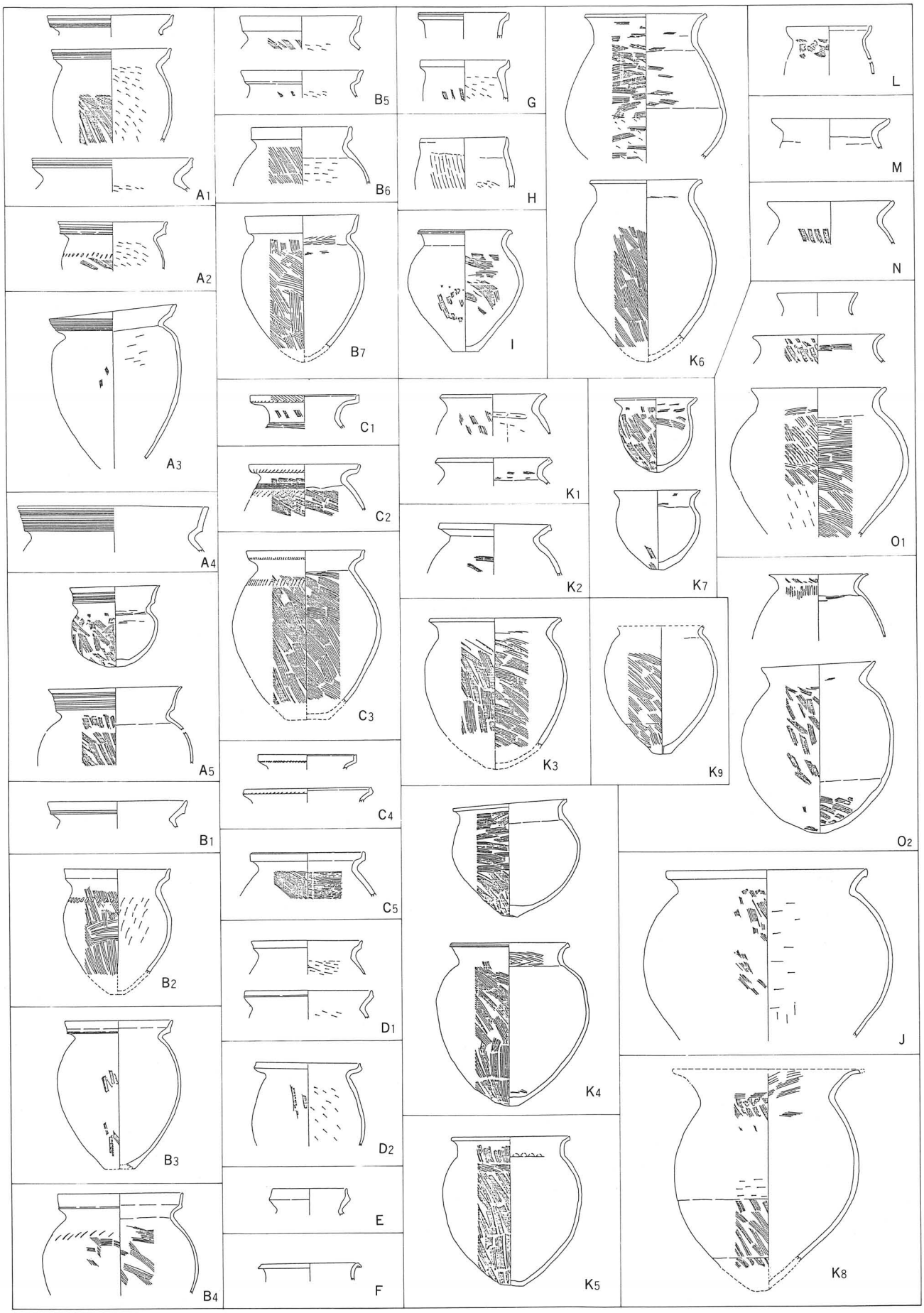
A_1（第11図２～７）縁端部を上下方向にわずかに引き出し、狭い口縁帯をもつ甕。２～３条の擬凹線がめぐり、６・７は深く、４は非常に浅く痕跡程度に施す。体部外面に斜方向のハケメ、内面はケズリ調整。A_2（第11図１）縁端部を上方向にやや広めに引き出した甕で、３条の擬凹線がめぐる。体部調整は、外面ハケメ、内面はケズリ調整。また、体部肩にはクシ状具による斜行列点文を施す。A_3（第10図19）屈曲部の稜が明瞭でなく、縁端部は丸味をもっておさめた甕で５条の擬凹線がめぐる。体部は歪みが大きいが、張りが弱く長い。体部内面調整は浅いケズリ。A_4（第11図19）幅広の口縁帯をもち、縁部は平坦な大型甕で８条の擬凹線がめぐる。A_5（第16図11～13、第18図１・５）比較的幅広の口縁帯をもち、端部は外反して、尖り気味におさめる。外面には３～５条の浅い擬凹線がめぐる。11～13は小型甕で、体部は張りが弱く、丸味をもつ小さな底部。調整は内面がナデ、外面はハケメ調整。

甕B（第９図４・８・11、第11図９～11・13～15・20～26、第16図14、第18図２・３・９）無文の有段口縁の甕。B_1（第11図９）口縁形態はA_1に似る。１条の擬凹線がみられるが全周しない。B_2（第９図４、第11図13・25）狭い口縁帯の甕。第９図４には張りが弱く長めの体部が付く。体部調整は外面が斜方向のハケメ、内面にはケズリが施され、肩には列点文が入る。B_3（第11図11・14・23）口縁部と頸部の長さが同程度で、稜が明瞭な甕。B_4（第９図８、第11図20・22）有段口縁の屈曲部をつまみ出した様に張り出させた甕。第９図８の体部外面肩にクシ状具による刺突列点文を施す。内面調整はハケメ。B_5（第１１図10・15・24）有段部分外面の屈曲稜が明瞭でない甕。B_6（第11図21）有段口縁の口縁部が真上にのび、体部の張りが強い甕。体部外面にハケメ、内面ケズリ調整。B_7（第11図26、第16図14、第18図２・３・９）頸部に対して口縁部が長く、口縁全体が厚作りで、端部は外反して尖り気味におさめた甕。第18図３は、体部内外面に浅いケズリが入る。

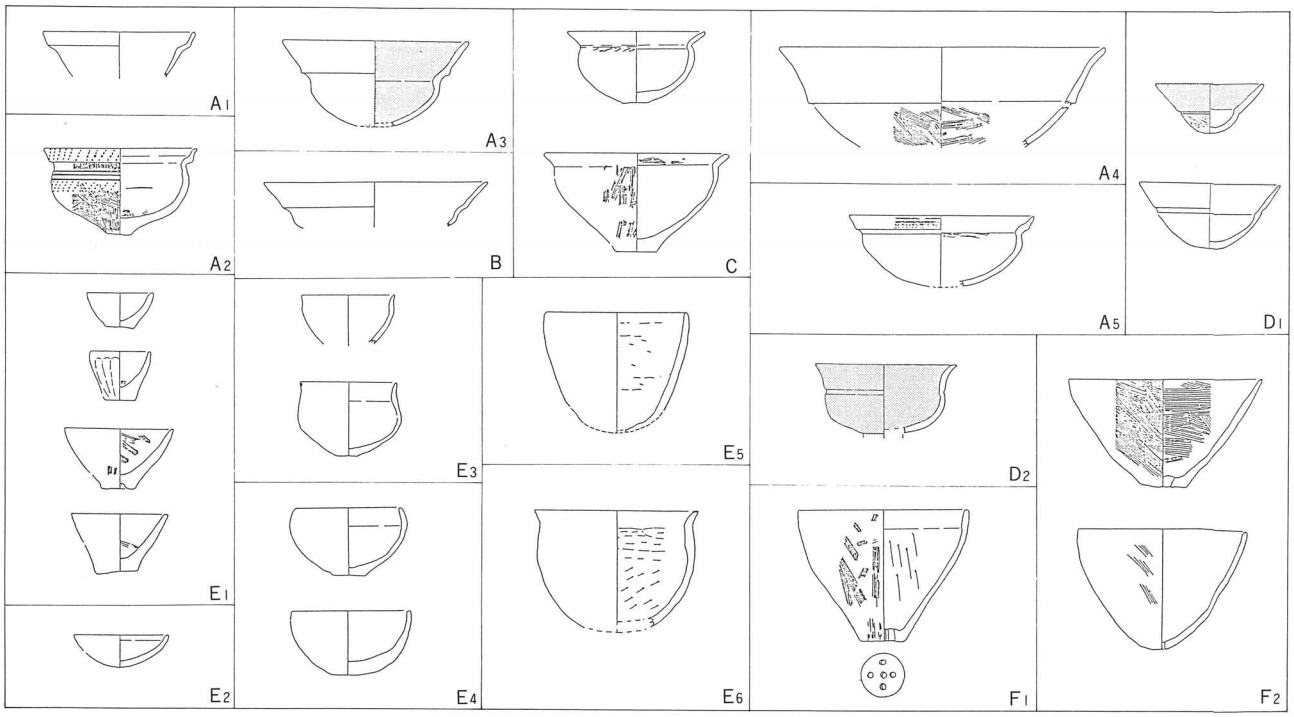
甕C（第９図12・15、第12図１～７）受口状の口縁を一括した。C_1（第12図１）は大きく外反した頸部に鋭角に折れて真上にのびる口縁部が付く。端部はヨコナデによって面をなし、内傾する。口縁屈曲部にクシ状具による刺突列点文、体部外面に平行沈線文を施す。C_2（第12図２）屈曲による稜が明瞭でなく、端部を丸くおさめる。口縁屈曲部外面にクシ状具による刺突列点文、体部外面には平行沈線文、刺突列点文を施す。内面はハケメ調整。C_3（第９図15、第12図４・６）口縁部を外傾気味におさめた甕。口縁屈曲部及び体部外面に刺突列点文を施す。施文具は第

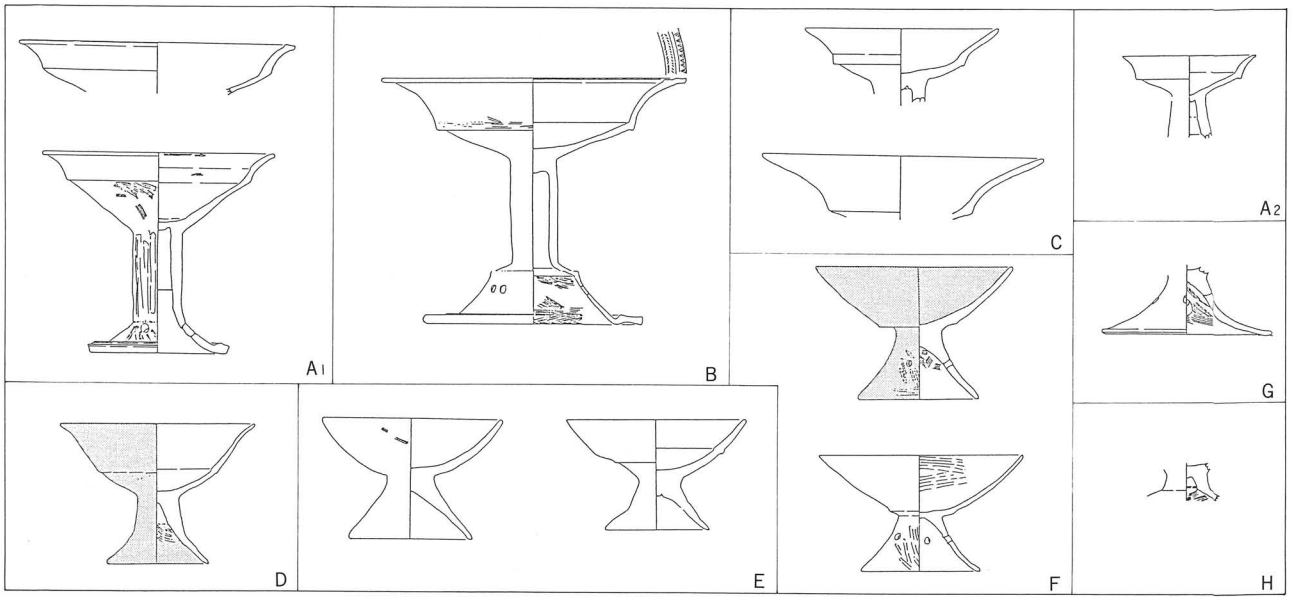


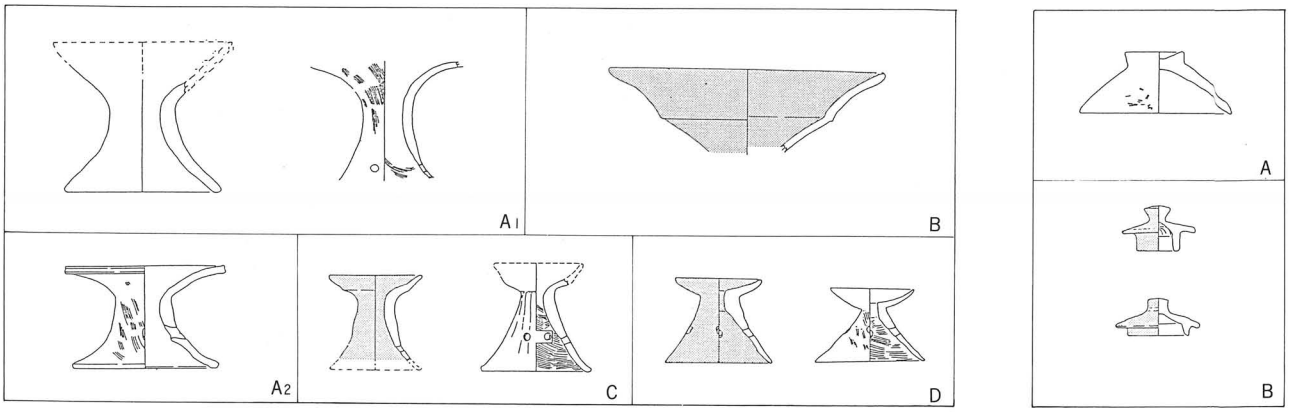
第６図　壺 分 類


A1
A2
A3
A4
A5
B1
B2
B3
B4
B5
B6
B7
C1
C2
C3
C4
C5
D1
D2
E
F
G
H
I
K1
K2
K3
K4
K5
K6
K7
K8
K9
L
M
N
O1
O2
J

第7図　甕分類







第8図　鉢・高杯・器台・蓋分類

9図15がクシ状具、第12図6は小さな竹管を束ねたようなもので施す。体部の張りは弱く、大きな中凹みの底部が付く。調整は内・外面ハケメ調整。C_1（第12図3・5）口縁が内傾する甕で、端部は面をなす。C_5（第9図12、第12図7）無文の甕で、第9図12の体部は内・外面ハケメ調整。

甕D（第11図8・17・18）D_1（17・18）上方向につまみ上げて幅の狭い口縁帯を作り出した甕。直立（18）、外傾（17）があり、体部内面にはケズリ調整。D_2（8）外傾度の大きい頸部に、真上につまみあげた狭い口縁部が付き、端部は尖り気味。体部は下膨れ状になり、調整は外面がハケメ、内面がケズリ調整。

甕E（第11図12）内傾した比較的幅広の口縁帯をもつ甕。

甕F（第12図14）口縁端部を折りまげ、斜下方向に大きく引き出した甕。

甕G（第9図9、第11図16、第12図9）上方向にわずかに引き出された幅の狭い口縁をもつ甕。第12図9の口縁外面に1条の擬凹線がめぐる。第9図9、第12図9は、体部の張りが弱い小型甕で脚の付く可能性がある。

甕H（第18図10）直立気味に引き出された口縁が付き端部が尖る小型甕。体部外面はヘラによるナデ、内面はナデ調整する。

甕I（第10図17）壺C_2の口縁部形態に似る。口縁はヨコナデによって狭い面をなし、1条の擬凹線がめぐる。体部最大径は中位よりやや上にあり、内・外面ハケメ調整。底部は強い熱を受けて赤褐色を呈する。口径13.4cm、高さ18.2cm。

甕J（第12図8）縁端部を下方向に引き出して、面をなした大型甕で、体部外面ハケメ、内面はケズリ調整。

甕K（第9図10、第11図27～29、第12図10・11・20、第13図1、第16図1～10、第17図1～6・8～10・12・16）「く」の字口縁で、端部が内傾する面をもつ甕及び小型甕を一括した。K_1（第9図10、第12図11、第17図3）口縁部全体が厚作りで、途中で外傾度を変えない甕。第9図10はヨコナデによって面をなし、体部内面は浅いケズリ調整。第12図11は端部を上方向に引き出して面をなし、体部内面はナデ調整。K_2（第12図10）「く」の字に折れる屈曲部が鋭角な甕で、縁端部を上下方向に引き出して面をなす。K_3（第16図8、第17図2・9・10）頸部内面に鋭い稜をもち、なだらかに「く」の字状にのびる甕で、狭い幅の面をもち、1条の浅い凹線を施すものもある。体部内面は、第16図8が全面に粗いハケメ、第17図2が粗いハケメと浅いケズリ、他はナデ調整。K_4（第16図1・2・4・6、第17図1・4～6・8）K_3に似るが、頸部内面は丸味をもって折れ、途中で外傾度を変える甕。端部は斜上方向につまみ上げられて面をなし、1条の浅い凹線を施したものが多い。第16図1は体部の短いもので、中凹みの小さな底部が付く。体部調整は外面が横・斜方向のハケメ、内面がナデ調整。第17図1の体部内面上半に浅いケズリが入る他は全てナデ調整。また、頸部内面に綾杉状のハケメが残るものも多い。K_5（第16図3・5・7）K_4に似るが、頸部が直立気味にのび、口縁部近くで折れる甕で体部内面はナデ調整。K_6（第12図20、第17図12）張りの弱い長い体部に外彎気味にのびる長い口縁部が付き端部は面をもつ。両資料の体部形態は異なり、第17図12には下膨れの体部が付く。第12図20の体部調整は外面が斜方向の粗いハケメ、内面がナデ調整。第17図12には外面上半に横方向のハケメ、下半に浅いケズリ、内面はハケメの後ナデ調整する。K_7（第11図27～29、第16図9・10）小型の甕を一括した。第16図9・10、第11図27の口縁端部は内彎気味におさめる。第11図28には比較的大きな平底の底部が付く。K_8（第13図1）体部径をしのぐ大きく外反する口縁が付く甕で、端部は面をもつと推定される。体部は長く、下半は尖り気味にのびる。下半外面に接合痕を残し、この部分に横方向のケズリが入る。内面はナデ調整。K_9（第17図16）口縁形態不明。底部中央に焼成前に穿孔される。体部外面には粗いハケメ、内面はナデ調整する。

甕L（第9図5）頸部の屈曲が弱く、内彎気味におさめた甕で体部内・外面は細かなハケメ調整する。

甕M（第12図23）「く」の字口縁の甕で端部は外傾する面をもつ。

甕N（第12図22）縁端部内面を肥厚気味におさめた甕。体部内面はナデ調整。

甕O（第12図16･18･19･21･23～25、第13図２、第17図７・11）「く」字口縁の甕で端部を丸くおさめたものを一括した。O_1（第12図16・18・19、第17図７・11）ゆるやかなカーブを描いてのびる甕で、第17図７の体部最大径は中位よりやや上にあり、下半は尖り気味にのびる。体部調整は、外面上半に斜方向のハケメ、下半にケズリが入り、内面は粗いハケメ調整する。O_2（第12図19・21・24・25、第13図２）口縁部の器壁が薄くなり尖り気味におさめた甕で、外彎気味のもの、直線的にのびるものがある。第12図25、第13図２の体部は球形に近く、底部は丸底になる。体部調整は外面にハケメ、内面はハケメの後ナデる。口径15.6・16.7cm、高さ24.1・25.2cm。第12図24は体部が長くなり、時期が下る可能性がある。

鉢（第８図）

鉢は、A_1～A_5・B・C・D_1・D_2・E_1～E_6・F_1・F_2がある。出土量は少ない。

鉢A（第９図17、第13図３・５・９～12）有段口縁の鉢を一括した。A_1（第13図10・12）口縁部の屈曲が明瞭で内面に稜をもつ。A_2（第13図５）口縁部に刺突列点文、体部上半に平行沈線文、刺突列点文を施す鉢で外面は細かなハケメ調整する。A_3（第９図17、第13図９）幅広の口縁部が付き赤彩する。A_4（第13図３）大型の鉢で、口縁部はヨコナデ、体部はハケメ調整。A_5（第13図11）扁平な体部で底部との境はない。頸部の屈曲が弱く段が不明瞭な鉢で、口縁外面に浅い擬凹線がめぐる。

鉢B（第９図16）２段に折れる鉢で、薄く仕上げられている。

鉢C（第13図４・６）口縁部が「く」の字状に折れた鉢。６は平底の底部が付き、体部外面はハケメ、内面はナデ調整。

鉢D（第13図７・８、第17図13）口縁部と体部の屈曲が凹み程度の鉢。D_1（第13図７・８）「ハ」の字状に開いた大きな口縁部に丸味をもった体部が付く。７は外面・口縁部内面を赤彩する。口径10.4cm、高さ5.3cm。D_2（第17図13）脚が付くと推定される鉢で、内・外面赤彩。

鉢E（第15図６～18、第18図11）その他の鉢を一括した。E_1（第15図６～８・10～13）小さな底部に縁端部は内傾気味におさめた鉢。E_2（第15図９）皿状の鉢。E_3（第15図15・18）体部途中で屈曲し、縁端部が外傾気味の鉢。E_4（第15図14・16）椀状の鉢。E_5（第18図11）中型の鉢で内面は浅いケズリ。E_6（第15図17）中型の鉢で口縁部は折れて外傾する。

鉢F（第９図13、第13図13～15、第18図12）有孔鉢。F_1（第13図15）平底の底部に５ヶ所の穿孔がある鉢。体部外面ハケメ、内面はケズリ調整。口径12.8cm、高さ14cm。F_2（第９図13、第13図13・14、第18図12）通有の有孔鉢。第９図13は内・外面ハケメ調整する。

高杯（第８図）

高杯は、A_1・A_2・B・C・D・E・F・G・Hがある。出土量は少ない。

高杯A（第14図５～７、第15図20）A_1（第14図５～７）口縁部の長さが体部より短いものを一括した。縁端部は内傾する面をもつもの、内面を肥厚したもの、丸くおさめるものがある。第14図７は深い杯部に、円筒状の脚部が付く。脚端部は外側に肥厚し面をもつ。脚屈曲部に３個の円孔を穿つ。口径24cm、高さ21.1cm。A_2（第15図20）小型の高杯でA_1と同形態。口径14cm。

高杯B（第14図１・３）口縁部高が体部高より大きい高杯。３は縁端部内側を２段に肥厚しスタンプ文を施す。脚は棒状有段脚となり、台端部は上方にわずかに折り返され、ほぼ水平に幅広の面をもつ。台部中位よりやや上に２個１対の円孔を３ヶ所に穿つ。口径31.8cm、高さ26cm。脚台部径22.4cm。

高杯C（第14図２・８）口縁部と体部の長さが同程度か、越えるもので端部は丸くおさめる。

高杯D（第14図10）杯部が有段口縁状をなす高杯。屈曲は口縁部を肥厚させただけで形骸化する。口縁部は直線的に開き、端部で折れてさらに外傾度を増す。脚はわずかに弧をえがきながら開く。杯部と脚部の高さはほぼ等しく杯

部外面、脚部内・外面を赤彩する。

高杯E（第14図９・11）内彎気味にのびる杯部に、直線的に開く脚部が付く。第14図９の杯部には有段口縁状の形骸化した段が付き、縁端部は丸くおさめる。口径18.8cm、高さ11.6cmを測り、杯部と脚部の高さは同程度。

高杯F（第14図12・13）内彎気味に大きく開いた杯部に、直線的に開く脚部が付く。縁端部は丸味をもっておさめ、13の内面にはハケメ調整痕を残す。脚部中位には、12が３個、13が５個の円孔を穿つ。杯部と脚部の高さはほぼ同程度。13の口径21.2cm、高さ12.3cm。

高杯G（第14図18）脚部破片。弧を描きながら大きく開く高さの低い脚で、中段よりやや上位に４個の円孔を穿つ。調整は外面がヘラミガキ、内面ハケメ調整。

高杯H（第18図19）脚部破片。脚部中位で屈曲し、大きく開く。

器台（第８図）

器台は、A_1・A_2・B・C・Dがある。出土量は少ない。

器台A（第15図１～４）筒状の器台。A_1（２～４）全形を知り得るものはない。受部と脚部がほぼ相似形でラッパ状に開く。２の脚部に円孔を穿った痕跡を残す。A_2（１）ラッパ状に開く脚部に外上方に直線的にのびる受部が付く。受端部は面をもち、１条の浅い擬凹線を施す。受部径が脚部径よりわずかに大きく、16.7cm、高さ11cmを測る。脚部中位に３個の円孔を穿つ。調整は外面ハケメの後ヘラミガキ、内面にヘラミガキ、ヨコナデを施す。

器台B（第14図４）有段口縁の大型器台で、受部の内外面を赤彩する。

器台C（第15図28、第18図16）有段口縁状の受部が付く小型器台。第18図16の脚部はわずかに弧を描きながらラッパ状に開き、外面ヘラミガキ、内面ハケメ調整する。第15図28に２個１対の円孔、第18図16は２個１対の円孔を３ヶ所に穿つ。第15図28は全面赤彩する。

器台D（第15図27・29、第18図14・15・17）内彎気味にのびた小さな受部にラッパ状に開いた脚部が付く小型器台で受端部は丸くおさめる。第18図17は脚のしまりが強く、全体に薄作りで脚部内面をハケメ調整するなど他の個体と趣きを異にする。脚部中位に円孔が穿たれ、第15図27・29、第18図15が３個、第18図14・17が４個認められる。また第15図27、第18図14は全面赤彩する。高さは7.8～8.4cm。

蓋（第８図）

蓋は、A・Bがある。全形を知り得る資料が少ない。

蓋A（第15図23・26）笠状に開いた体部に、中央部が凹む大きなつまみが付く。縁端部は尖り気味におさめる。26は口径16.2cm、高さ6.5cmを測る。

蓋B（第９図14、第15図24・25）下方に長くのびた口縁帯をもつ小型蓋。つまみは、ボタン状のもの、擬宝珠状のものがあり、体部は直線的に開く。外面赤彩。

石器

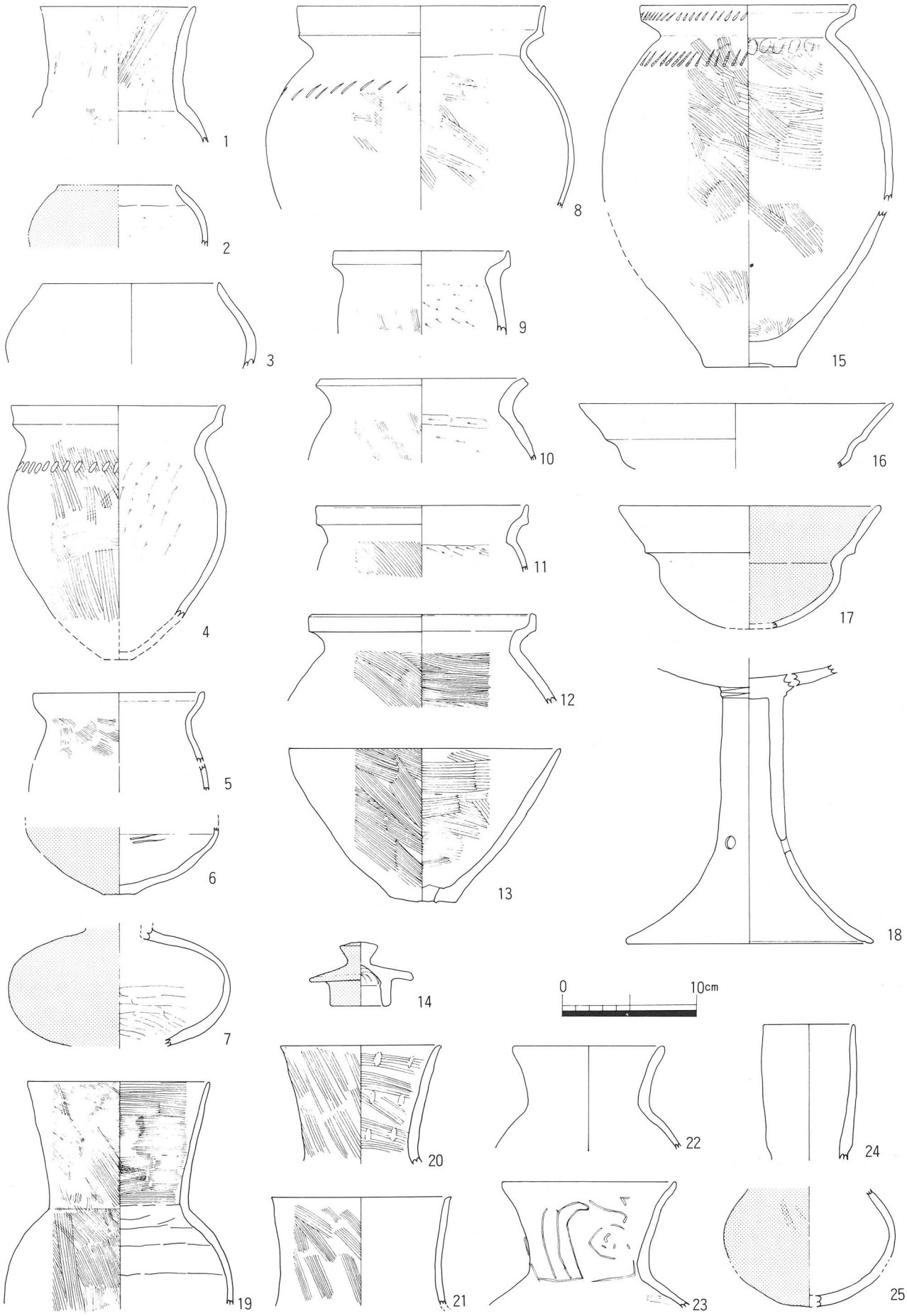
石器類は、弥生・古墳時代の遺物包含層から出土したものが大部分であるが、図示した第20図44は住居跡、45は穴－77からの出土である。穴－77出土の45は奈良時代の遺物であるが、ここで記述する。

未成品（第20図41・43）緑色凝灰岩で、２点とも磨き痕を残した面をもつ。

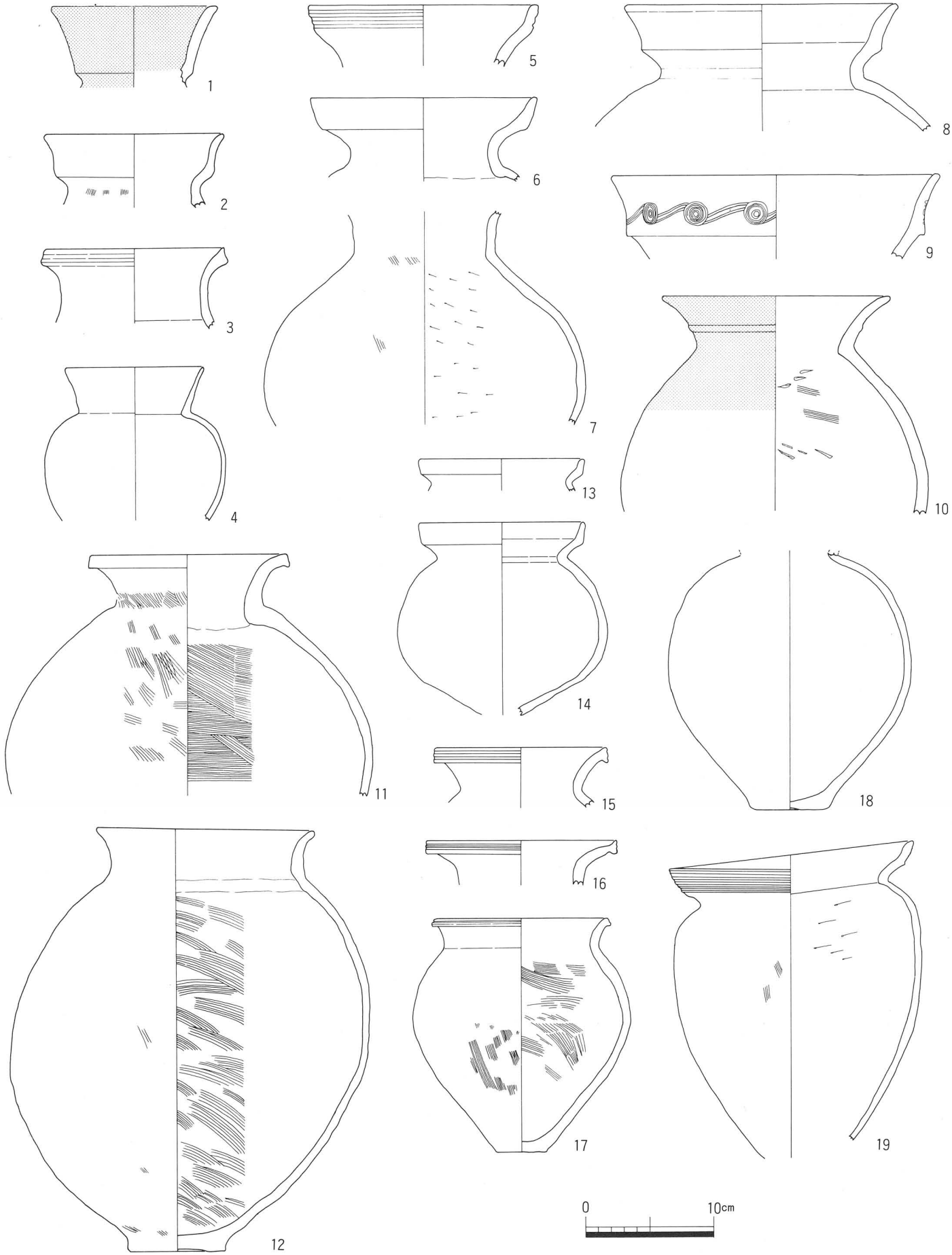
砥石（第20図40・42・44～46）砂岩製（42・44・46）、泥岩製（40・45）のものがある。全面に擦痕を残すものが多く、40・46は溝状の筋、42・46は敲打による凹みをもつ。45は側面を主に使用し、彎曲した凹みとなる。また裏側側面には深い切れ込みが入り、鉄器用であろう。

土製品

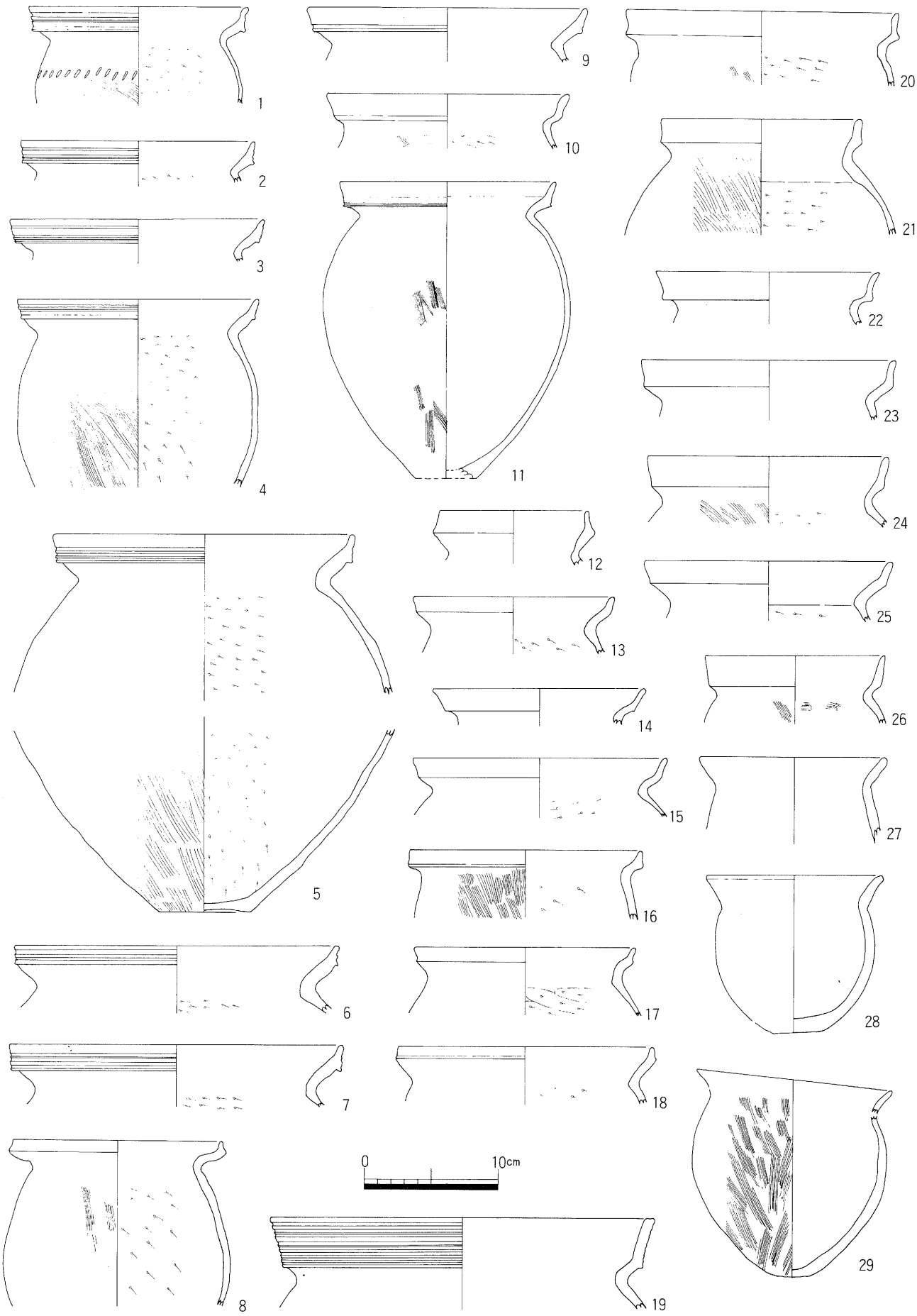
紡錘車（第15図41）１点のみ。完形品で直径4.8cmを測る。（池野）



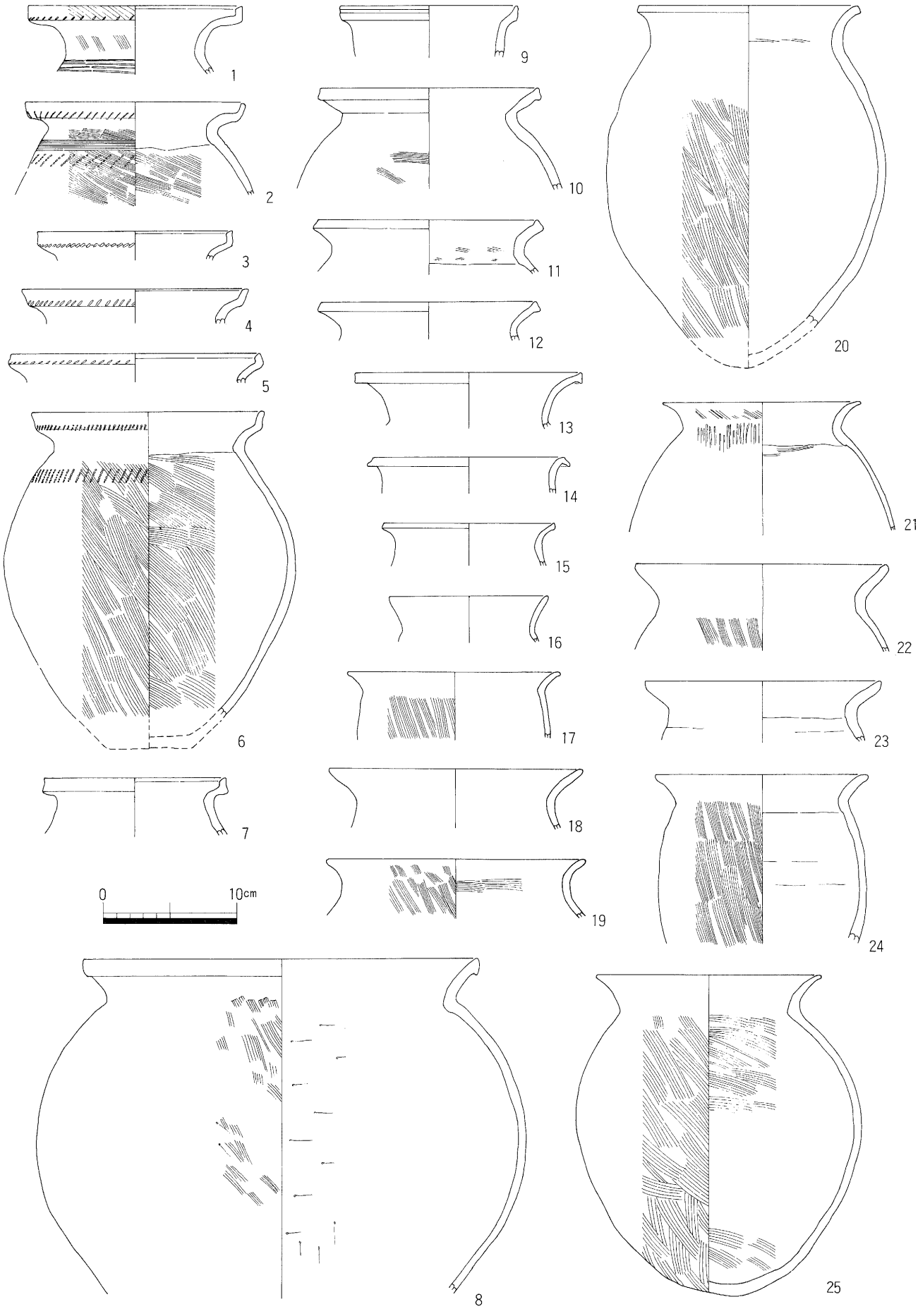
第９図　遺物実測図　1･3･6･18.穴-49　2.穴-05　4･8.住-01　5.穴-25　7･9･10･11･14･16.溝-12　12･13･15.穴-67　17.穴-12　その他.包含層



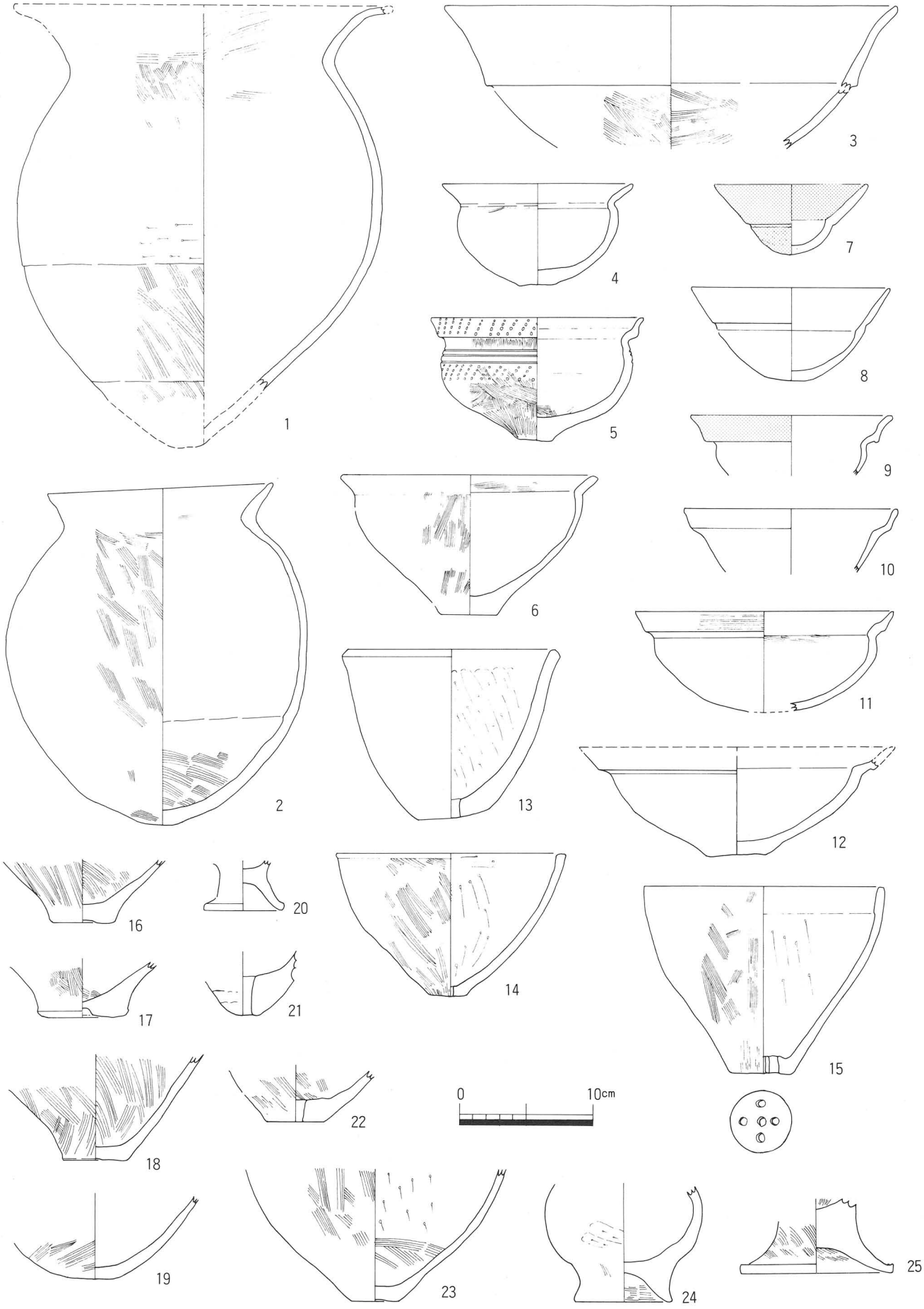
第10図　遺物実測図　包含層



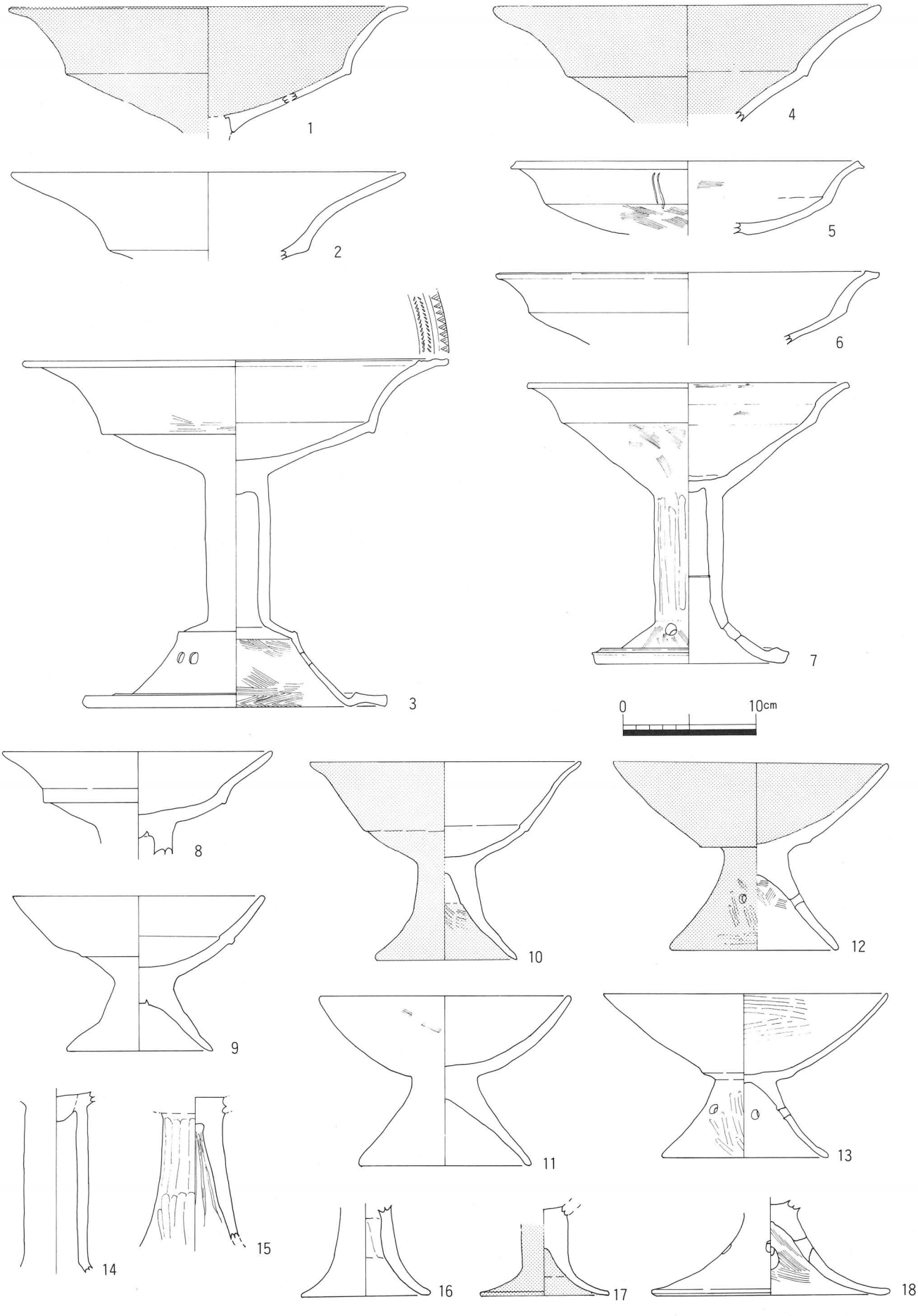
第11図　遺物実測図　10･20.溝-01　その他.包含層



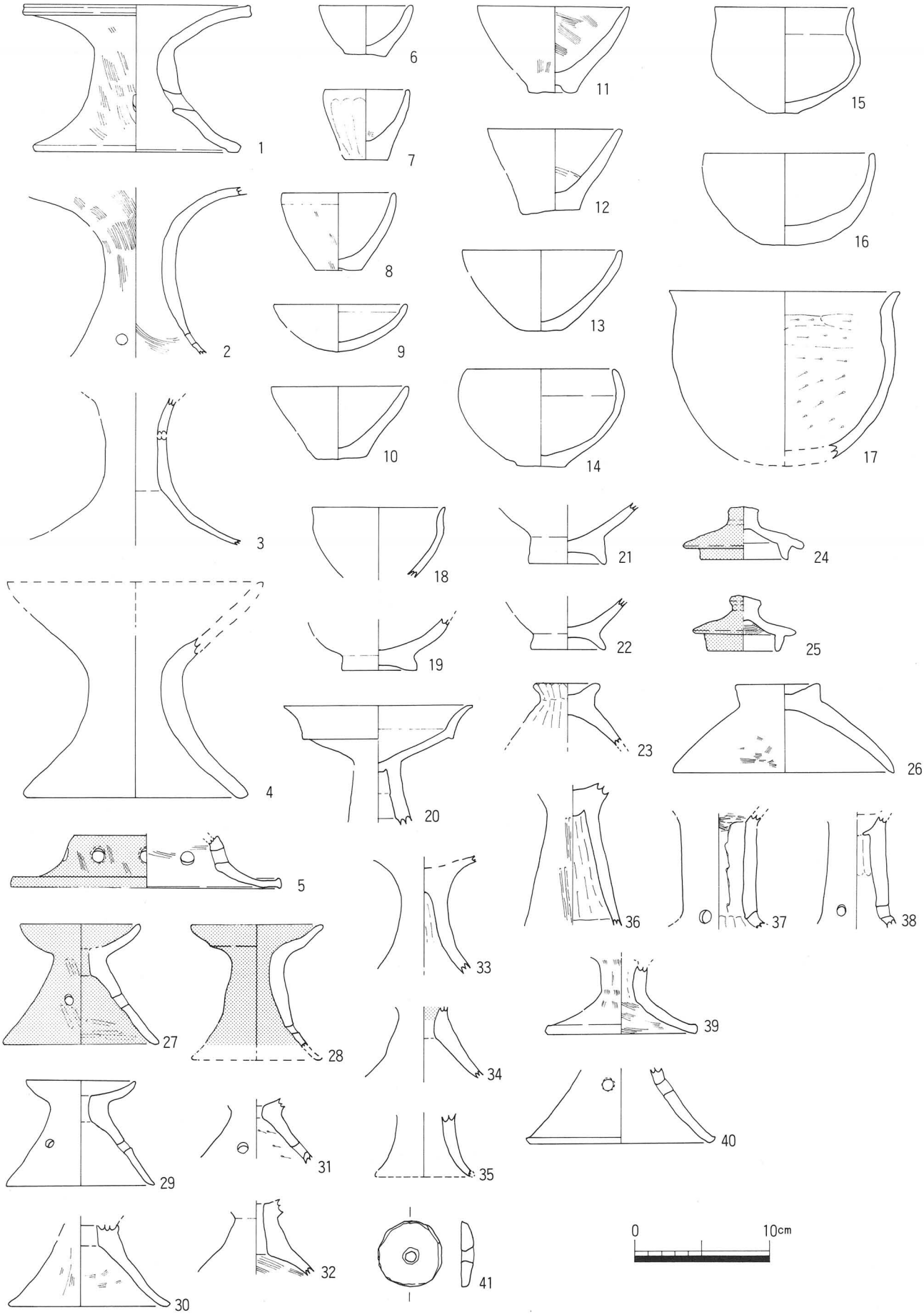
第12図　遺物実測図　17.溝-02　その他.包含層



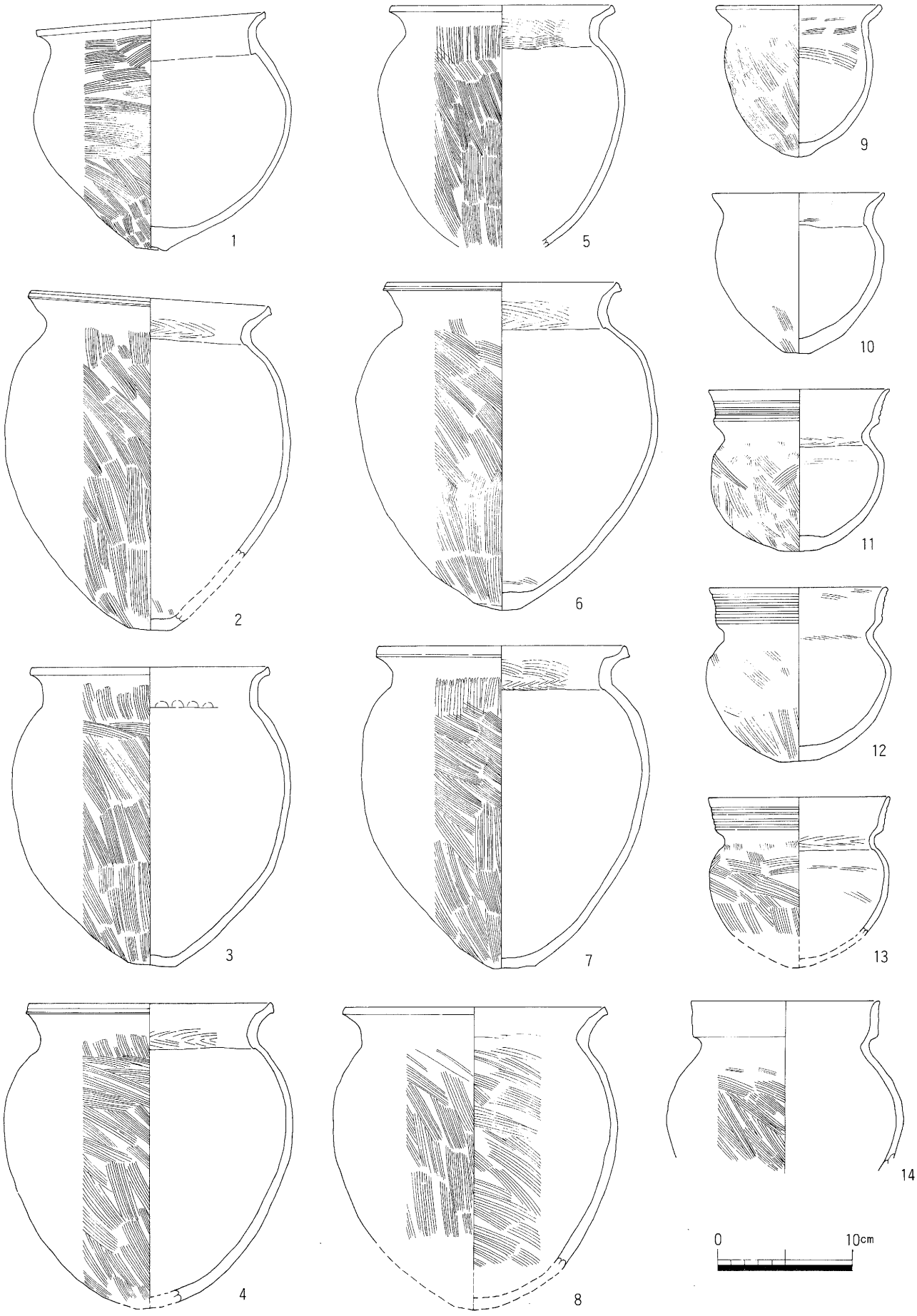
第13図　遺物実測図　包含層



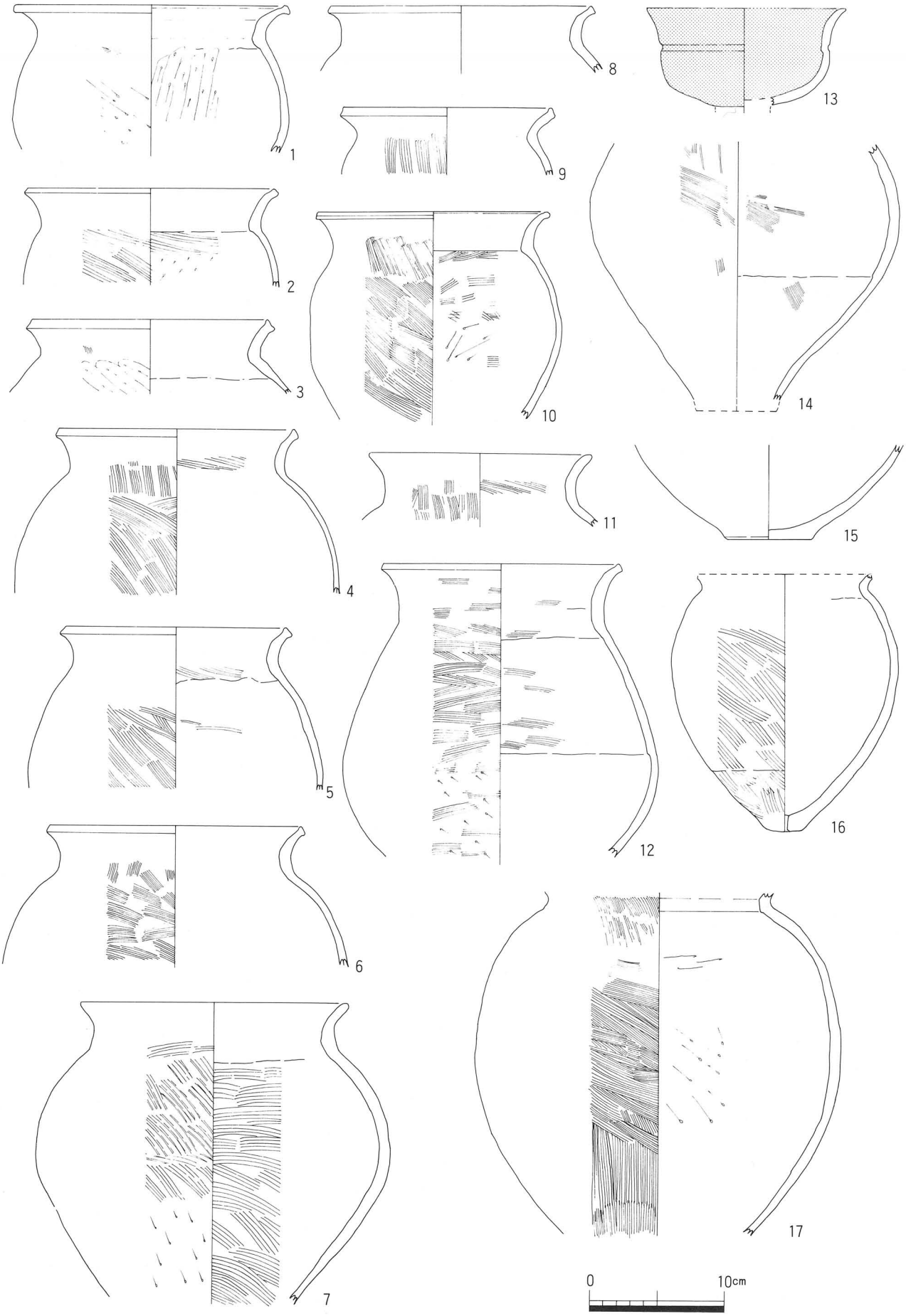
第14図　遺物実測図　15.溝-01　16.溝-02　その他.包含層



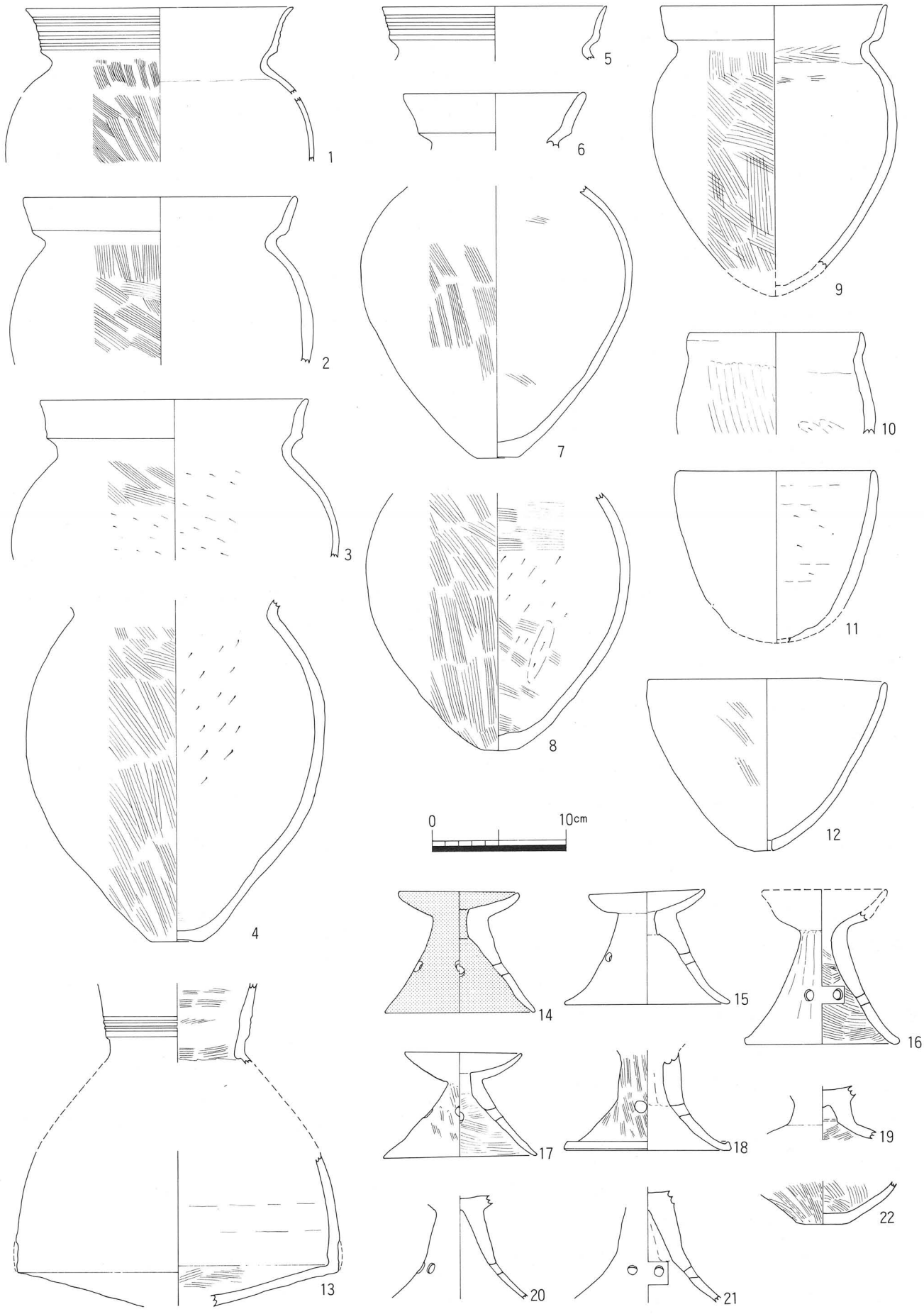
第15図　遺物実測図　23.溝-01　その他.包含層



第16図　遺物実測図　X5Y5区土器ダマリ



第17図　遺物実測図　X5Y5区土器ダマリ



第18図　遺物実測図　X5Y5区土器ダマリ

(6) 古墳時代後期～平安時代の遺物

遺構に伴った遺物は、穴－77出土遺物のみであるが、穴－76周辺遺物も完形品に近いものであり、一括遺物として取り扱えるであろう。他は、茶褐色土、暗茶褐色土、暗青灰色土、砂層、砂礫層、床土などからの出土で調査区全体に広がる。出土総数は少なく、相対的には西側からの量が多い。土器以外の遺物としては羽口、砥石がある。

穴－77出土遺物（第19図８・14）８は外方向に長くのびた牛角状の把手が付く盌。口縁部は短く「く」の字状に外反。体部に張りがなく、底部は丸底で体部外面ハケメ、内面ハケメ、ナデ調整。口径11.6cm、高さ9.5cm。14はロクロ成形された長甕で、口縁端部は内傾した面をもち平直におさめる。体部の内・外面上半はカキメ調整。下半は熱を受けて不明瞭であるが、内面はロクロナデ調整、口径20.2cm。他に、須恵器杯Ａの小破片、砥石が出土している。

穴－76周辺出土遺物（第19図９・12・13）９は「く」の字状に外反した小型の甕で口径が体部径を上回る。体部最大径は下位にあり、底部は丸底をなす。体部調整は外面上下方向の粗いハケメ、内面が横・斜方向の細かなハケメ。口径16.4cm、高さ15.5cm。12・13は大型の甕。口縁部は、外彎しながら「く」の字状に外反し、体部径を上回る。体部最大径は上位にあり、砲弾形をなして底部にのびる。体部内・外面ハケメ調整。口径28.4、25.4cm。

包含層出土土師器

甕（第19図１～７・10・11）１は小型甕。「く」の字状に外反した口径部に張りのない体部が付き底部は丸底。体部調整は外面に細かなハケメ、内面ハケメ、ナデ併用。口径14.4cm、高さ12.7cm。２は体部がやや張る小型甕で、縁端部は外彎気味。体部内外面ハケメ調整。３～５は頸部内面に鋭角な屈曲稜をもつ甕で、３・５の口縁は内彎気味にのびる。体部外面は粗いハケメ調整し、５の内面は上下方向のハケメ。10は小さな「く」の字口縁が付き、体部は直線的。内外面ハケメ調整。11は鋭角に折れた「く」の字口縁の甕で、外面斜方向の粗いハケメ、内面横方向の粗いハケメ調整。

小型土器（第19図18）コップ状を呈し、平底の底部が付く。体部内外面粗いハケメ調整。口径7.4cm、高さ6.4cm。

椀（第19図19）縁端部を外反気味におさめ、内外面ナデ調整。口径7.7cm、高さ5.6cm。

包含層出土須恵器

杯Ｂ蓋（第20図１～11）口径10.7～16.6cmのものがある。１・２は上末窯跡群の製品。頂部に右まわりのロクロ削りを施す。縁部は小さく屈曲し、端部は短く外傾（1）、垂下（２）する。３～10の頂部はなだらかに縁部に至り、頂部外面に右まわりのロクロ削りを施す。縁端部は明瞭な稜をもって折れ、先端は外傾するものが多い。５は先端部が垂下して古い様相。この他に、単に折り曲げて、先端が丸味をもって外傾するものもある。11は頂部外面に右まわりのロクロ削りを施し、縁端部は折り返し、まき込む形状であるが稜を残す。

杯Ｂ（第20図12～24）口径8.0～15.3cm、高さ2.8～4.3cmのものがある。高台は低く、外端部があがるものが多い。14の口縁部は直線的に外傾し、端部近くでさらに外傾度を増す。口縁部外面に沈線をめぐらすものはない。24は上末窯跡群の製品で、先端が尖り気味の高い高台が付く。

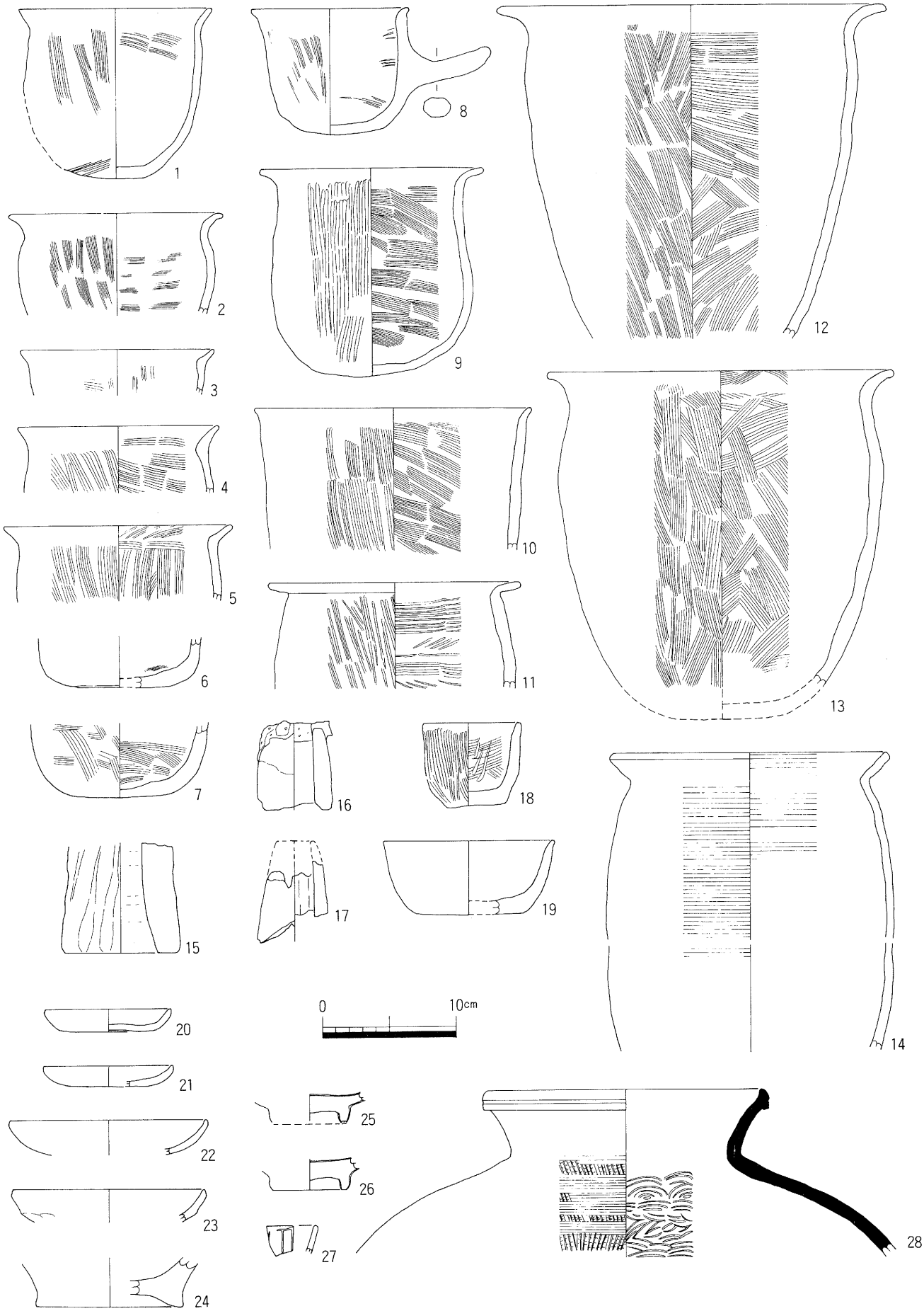
杯Ａ（第20図25～39）口径9.4～13.5cmのものがある。30・32・35は全体に厚作りで口縁部と底部の境に稜をもち、底部は平底。39は底部糸切りの杯で上末窯跡群の製品。

甕（第19図28）「く」の字状に外反し、縁端部を肥厚させ、外面に１条の沈線をめぐらす。体部は外面にタタキメ、カキメ、内面にアテ具痕を残す。口径20.5cm。

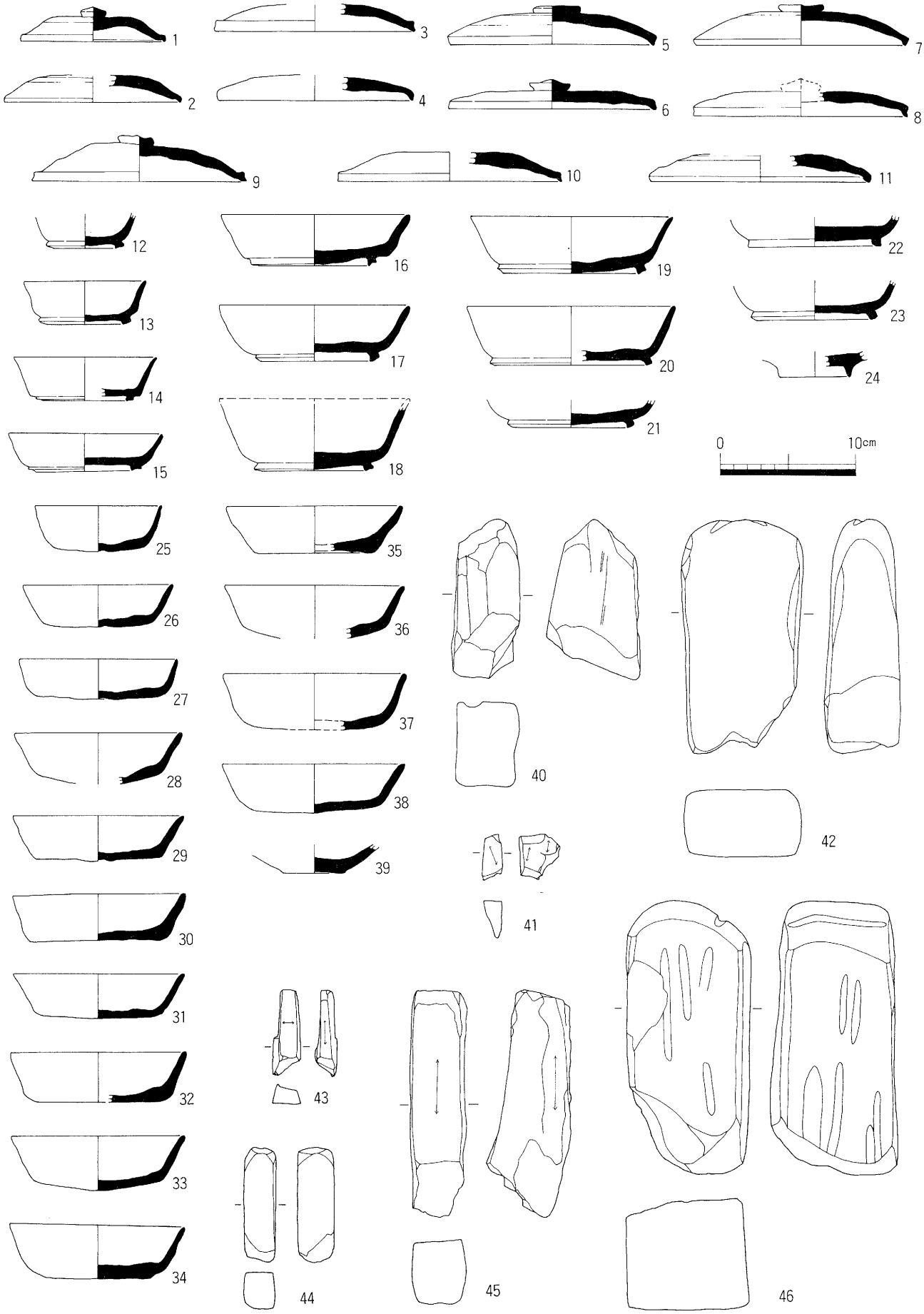
羽口（第19図15～17）調査区西側から出土。15は基部で表面にしぼり痕を残し、16は先端部に溶着物が付く。

古墳時代後期～平安時代の遺物について

第19図１・28は古手の様相をもち、６世紀代の遺物と推定。遺構出土の土師器及び須恵器杯Ｂ蓋、杯Ｂ、杯Ａの大部分は８世紀前半の遺物であろう。この中でも５などは初頭頃。また、上末窯跡群の製品と推定される１・２の杯Ｂ蓋は９世紀前半、24・39は９世紀末から10世紀初頭、杯Ａ30・32・35などは８世紀後半代と推定される。（池野）



第19図　遺物実測図　8･14.穴-77　9･12･13.穴-76周辺　6･20～24.溝-01　その他.包含層



第20図　遺物実測図　(40・41・43・44の縮尺は½)　44.住-01　45.穴-77　その他.包含層

(7) 中世の遺物

遺物には、木製品、土師質土器、中国製磁器、珠洲がある。

木製品（第21～24図、図版19～24）溝－01より大量の木製品が出土した。木製品は形態から大別すると、生活・生産用具（箸・漆器・折敷・曲物・底板・竹製容器・糸巻き・物指状木製品・工具の柄・杭・部材等）、祭具（板碑状木製品・陽物・人形・刀形等の木製模造品）、用途不明品に分けられる。以下、この分類に従って述べる。

箸（第22図１～14・17・18・20・21・23・27～30・32・35）未成品、小片を加えて計40片出土している。完形品は10本のみで長さは17.6～25.4cmの間に収まる。平均22.7cm。側面を面取りして円柱状にし、両端を先細りに削る。中央部の断面は多角形及び隅円方形を呈する。Ｂ～Ｈ区にかけて出土したが、Ｂ・Ｃ区には全割合の70%以上が集中する。

漆器（第23図40～47）Ｂ～Ｄ区にかけて８点出土。全て横木取りの挽き物で、内外面黒漆塗りである。底部外面には漆は塗られていない。40は口径15.8cm、41は17.8cmで、口縁部がわずかに内彎する椀。45は口径10.0cm、高さ1.6cmを測る。44は底径7.2cmを測り、45と共に高台付きの皿と思われる。46は口径14.3cm、高さ4.2cmの椀で、42と共に底部の外縁に凹線を入れ、中央部を浅く削って、擬高台を造り出している。47は口径15.1cm、高さ3.5cmを測り、底部の周縁を荒く削って丸く仕上げる。その中央には径0.2cmの穴４ヶ所と、「メ」状の刻みがあり、その横には逆「ハ」字状に、約2cmの菱形の２孔が、内面に向かって穿孔されている。菱形の２孔は、切れ長の目のようにも見え、お面として使用された可能性もある。何らかの呪術的な祭祀具として転用されたものと思われる。

折敷（第23図６・７）折敷の底板と思われるもので、角を削って丸く仕上げている。長さは共に16.0cm。厚さは６の方が薄めである。側縁部中央には、綴じ合わせのための１対の小孔がある。

曲物（図版20の１）高さ約21cm、残存幅約67cm、厚さ0.3cmの曲物の側板の一部である。幅0.75cmの桜皮の紐で綴じ合わせており、綴じ方は１列外６段綴じである。上縁下2.5cmの所に、幅約1.5cmの箍（たが）をめぐらして締め上げている。箍は桜皮の紐で側板に固定されている。内面には縦方向のケビキが入れてある。直径は不明だが、大きめのものと思われる。

底板（第23図29）約半分残存で、直径約15cm、厚さ0.6cm。片面のみ外周端部を浅く削り落とし、表裏の区別をつけている。裏面の全面には無数の刃物痕があり、俎板に転用されたものと思われる。

竹製容器（第23図25）直径約３cmの竹を節で切って筒状の容器としたものである。長さ12cmで、口縁部下に径約0.4cmの小孔をあける。破砕しているため、断片のみ図示した。

糸巻き（第21図19・30）糸巻きの構造は、数本の枠木とそれを固定する横木、横木の心に通す軸棒からなる。枠木の腹面に２ヶ所の孔をあけ、そこに２枚の板を十字形に相欠きでかみ合わせた横木をはめ込んで固定するものである。19はその枠木である。腹面を平坦にし、横木との結合部から両端に向かって削り込む。背面は丸く仕上げ、断面はカマボコ形を呈する。全長19.3cm、幅1.75cm、結合部の孔は径１cmを測る。30は横木の一枚で、中心に径0.9cmの軸孔をあけ、両端を棒状に削る。全長10.3cm、最大幅2cmである。上面に「□さい」の墨書がある。

物指状木製品（第21図31・32）細板に等間隔の刻線を施したものである。31は幅1.4cm、厚さ0.3cmで、間隔は4.3、4.9、5.3cmと不均等である。32は幅1.8cm、厚さ0.6cmで、3.2cm毎に刻線が施されており、一寸刻みの物指と思われる。

柄（第21図20・22）20は径2.4×1.9cmの扁平な丸木の一端に0.7×0.3cmの長方形の茎孔をあける。茎を焼込んで装着したためか、先端は焼け焦げている。刀子又は鉈の柄かと思われる。22は径2.8cmの心持丸木材。柄頭先端は２方向から切り込んで折り離している。

杭（第22図61、第23図31・38・39、第24図３・15・16・18・19）太杭は第24図３のみで、直径４cm、稜を削って円柱状にし、先端部を尖らせる。上部は鉈のようなもので、数回に渡り内面に向かって切り込み、断ち切られている。他は、径２cm以上、長さ30cm以上で、一端を尖らせているものを細杭として分類したが、用途ははっきりしない。

部材（第21図14・15・29・34、第23図13・18・32、第24図５～８・12）抉り、又は装着痕等をとどめるものを部材

としたが、用途が判明するものは無い。第21図29は一端に出枘(ほぞ)をつくり、その頂部には長さ2.5cmの楔を打込んでいる。もう一端は鑿状に削られており、何かの支脚かと思われる。全長22.1cm。第21図34は一端を両側端より抉ってT字状にする。他方の端部は瘤状に膨らみ、その基部の凹みは装着痕と思われる。全長38.3cm、幅3.2cm、厚さ1.6cmである。

板碑状木製品（第21図１～８）計８本がC・D区より出土した。頭頂部を圭頭に削り出し、両側端に２ヶ所の切れ込みを入れて板碑状にする。下端は先細りに削る。１～６は長さが25cm内外と揃っており、７のみ幾分短い。幅は1.4～1.8cm。厚さは0.2～0.3cmで、１・６と７は0.45・0.6cmと厚手になっている。表面には、８本の内６本に墨痕が認められ、「大般若経」、「大般若（心）経」と読める。

駒形（第21図９）長さ2.9cm、最大幅1.8cm、厚さ0.45cm。将棋の駒形をしており、表面に「口（兵）」の墨痕。

陽物（第21図12）残存長6.3cm。径1.8cmの心持丸木の一端に、浅い抉を巡らして亀頭部を作り出している。先端部は細かく削って丸く仕上げている。側面は加工していない。

人形（第21図13）残存長27.7cm。幅3.3cm、厚さ0.3cmの薄板の一端を先細りに削る。両側端に焼いて切れ込みを入れ、頭部を作り出している。

形代（第21図10・11）10は厚さ0.15cmの薄板の側縁の一部を鋸歯状に削っており、表面に黒痕が見られる。残存部だけでは何の形代か判明できない。11は全長約８cm、厚さ0.1cmで、匙形に削られているが、何を形取ったものかは不明。

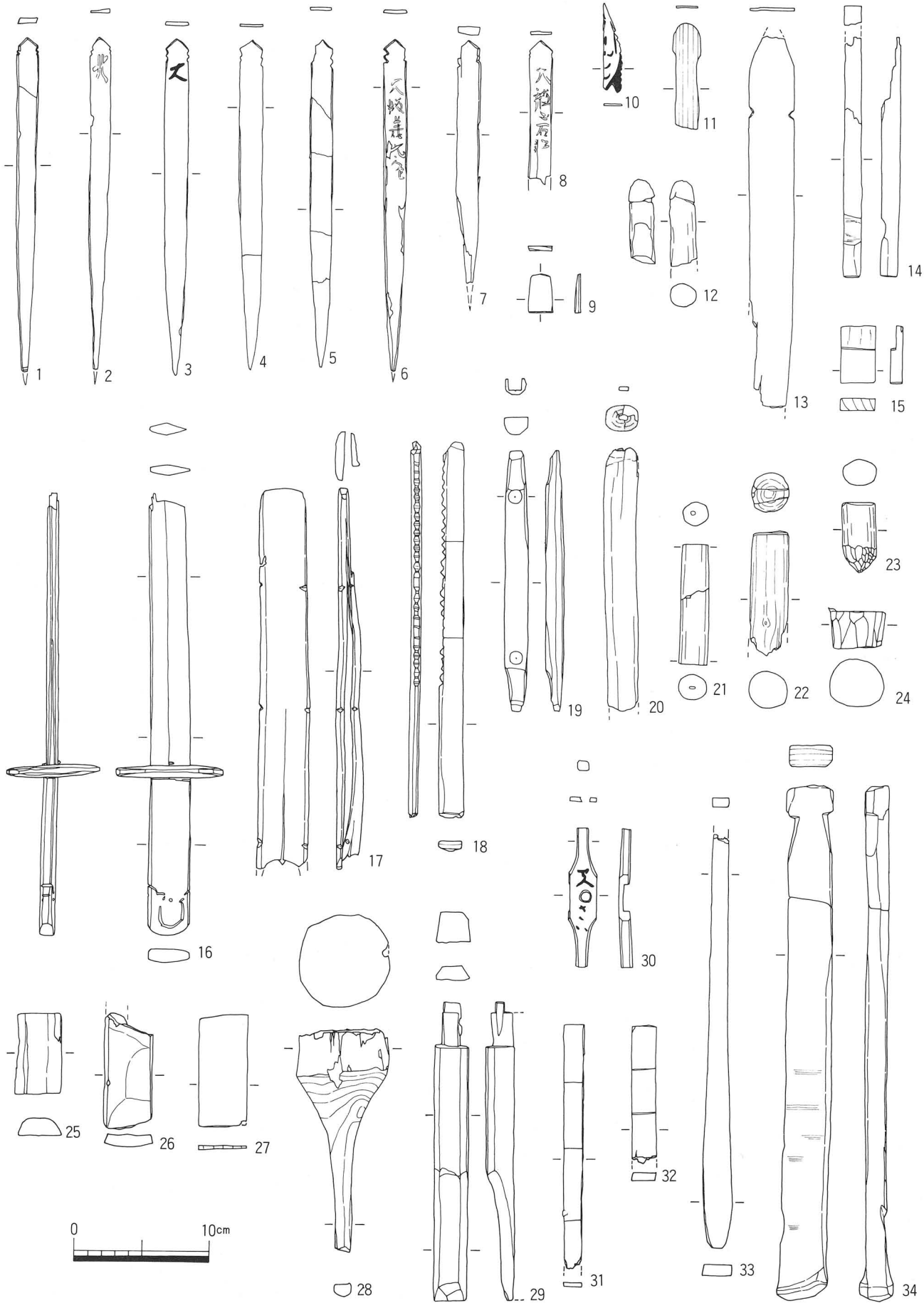
刀形（第21図16）長さ約33cm。鍔を有する鎬造の刀を模したものである。刀身の先端は刃物で切り取られているが、非常に丁寧に作られている。刀身の幅3.0cm、鍔は最大幅約7.0cmの隅円長方形で、外側に向かってやや薄く削る。周縁は削って丸く仕上げ、刃身側の上部中央に小孔をあけ、木釘をはめ込んで固定している。柄頭の両端には切れ込みを入れ、片面には「ひ」の字状の模様を彫り込んでいる。「ひ」の字の中央には小孔が貫通しており、何かに打ち付けたか、紐を通して吊り下げたのかもしれない。

用途不明品（第21図17・18・21・23・24・25・27・28・33、第22図15・16・19・22・24～26・31・33・34・36～60、第23図１～５・８～12・14～17・19～24・26・28・30・33～37、第24図１・２・４・９～11・13・14・17）第21図17は幅3.8cmで、表裏から両端に３ヶ所の刻み目を施す。頭部は丸く仕上げ、下方に向けて「∩」形状に続くものと思われる。側面は裂けており、人為的に裂いたものかは不明。第21図18は長さ約28cm、幅1.75cmの板の片側を0.6～0.7cm間隔、深さ0.3cmに抉って鋸の歯の如くに作り出しているもの。頭部を丸く仕上げ、片面には浅い刻線が２ヶ所ある。このような製品は古くは８世紀前半の平城宮６ＡＬＧ区ＳＤ5785等から出土しており、県内でも上市町江上Ｂ遺跡から断片が出土している。第21図21は全長約９cm、径約1.9cmの円柱状を成し、中央に扁平な孔が貫通。第21図23は一方の先端が細かく丁寧に削られており、独楽の未成品か。第21図24は長さ2.8cmの栓状木製品。第21図28は最大径6.7cmの外形が漏斗形をしたもので、先細りになる部分は摩滅している。第21図33は断面が長方形で外形が匙形を呈するもので、後に破片が見つかり、全長48cmと判明。第23図１～４は側面を面取りして先端を尖らせた木針状木製品。他にもC区だけでも整理箱２杯の加工木が出土し、長さ50cm以下、幅２～３cmの棒・板状の本片がほとんどである。

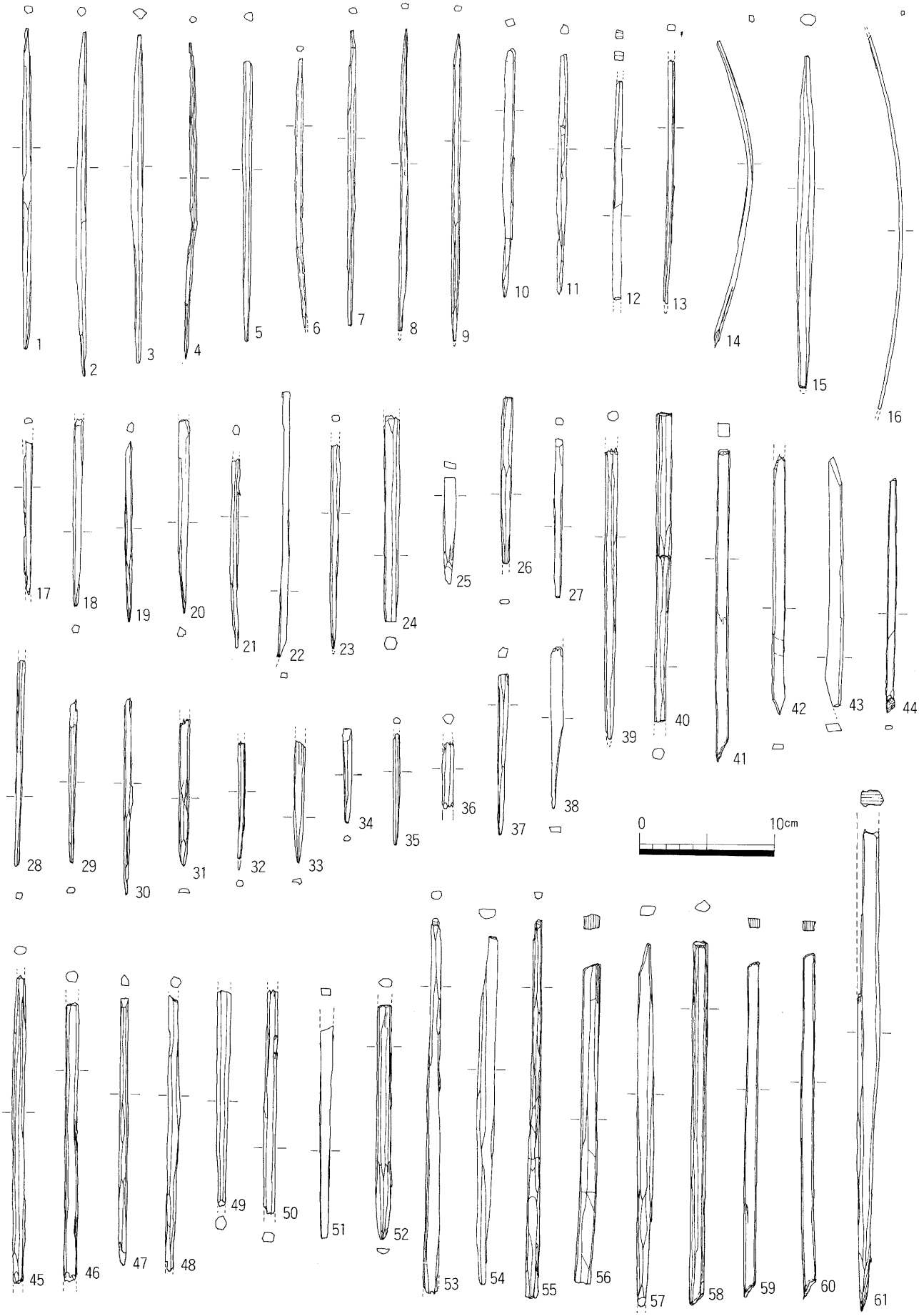
土師質小皿（第19図20～24）溝－01より出土。皿と鉢がある。皿は手捏ね成形によるもので、内外面にヨコナデを施す。20は口径9.3cm、高さ1.7cmで、体部はゆるやかに立ち上がり、端部を丸くおさめる。23は口径14.3cm、体部上半のみヨコナデ調整し、端部にはヨコナデによる段を有する。24は付け高台の鉢の底部と思われる。底径は11.0cmを測り、内外面はナデ調整。13世紀前半頃と思われる。[注1]

中国製磁器（第19図25～27）青磁が３点出土している。25は表採品。26は暗青灰色土層中、27は旧耕作土中より出土。25・26は底部片で、畳付けまで厚く施釉され、内面見込みには印花文が施されている。14～15世紀のもの。27は外面に形骸化した蓮華文を有する口縁部片である。16世紀頃。全て、淡緑色を呈し、龍泉窯系のものと思われる。

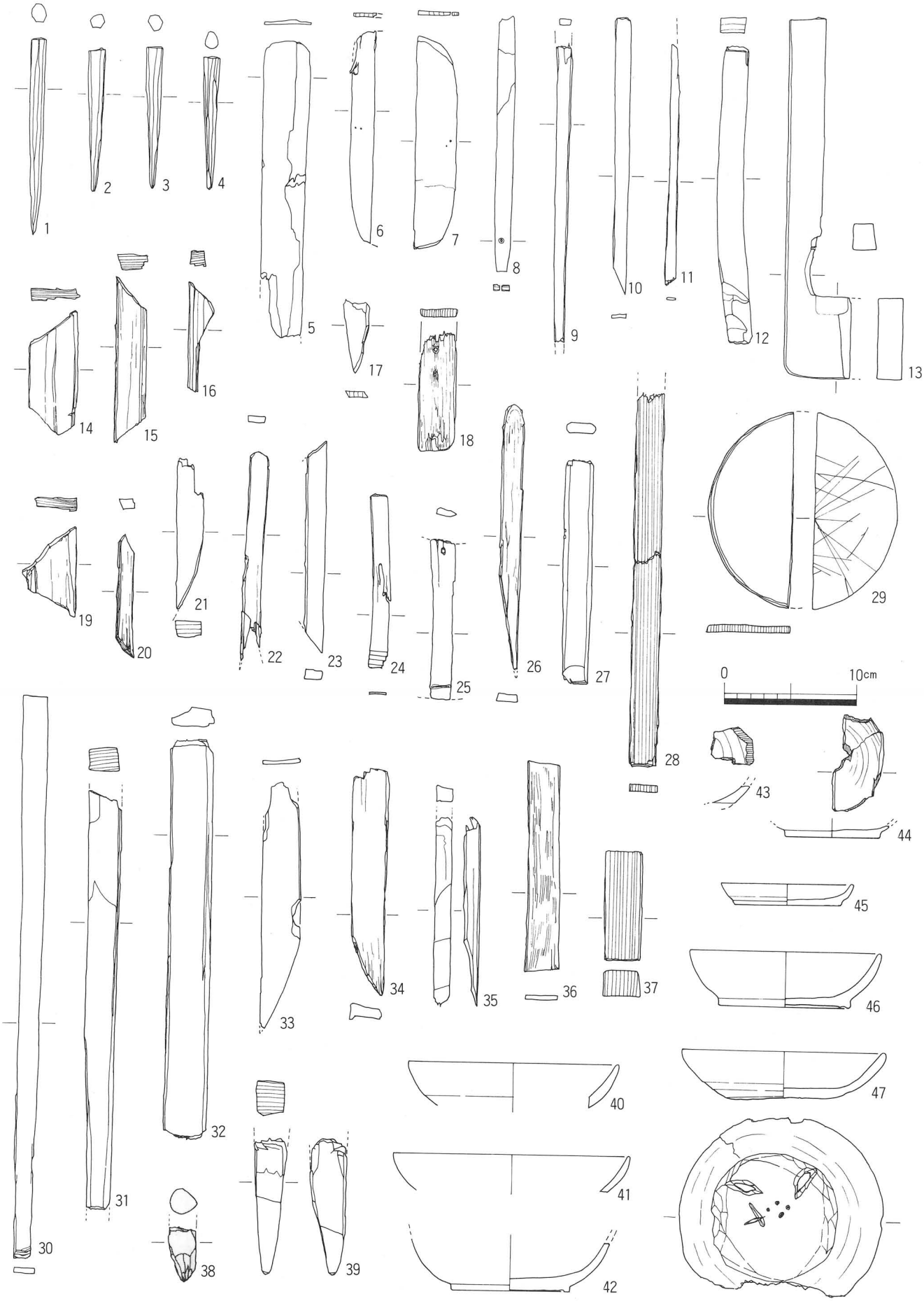
珠洲　表土・旧耕作土中より43片出土している。全て小破片で、全形を知り得るものはない。（北川）



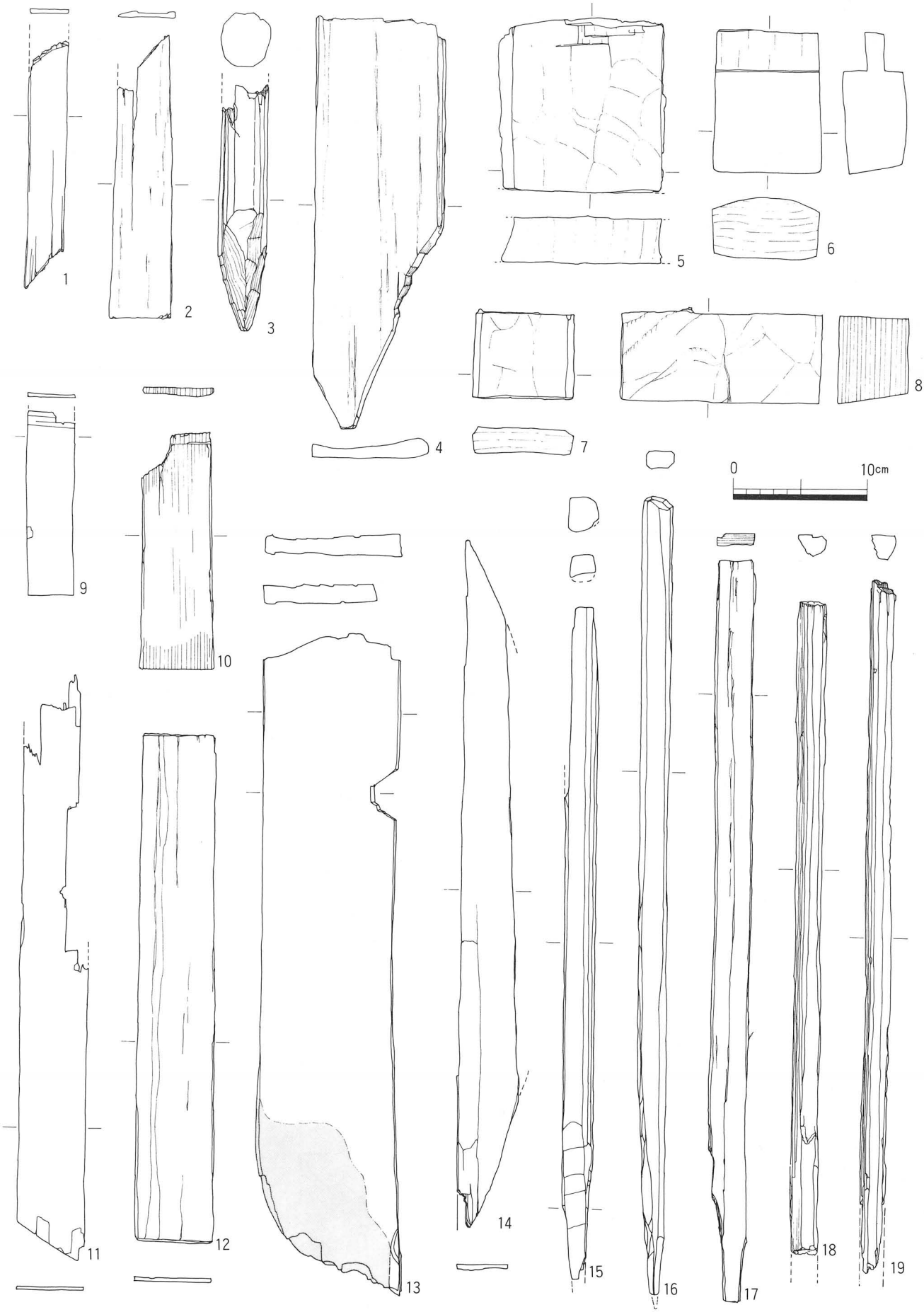
第21図　溝-01遺物実測図　18・20．A区　11・23・25・26．B区　5～8・12・13・15・16・19・29・32～34．C区
1～4・9・10・31．D区　14・17・21・27・28．E区　22・24・30．G区



第22図　溝-01遺物実測図　25.A区　4・8・13・17・23・33・41・51・56・58～60.B区　1～3・10・14・15・18・20～22・24・27・30・34・35・37・38・43・44・47～49・53～55・57・61.C区　16・26・31・45・46・50・52.D区　6・7・19.E区　11.F区　9・28・29・32・36・39・40・42.G区　5・12.H区



第23図　溝-01遺物実測図　10・17・21．A区　20・26・29・30・32・38・40・41．B区　1～4・6～8・11・13～15・18・19・23・28・36・37・42・43・45～47．C区　9・16・22・24・25・27・44．D区　5・12．E区　35．F区　34．G区　31・33・39．H区



第24図　溝-01遺物実測図　3・7・8・12・14・16・17. B区　6・9. C区　4・10. D区　5. F区　1・2・18・19. G区　11・13・15. H

(8) 植物遺体（第25図）

辻遺跡から出土した植物遺体の分類群組成・出土部位を表１に、出土区別出土数を表３に掲げる。植物遺体の多くは溝－01から出土した。これら植物遺体には特記すべき人間活動の反映は認められず、出土数も少なく、古環境・古植生などの検討にも不充分である。また遺構の性格にも不明な点が多いため、この報文では簡略な記載にとどめる。

溝・穴では、これを埋積する黒色、褐色あるいは暗青灰色を呈する粘土、シルトないしは有機物を極めて多量に含む腐泥の中から植物遺体を検出した。また、遺構面を広く覆う暗青灰色又は黒褐色の、時に礫を含むシルトあるいは細粒砂層中からも植物遺体を検出した。植物遺体出土層の堆積年代は、考古遺物の包含状況により、溝－01は鎌倉時代、暗青灰色土層は奈良・平安時代、穴－64は弥生時代後期から古墳時代前期と、それぞれ推定されている。また同様に、①層・②層などと層序区分される出土層の堆積期間は、各遺構内では長期に亙るものではないと推定されている。

植物遺体は発掘現場で採取したものと、各調査区の堆積物小塊を水洗篩別して得たものとを合わせて検討した。

オニグルミ　溝－01から１点、完形品が出土した。穴－64出土の10点は何れも小破片であった。

コナラ亜属　殻斗が１点、溝－12から出土した。破損し、表面は磨耗しているが、覆瓦状の鱗片が明瞭である。

クリ　堅果（果皮片）数点が溝－01からのみ出土した。すべて損なわれており、その形状を推定することは難しい。

ウメ　破損した核が１点、溝－01から出土した。脆化が著しく、遺存状態は良くない。破損部位は、破断面の形状からネズミ類による食痕と推定されるが、明確ではなく、断定するには至らなかった。

モモ　破片を含めて核31点が出土した。破片を除く25点の計測値を表２に示す。辻遺跡の北約３kmに所在する上市町の江上Ａ・Ｂ両遺跡からも多数のモモ核が出土し、その計測値も報告されているが[註1]、辻遺跡のものは江上Ｂ遺跡出土のモモ核（15世紀）とほぼ同様の形態を示す。遺存状態は概ね良好であるが、彫紋模様が摩耗しているもの、核全体が脆化して表面に夥しい黒色粒状物を付着したものも、少なからず認められた。この黒色粒状物は核壁内に根を持っており、菌類の菌体とも考えられるが、詳細は不明である。

辻遺跡出土のモモ核の性格は不明であるが、当時、遺跡周辺にモモが一般的に栽培されていた可能性はある。溝－01の年代からは遡るが、『延喜典薬寮式』に越中國からの年料雑薬として桃仁の名が認められる点には注目すべきであろう[註2]。ただし核遺体のほとんどは溝－01から出土し、隣接する溝－02からは１点も検出されていない点には留意する必要がある[註3]。

トチノキ　外果皮裂片１点の他はすべて種皮（破損又は破片）で、その多くは溝－01から出土している。

エゴノキ　種子17点(うち12点は溝－12)が出土した。溝－12の２点とＸ４Ｙ８の１点には果皮の付着を認めた。

シャジクモ科（不明）　卵胞子（卵胞子膜）が１点検出された。長さは約0.3㎜、幅はこれよりやや小さい。褐色を呈し、螺旋縁数は６、螺旋縁に flange は認められない。詳細は現在検討中である。富山県下の現生シャジクモ科植物については、２属12種が記載されている[註4]。記載されているこれらの産地は何れも富山県西部に限定され、立山町を含めた県東部では未記載である点に留意すべきであろう。

上記および表に示したものの他に、同定困難な植物遺体片と昆虫遺体片が主に溝－01から検出されている。（吉井）

註１　酒井重洋　1984「Ⅲ自然遺物　Ｅ桃の核の大きさ」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町木製品　総括編―』上市町教育委員会

註２　筆者は原典にあたってはいないが、『富山県史通史編Ⅰ原始・古代』「第６節 越中の産業と貢納形態」のなかに、この点が記されている。

註３　堆積物の層相などから、両溝は類似の堆積環境下にあったと推定される。溝－02の年代は未詳であるが、もし両溝が同時代のものならば、祭祀との関係の可能性なども考慮せねばならないだろう。ただし、モモ核に特殊な出土状態は認められない。

註４　今堀宏三『日本産輪藻類総説』（金沢大学、1954）に２属10種…… *Nitella flexilis*（山田村、石黒村）、*N. stricta*（山田村）、*N. spinosa*（広瀬村）、*N. flagellifera*・*N. erecta*（福光町）、*N. rigida*（石黒村）、*N. tanakiana*（太美村）、*N. microcarpa* var. *microglochin*（東太美村）、*Chara braunii*（富山市）。小路登一「富山県における水生植物」;『富山県の陸水生物』（富山県、1978）に２属２種…… *N. japonica*（和田川－うね橋－水田）、*C. corallina*（下条川－馬掛橋－水田用水路、万尾川－十二町潟）。計２属12種が現在までに富山県下で記載されている。

表1　立山町辻遺跡出土植物遺体の組成

植物名	出土部位
クルミ科　Juglandaceae	
オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.	核
ブナ科　Fagaceae	
コナラ亜属　*Lepidobalanus* sp.	殻斗
クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	堅果(果皮)
タデ科　Polygonaceae	
タデ属　*Polygonum* sp.	果実
バラ科　Rosaceae	
ウメ　*Prunus mume* Sieb. et Zucc.	核
モモ　*Prunus persica* (Linn.) Batsch.	核
トチノキ科　Hippocastanaceae	
トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume	種子(種皮) 外果皮裂片
エゴノキ科　Styracaceae	
エゴノキ　*Stayrax japonica* Sieb. et Zucc.	種子
イネ科　Gramineae	
イネ科(不明)　Gramineae-indet.	痩果
エノコログサ属　*Setaria* sp.	痩果
カヤツリグサ科　Cyperaceae	
ホタルイ属　*Scirpus* sp.	種子
シャジクモ科　Characeae	
シャジクモ科(不明)　Characeae-indet.	卵胞子

表2　モモ *Prunus persica*(Linn.) Batsch. 核の計測値

試料番号	計測値 長さ	幅	厚さ	出土区	層準
TTG- 2	31.55	20.05	15.4	溝01B	③層
- 24-1	36.55	22.50	15.40	溝01B	②層
- 24-2	25.65	19.55	7.15*	溝01B	②層
-121	27.05	20.45	16.50	溝01B	③層
- 88	28.00	23.05	18.60	溝01C	③層
-118	26.89	20.80	11.25+	溝01D	③層
- 50	29.90	21.25	15.35	溝01E	①層
- 82-1	30.00	21.55	16.50	溝01E	②層
- 82-2	27.15+	18.05+	—	溝01E	②層
- 82-3	—	—	—	溝01E	②層
- 82-4	33.40	19.85+	17.00+	溝01E	②層
- 45	25.80	18.80	8.30*	溝01F	③層
- 46	27.65	21.85	15.95	溝01F	②層
- 47	26.75	18.00	—	溝01F	②層
- 48	24.90	19.50	15.40	溝01F	②層
- 49	26.05	18.65	14.55	溝01F	②層
-115	24.45	18.80	14.35	溝01G	②層～③層
-132	31.35	23.80	17.20	溝01G	①層
- 43	24.40	—	6.50*	溝01H	③層
- 44	25.30	18.00	13.75	溝01H	①層
-117	27.80	18.95	13.25	溝01H	②層～③層
-119	33.95+	24.80	18.45	溝01H	③層
- 52	22.00	—	14.60	X3Y14	包含層第3層
- 86	20.70	17.40	13.60	X4Y15	—
- 51	—	—	—	X5Y10	包含層第4層

＊裂片の計測値。
＋僅かに破損しているため、正確な値を得られぬもの(参考値)。

表3　立山町辻遺跡出土植物遺体の出土区別出土数

出土植物名および出土部位*			出土区および出土層準** 溝 01 A (2)	B (2)	B (3)	C (3)	D (4)	D (3)	E (1)	E (2)	E (3)	E —	F (2)	F (3)	G (1)	G (4)	H (1)	H (4)	H (3)	02 A (1)	02 — (1)	12 —	XY区 X3 Y14 (6)	X3 Y16 (6)	X4 Y7 (5)	X4 Y8 (5)	X4 Y15 —	X5 Y10 (5)	穴 64 —
オニグルミ	核	a											1															
	核裂片	c																										10
コナラ亜属	殻斗	b																			1							
クリ	堅果(果皮)	b	1																									
		c	1					1							3													
タデ属	果実	b		2		3	1	1																				
ウメ	核	a			1																							
モモ	核	a		1	2	1			1	1			1			1		1										
		b		1				1		2			1	1	1		1		2									1
		d											2										1			1		
		c								2					4				1									
トチノキ	外果皮	b																			1							
	種子(種皮)	a				1																						
		b				1				1															1			
		c		3	1	1	1				1									1					3			
エゴノキ	種子	a										1									10			1	1			
		b																			2		2					
イネ科	痩果	b	1				1																					
エノコログサ属	痩果	a				1	1																					
ホタルイ属	種子	a		1																								
シャジクモ科	卵胞子	b											1															

＊出土部位のa～dは、a……完形、b……破損、c……破片、d……食痕を認めるものをそれぞれ示す。
＊＊出土層準の(1)～(6)は、(1)溝①層、(2)溝②層、(3)溝③層、(4)溝④層、(5)包含層第4層、(6)包含層第3層である。

第25図　植物遺体図表

2．浦田遺跡

(1) 立地と層序

浦田遺跡は、富山地方鉄道寺田駅の西約200ｍ、立山町浦田字八郎に所在する。このあたりは常願寺川扇状地扇端部の湧水帯にあたり、栃津川に寺田川・高野川という小河川が合流する地点の西岸に近い。周囲は、かつては水田が広がっていたが、現在は宅地化が進んでいる。

遺跡は、栃津川西岸の小支谷によって開析された微高地上に立地する。この微高地は、南北約１km、東西約500ｍの広がりをもち、舌状を呈している。遺跡の範囲は、周囲の宅地化がかなり進んでいるため明確ではないが、この微高地の北端を占めているものと推測できる。標高は、12.5～13ｍを測る。

層序は、第１層・耕作土、第２層・茶褐色土層、第３層・黒褐色土層、第４層・黄褐色砂質土層の順で堆積している。耕作土は平均20cm、茶褐色土層は平均10cm、黒褐色土層は20～30cmの厚さで、所によって黒褐色土層の下に10cm程度の地山漸移層が見られる。

茶褐色土層及び黒褐色土層は、遺物包含層であり、遺構内の堆積土も基本的にはこの黒褐色土である。

(2) 弥生時代中期の遺構（第39図）

穴－05（第28図、図版26）

調査区の北半、Ｘ８Ｙ５区で検出された。平面形態は、径1.3ｍ前後の不整円形である。断面形態は皿状で、深さは24cmを測る。また、多くの穴と重複しており、西側の掘方をもつ穴及び突出部は、後世（平安時代）の柱穴である。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・黄褐色砂質土混りの明黒褐色土の順で堆積している。

遺物は、甕（第32図４・５・16）・鉢（第32図８）等が出土している。

穴－08（第28図、図版26）

調査区の北半、Ｘ８Ｙ５・６区で検出された。平面形態は長方形をなし、長軸1.4ｍ・短軸55cmを測る。主軸はＮ－55°－Ｅをさす。北東から南東側にかけて段をもち、最深部の深さは56cmを測る。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・暗黒褐色土、第３層・明黒褐色土、第４層・暗黒褐色土の順で堆積している。第３層は穴の南側にのみ堆積しており、第３・４層が遺物包含層になっている。

遺物は、甕（第32図９・10）等が出土している。

穴－09（第28図、図版26）

調査区の北半、Ｘ８Ｙ６区で検出された。平面形態は楕円形をなし、長軸1.7ｍ・短軸１ｍを測る。主軸はＮ－76°－Ｅをさす。西側にやや広めの段をもち、上段部は深さ10cm・最深部は50cmを測る。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・暗黒褐色土、第３層・暗黄褐色土の順で堆積しており、第２層は南側から、第３層は南北両方向から流入して堆積している。

遺物は、甕（第32図１～３・６・７・11～13）等かなり多量に出土している。

また、縦横に走る４本の小溝と重複している。

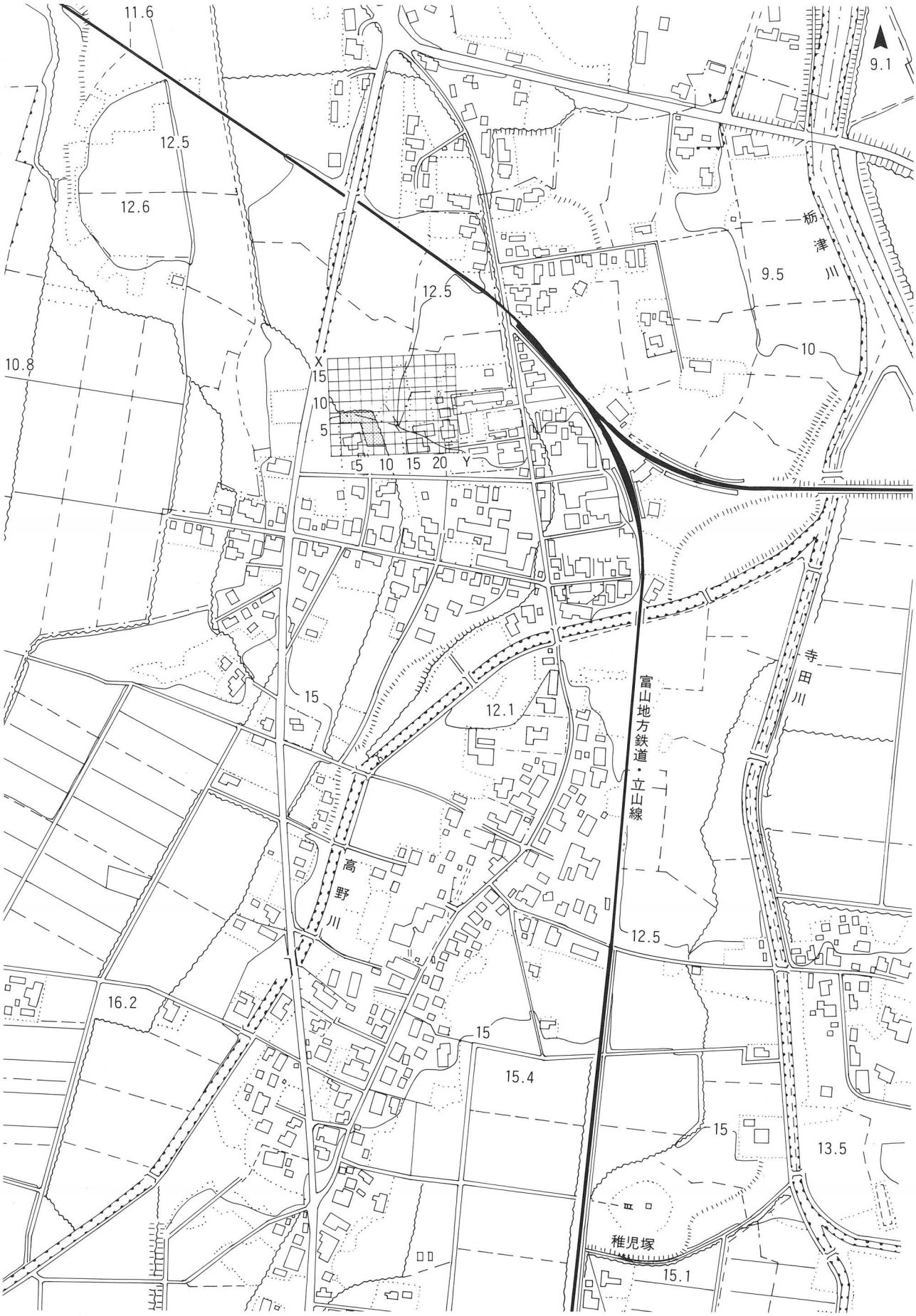
穴－15（第27図）

調査区の北半、Ｘ７Ｙ６区で検出された。平面形態は楕円形をなし、長軸64cm・短軸40cm・深さ10cmを測る。主軸はＮ－86°－Ｗをさす。南側は後世に掘られた隅円方形の穴と重複している。

遺物は、櫛描文をもつ壺の肩部破片（第34図32）が出土している。

穴－18（第28図）

調査区の北半、Ｘ７・８Ｙ７区で検出された。平面形態は楕円形をなし、長軸1.4ｍ・短軸１ｍ・深さ32cmを測る。主軸はＮ－25°－Ｗをさす。


11.6
12.5
12.6
9.1
栃津川
9.5
12.5
10
10.8
X
15
10
5
5 10 15 20 Y
15
12.1
富山地方鉄道・立山線
寺田川
高野川
12.5
16.2
15
15.4
15
13.5
稚児塚
15.1

第26図　地形と区割図

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・暗黒褐色土の順で堆積しており、南北壁沿いに暗黄褐色土が流入している。

遺物は、ハケメ調整をもつ小破片等が出土している。

また、南東側で小溝と、南西側で小穴とそれぞれ接している。

穴－48（第27図）

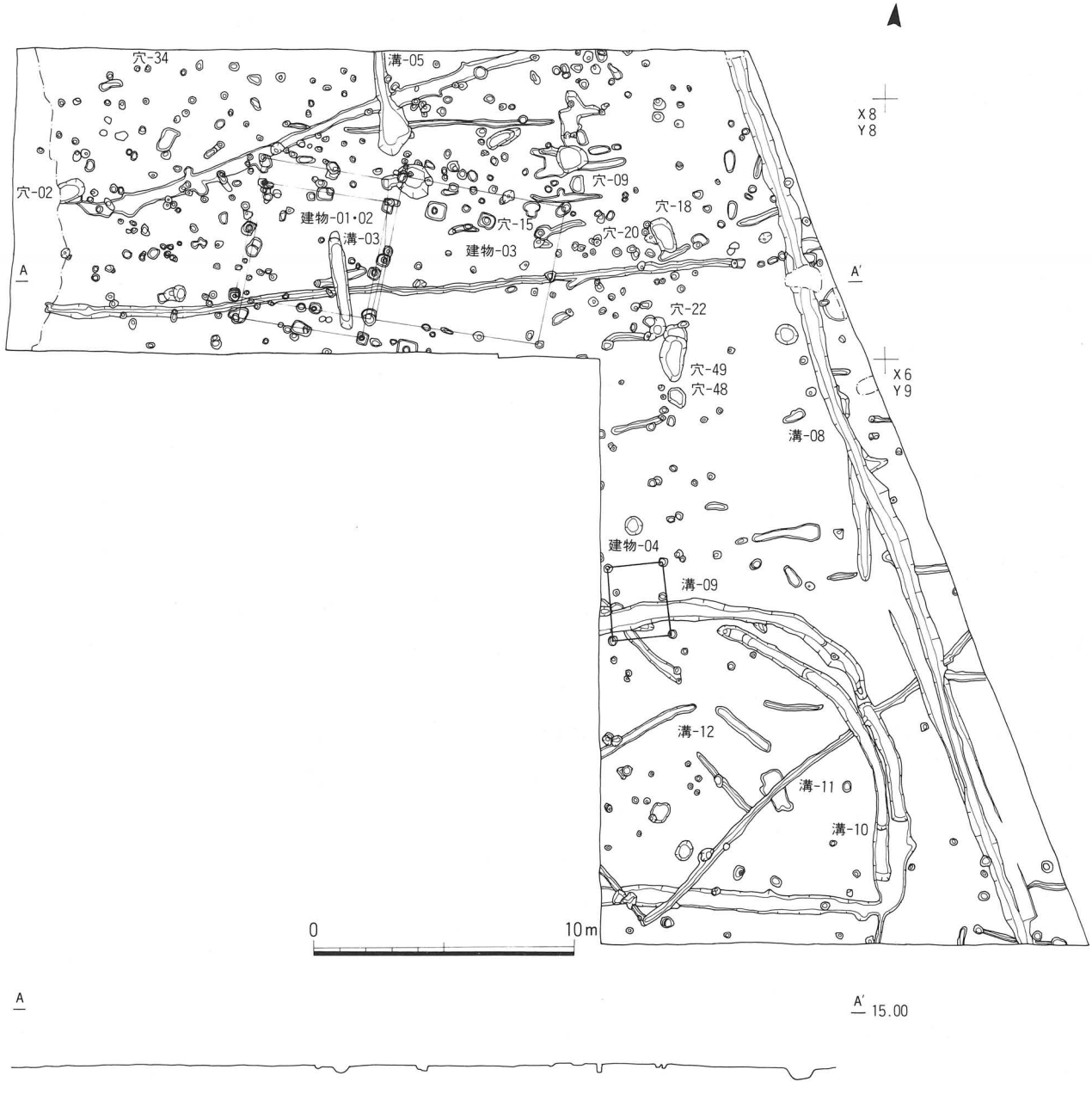
調査区の中央、Ｘ６Ｙ６・７区で検出された。平面形態は径75㎝前後の不整円形をなし、深さは12㎝を測る。

遺物は、櫛描文をもつ小破片が出土している。

穴－49（第27図）

調査区の中央、Ｘ６・７Ｙ６・７区で検出された。平面形態は不整楕円形をなし、長軸1.7ｍ・短軸１ｍ・深さ25㎝を測る。主軸はＮ－７°－Ｅをさす。

遺物は、櫛描文をもつ小破片が出土している。



第27図　遺構全体図

溝－03（第28図）

調査区の北半で検出された。平面形態は長方形をなし、長さ3.8m・幅60cmを測る。断面形態は、南から北へと深くなっており、北端に狭い段をもつ。深さは、北側の最深部で36cmを測る。

覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・暗黄褐色土の順で堆積しており、第2層は北側により厚く堆積している。

遺物は、甕（第31図8・9）等が出土している。

溝－05（第28図、図版26）

調査区の北端で、溝の南端部が検出された。平面形態は、幅40cmの溝が南端でふくらみ、長さ2m・幅1.2mの袋状をなしている。溝は、さらに北の調査区外へ延びている。

覆土は、第1層・暗黒褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・明黒褐色土の順で堆積している。第2・3層ともに東西両側から流入しており、第2・3層の境から多量の土器が出土した。

遺物は、壺（第31図1）・甕（第31図7・12）・鉢（第31図4）をはじめとする多量の土器と、紡錘車（第34図50）が出土している。これらの土器は、出土状況から、一括して破棄されたものと推測できる。

(3) 弥生時代後期の遺構（第39図）

穴－02（第27図）

調査区の北半の西端、X8Y2区で検出された。西側の一部が攪乱によって破壊されているが、平面形態は楕円形をなし、長軸1.2m前後・短軸80cm・深さ17cmを測る。

遺物は、ハケメ調整の土器の小破片が出土している。

溝－08（第27図）

調査区の東端で検出された。東壁に沿って南北にまっすぐ走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は40～80cmを測り、大部分は60cm前後である。断面形態は舟底状をなし、深さは、南端から10m程度の所で5cm前後と極端に浅くなる他は、25～40cmを測る。

覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・明黒褐色土、第3層・暗茶褐色土の順で堆積しており、第2・3層が遺物包含層になっている。遺物は、甕（第32図14・17）等が出土している。

溝－09（第29図、図版26）

調査区の南半で検出された。平面形態は、D字の弧を北に向けた形をなし、調査区の西側へさらに延びている。幅は、50～100cmを測る。断面形態は舟底状で、弧状部の南東と北東に段をもつ。深さは、南側の直線部は8cm前後、南東と北東の段上は8cm前後、他の弧状部は15～22cmを測る。

覆土の状態は、場所によって異なっている。弧状部北側では、第1層・暗黒褐色土、第2層・暗黄褐色砂質土混りの黒褐色土の順で堆積している。孤状部東側では、第1・2層の間に黒褐色土が入り、場所によっては表面まで堆積している。さらに、南側直線部では、黒褐色土の単層となっている。

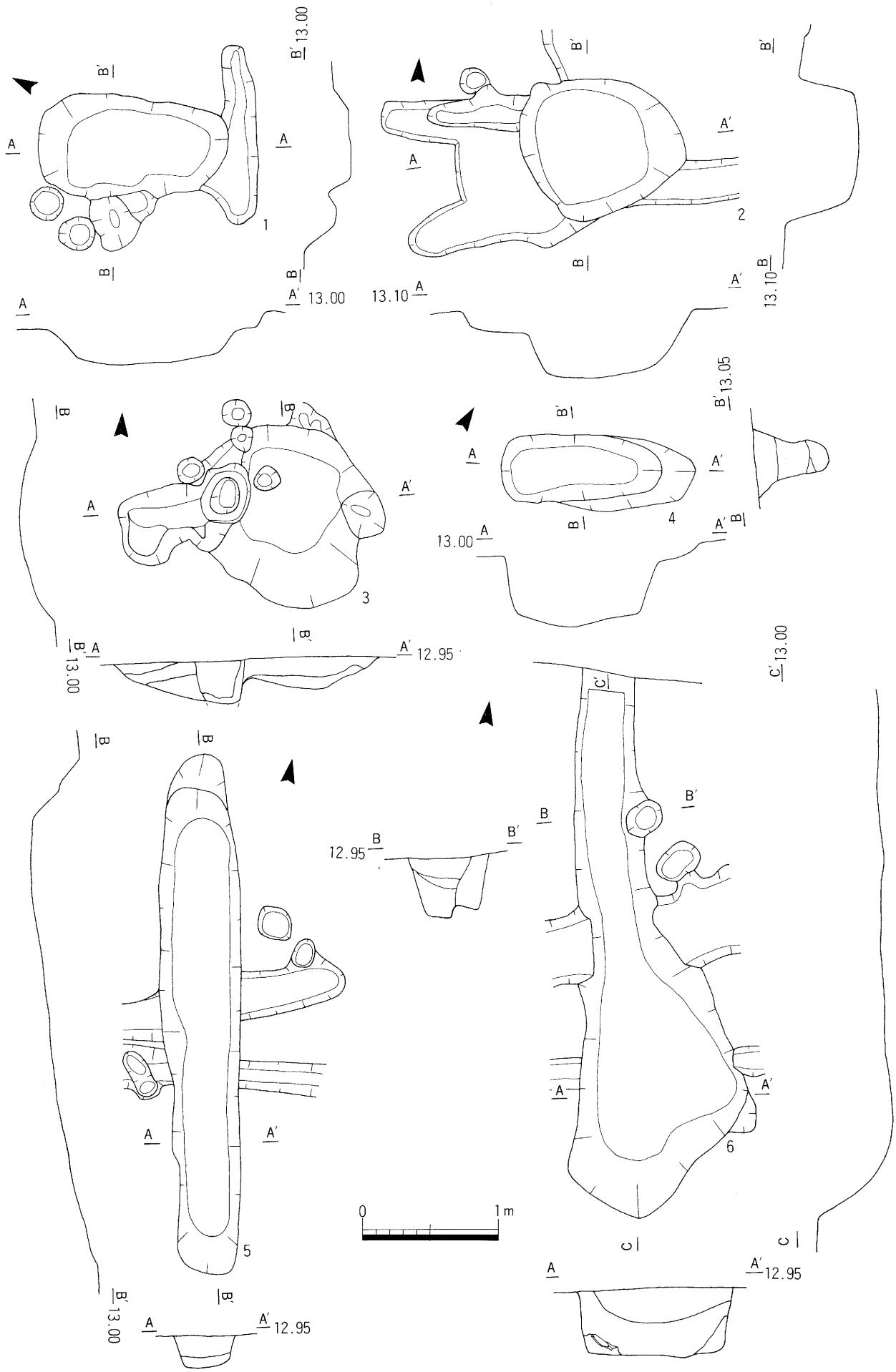
遺物は、壺（第32図19・20）・甕（第32図15・18、第33図6）等が出土している。

時期は弥生時代中～後期で、中心となる時期は弥生時代後期と考えられる。

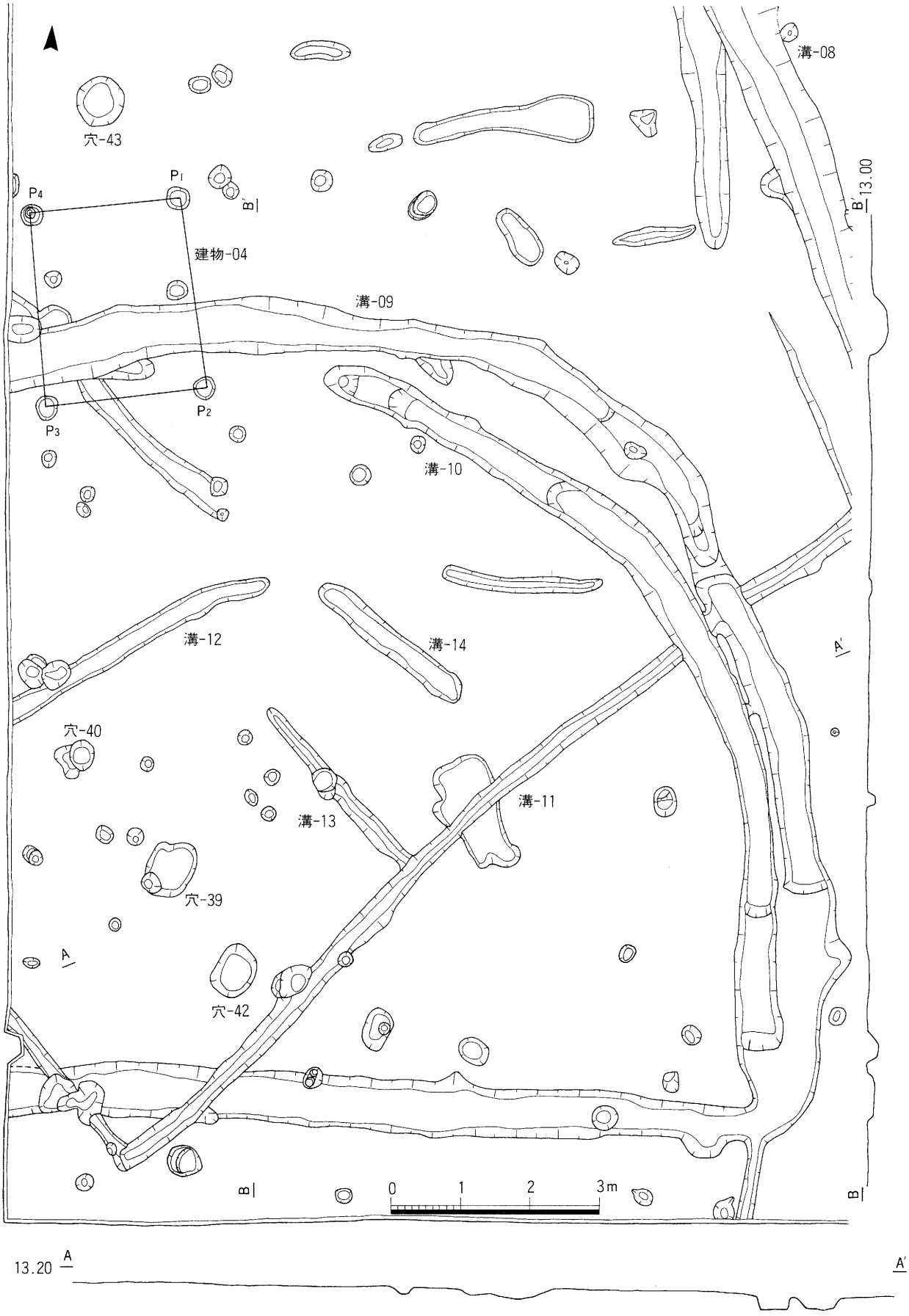
遺構の性格としては、集落（住居）をめぐる溝の一部と考えられるが、遺構がさらに西へ延びており、また関連した遺構もないため、詳細は不明である。

溝－10（第29図、図版26）

調査区の南半で検出された。溝－09の内側に沿って、北西から南東に弧状に走っており、全長12.5m・幅50～60cmを測る。断面形態は舟底状をなし、北西に2段、南東に1段の段をもち、中央が最も深くなっている。最深部の深さは20cmを測る。



第28図　遺構実測図　1.穴-18　2.穴-09　3.穴-05　4.穴-08　5.溝-03　6.溝-05


溝-08
穴-43
P1
P4
B
建物-04
B'
13.00
溝-09
P2
P3
溝-10
溝-12
溝-14
A'
穴-40
溝-11
溝-13
穴-39
A
穴-42
B
0
1
2
3m
B
13.20
A
A'

第29図　遺構実測図

また、南東で溝－09と部分的に重複しており、覆土の状態から溝－10が溝－09より新しい。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・暗黄褐色土の順で堆積している。

遺物は、甕（第33図１）・高杯（第33図２）・台付鉢（第33図４）・蓋（第33図３）等が出土している。

時期は、弥生時代中期～後期で、中心となる時期は弥生時代後期と考えられる。

(4) 平安時代の遺構（第39図）

建物－01（第30図）

調査区北半で検出された、２間（5.4ｍ）×２間（5.4ｍ）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとＮ－８°－Ｅをさす。柱間寸法は2.7ｍと一定しているが、P_1のみがやや西にずれて位置する。柱掘方は、径40～60cmの円又は隅円方形をなし、深さは20～40cmを測る。

遺物は、P_1からロクロ成形の甕（第36図32）が、P_5から須恵器の杯（第36図６）が出土している。

時期は、遺物から平安時代（９世紀後半）と考えられる。

建物－02（第30図）

上記の建物－01と重複している、２間（4.8ｍ）×２間（5.4ｍ）の南北棟掘立柱建物である。建物方位は建物－01と同一である。柱間寸法は2.7ｍと一定しているが、梁間ではP_1とP_8・P_3とP_4の間が2.3ｍと短くなっている。柱掘方は、P_7は他の穴と重複して明確でないが、P_2・P_5は一辺40cm前後の隅円方形、P_1・P_4～P_6・P_8は40cm×70cm前後の隅円長方形で、全体的にしっかりしている。深さは15～26cmで、20cm前後が多い。

建物－03（第30図）

上記２棟の東側に接する形で検出された、２間（5.4ｍ）×３間（6.6ｍ）の東西棟掘立柱建物である。建物方位はＮ－85°－Ｗをさす。梁間の柱間寸法は2.7ｍと一定しているが、桁行の柱間寸法は２～2.3ｍの間でばらつきが見られる。柱掘方は、P_7・P_9が一辺35cm前後の隅円方形、P_1・P_6・P_8が長径60cm前後の楕円形、P_2～P_5が径30cm前後の円形、P_{10}は径40cmの不整円形となっている。深さは15～40cmとかなりばらつきがある。

なお、P_6は建物－01のP_3と重複しており、P_7は建物－01のP_2と接している。

遺物は、P_8から瓶の小破片（第36図18）が出土している。

建物－04（第29図）

調査区南半で検出された１間（2.2ｍ）×１間（2.8ｍ）の掘立柱建物であるが、西側が調査区外のため全体規模は明らかでない。建物方位は、Ｎ－79°－Ｅをさす。柱掘方は、径30cm前後の円形で、深さは20～34cmを測る。

穴－16・24・25・26・27（第30図）

穴－16・24・25は、建物－03の北側柱筋に平行して検出された。穴－16は一辺55cm、穴－24は一辺70cm、穴－25は一辺60cmの隅円方形の掘方をもち、深さは、穴－16が25cm、穴－24が34cm、穴－25が28cmである。柱間寸法は、穴－16・24間が2.2ｍ、穴－24・25間が２ｍを測る。遺物は、穴－24からロクロ成形の甕（第36図34）が出土している。

穴－26は、一辺70cmの隅円方形掘方で、深さ40cmを測る。穴－27は、径40cmの円形掘方で、深さ15cmを測る。

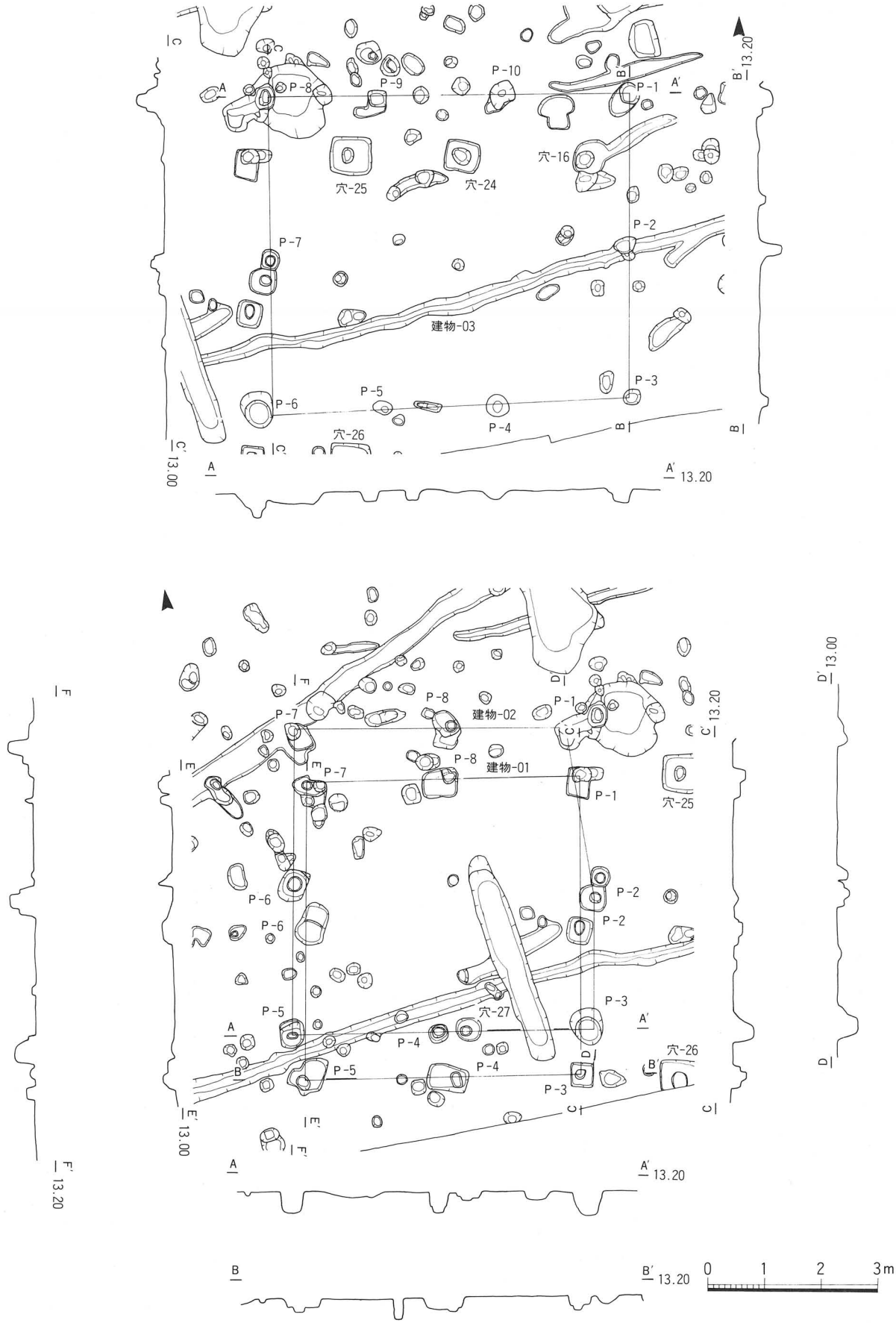
これらは、大型の掘方をもつしっかりした柱穴だが、建物の復元はできなかった。

溝－12（第29図）

調査区の南半の西側で検出された。北東から南西方向に走っており、さらに西に延びている。幅は40cm前後で、断面形態はＵ字状をなし、深さは５cm前後を測る。

覆土遺物は、ロクロ成形の甕（第36図26）が出土している。

以上の他に、同時期の遺構と考えられるものに、穴－20・34（第27図）がある。


P-10
P-9
P-8
P-1
穴-16
穴-25
穴-24
P-2
P-7
建物-03
P-3
P-5
P-6
P-4
穴-26
建物-02
建物-01
穴-27
13.20
13.00
0
1
2
3m

第30図　遺構実測図

(5) 弥生時代中期の遺物（第31図、第32図１～13・16・17・21～23・25～27、第33図１・５～42、第34図１～50）

遺物は、整理箱にして４箱余り出土している。小破片が多いが、遺構内から一括出土したものもかなりあり、全体の形が分かる程度まで復元できた物が10数点ある。また、口縁部破片は約30点、底部破片は約40点出土している。

土器の中には、異なった遺構から出土した破片が接合できたもの（第32図16）もあり、遺構間相互の時期関係を知るうえでの手がかりになっている。

なお、地文に縄文をもつ天王山系と見られる破片も若干出土している（第34図１～15）。

１　壺形土器

壺Ａ類（第31図１、第33図17）

短く直立した頸部が、口縁部で折れて外反する類である。「く」の字状口縁の一種といえよう。胴部は張りのある球形状である。

口縁端部は、第31図１は刻み（連続刺突）を施し、第33図17は口縁部外面とともにヨコナデしている。

土器外面は、ハケメ調整のみで、櫛描文は見られない。

なお、高岡市石塚遺跡〔上野　1972〕や滑川市魚躬遺跡〔上野　1973〕には、Ａ類の器形で櫛描文を施した例が見られるが、それらの遺物との関係については後に詳述する。

壺Ｂ類（第32図１・３）

口縁部が水平に開く類で、１はゆるやかに外反し、３は急激に折れて外反する。前記Ａ類と同様の形状をなすものと思われる。

口縁端部は、１は刻みを施し、３はヨコナデしている。

小破片のため詳細は分からないが、胴部には櫛描文が施されるのであろう。１の口縁部内面には、羽状刺突文が見られる。

壺Ｃ類（第31図６、第33図10）

大きく開いた口縁部が立ち上がり、刻みをもつ隆帯を縦に２本１単位で貼付ける類。胴部以下の形状は分からない。

口縁端部は、第31図６はＸ字状の刻みを施し、第33図10は刻みを施している。口縁部外面下端は、６は指でつまんで波状にしており、10は刻みを施している。

また、６は口縁部外面に羽状刺突文を施している。

なお、これらの土器は県内には類例が少なく、外来系（近畿地方か）と考えられる。

２　甕形土器

甕Ａ類（第31図２・５・７・８・12、第32図２・４・11・16、第33図１・６～９・12～20）

口縁部が折れて外反する、いわゆる「く」の字状口縁をなす類である。胴部は、最大径を胴上部にもち、ゆるやかな曲線を描く「倒鐘形」のもの（第31図７など）や、やや直線的な筒状のもの（第31図８など）の２種があり、前者が圧倒的に多い。

「く」の字状口縁には、直線的なもの（第32図２など）と、口縁部が再度折れて水平になるもの（第31図12など）の２種あり、後者が圧倒的に多い。

口縁部は、刻み（連続刺突）を施すもの（第31図５・12など）と、両面指頭圧痕により小波状をなすもの（第32図16など）と、口唇に１条沈線をひいた後に片面指頭圧痕により小波状をなすもの（第31図７など）の３種がある。

土器外面は、ハケメ調整のみで、櫛描文は見られない。口縁部内面も同様である。

なお、石塚遺跡や魚躬遺跡には、Ａ類の器形で櫛描文を施した例が見られるが、それらの遺物との関係については後に詳述する。

甕Ｂ１類（第32図５～７、第33図11・21）

口縁部がゆるやかに外反し、水平かそれに近く開くもので、胴部に櫛描文をもつ類である。胴部は、やや直線的な筒状のもの（第32図７など）と、丸みを帯びたもの（第32図５など）の２種があり、前者が多い。

口縁端部には、刻みを施しており、指頭圧痕のものは見られない。

櫛描文には、直線文・簾状文・扇状文・圧痕文・波状文等がある。また、第32図６では１条単位で、第33図11では２条単位で直線文を垂下している。第32図５の口縁部内面には羽状刺突文と連続圧痕文が、第33図21には羽状圧痕文が見られる。

なお、第32図６は口縁部外面をヨコナデしている。

甕Ｂ２類（第32図９・12・13・17）

口縁部の形は前記Ｂ１類と同様で、胴部はハケメのみの類である。胴部の形も、Ｂ１類同様である。

口縁端部の形状には、Ａ類同様に３種ある。

なお、第32図９では内面に直線文を垂下しており、同図13では口縁内面に羽状圧痕文が見られる。

甕Ｃ類（第32図10）

直線的に立ち上がる胴上部が、口縁近くで折れて外反する「く」の字状口縁の一種ともいえる。折曲部に細い櫛状具（板の小口か）による直線文を横走させ、その下を斜位のハケメ調整した後、幅広の横位羽状文を描いている。

この土器は県内に類例がなく、外来系（東海地方か）のものと考えられる。

(3) 鉢形土器

鉢Ａ１類（第31図４）

底部から、ゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部で直立する類である。壺Ａ類の胴下半部と同じ形状である。

口縁部外面に、幅広の隆帯を貼付けて肥厚させ、隆帯上に羽状刺突文を施す。

口縁端部には、やや広めの面をもち、羽状刺突文を施す。

鉢Ａ２類（第32図８）

底部が欠損しているが、Ａ１類と同様の器形で、口縁部が直角に近く折れて水平に開く類である。

口唇部に１条沈線をひき、片面指頭圧痕により小波状をなす。

鉢Ｂ類（第31図３）

口縁部のみの破片であるが、石塚遺跡に類例が見られる。

底部から、ごくわずかに内湾して、斜めに直線的に立ち上がる類である。

口縁部外面に、幅広の隆帯を貼付けて肥厚させ、隆帯上に羽状刺突文を施す。

口縁端部には、やや広めの面を持ち、刻みを施す。

高杯形土器（第33図22・25）

22は、棒状の脚柱部の破片である。上下に、ヘラ状工具による２条の沈線を施しており、遠賀川式〔小林　1932〕の影響を受けたものと考えられる。

25は、杯部が欠損している。直線的に開く脚部をもち、杯部は前記鉢Ｂ類に似た形状であろうと思われる。

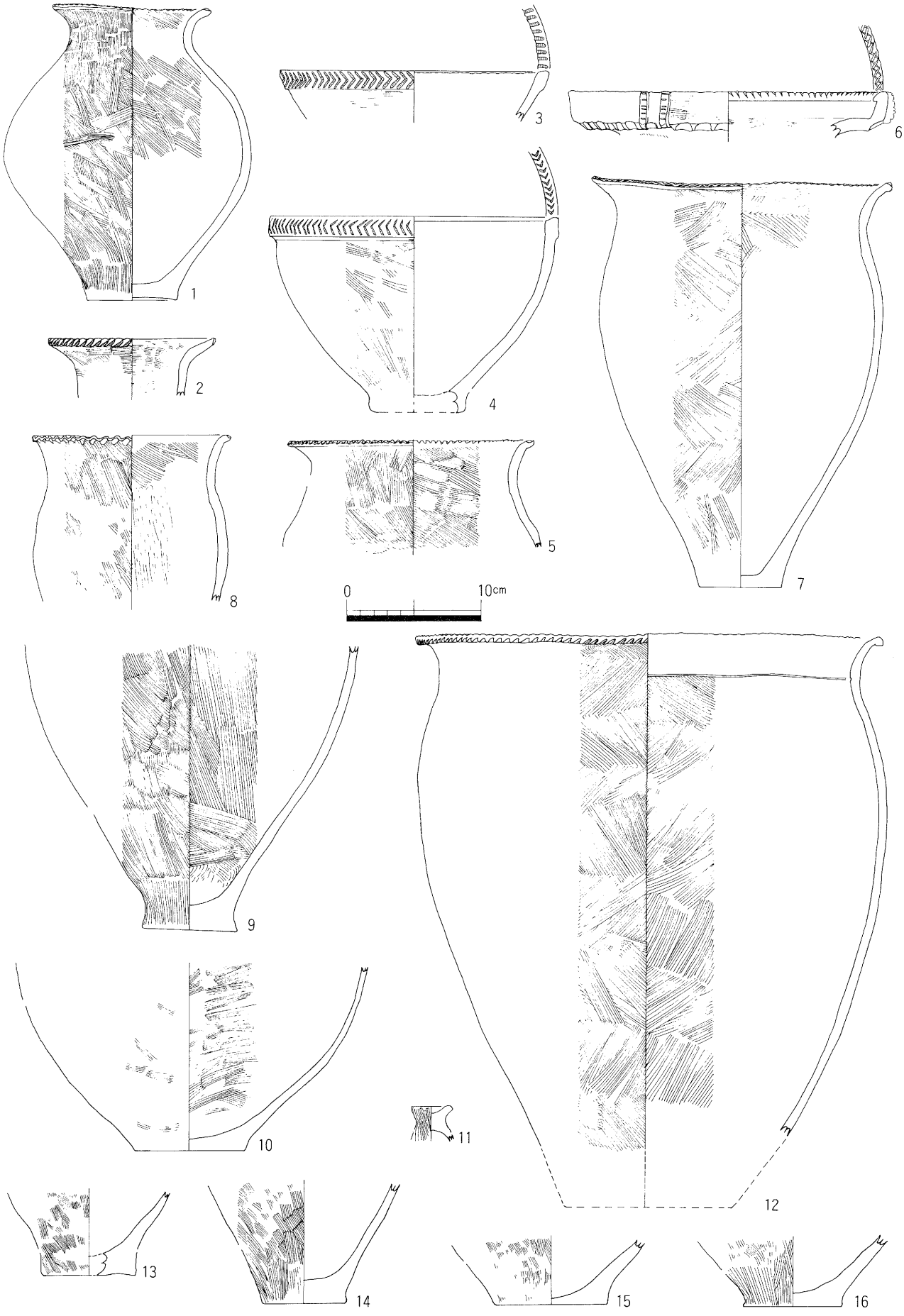
蓋形土器（第31図11）

つまみ部分の小破片である。小さめのつまみで、上面には半円状のくぼみをもつ。

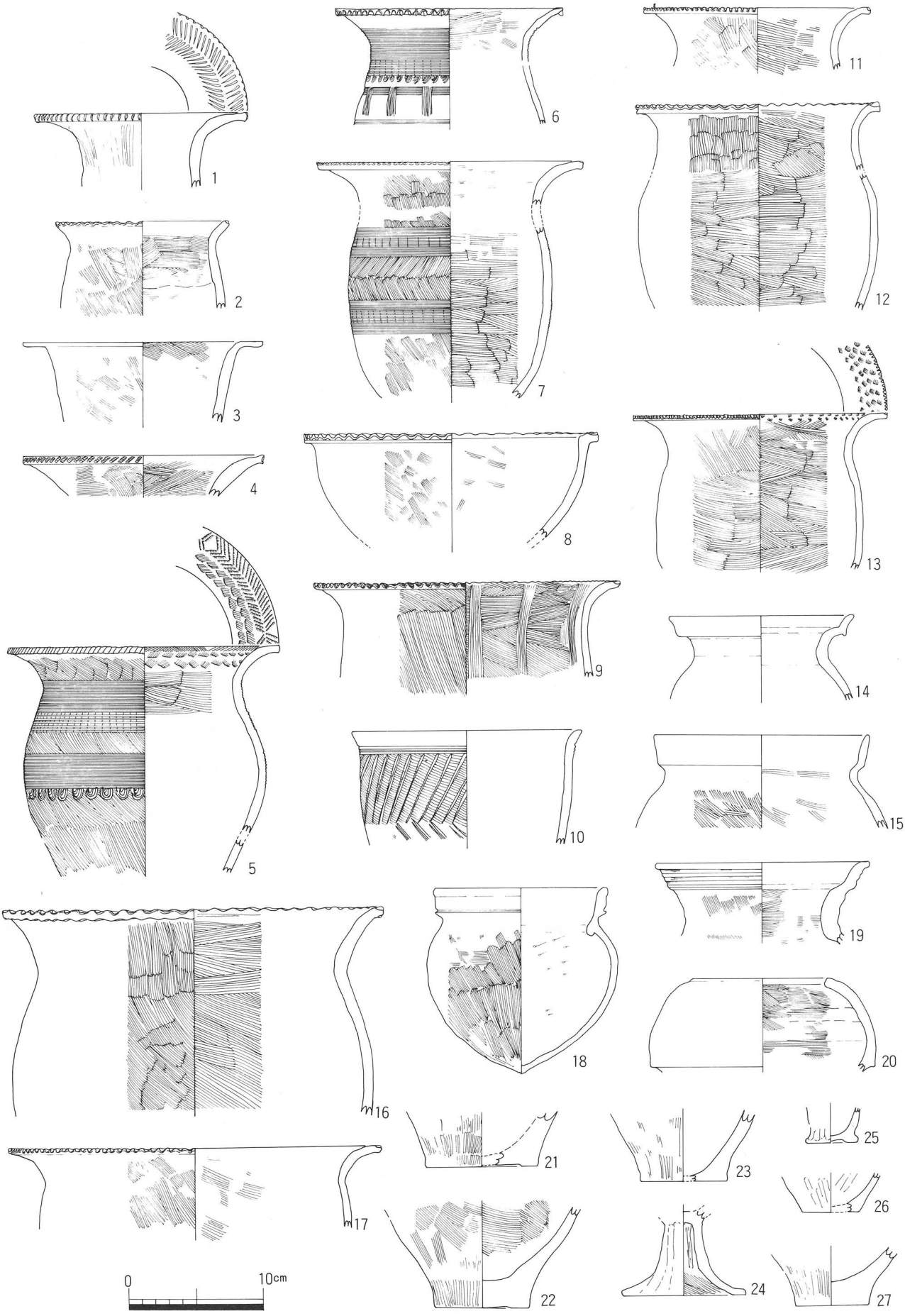
弥生時代中期の蓋では下利田出土のもの〔上野　1972〕が知られているが、後期のものにより近い形状である。

土製品（第34図50）

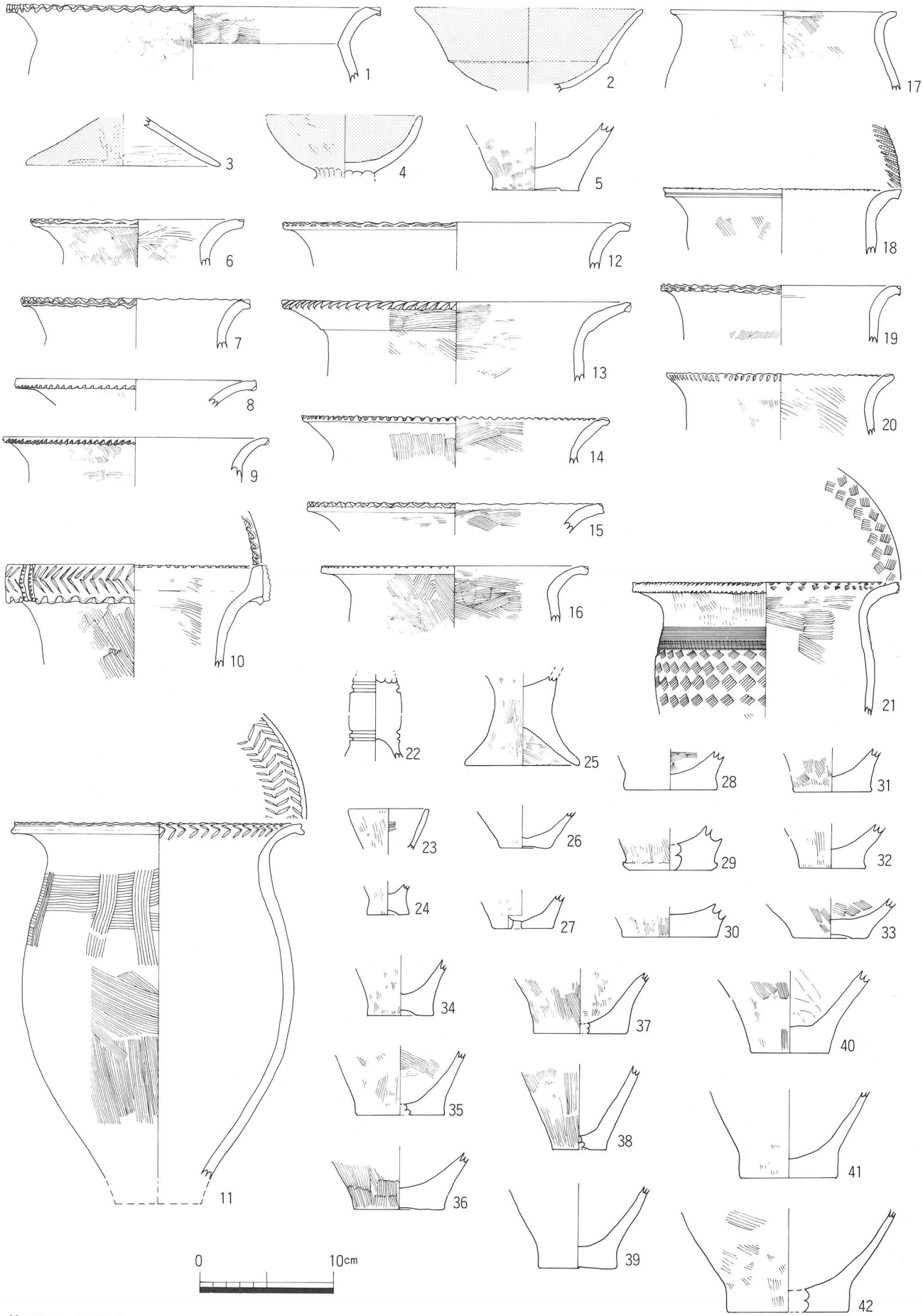
土器の破片を利用して作った紡錘車である。両面にハケメをもつ。　（森）



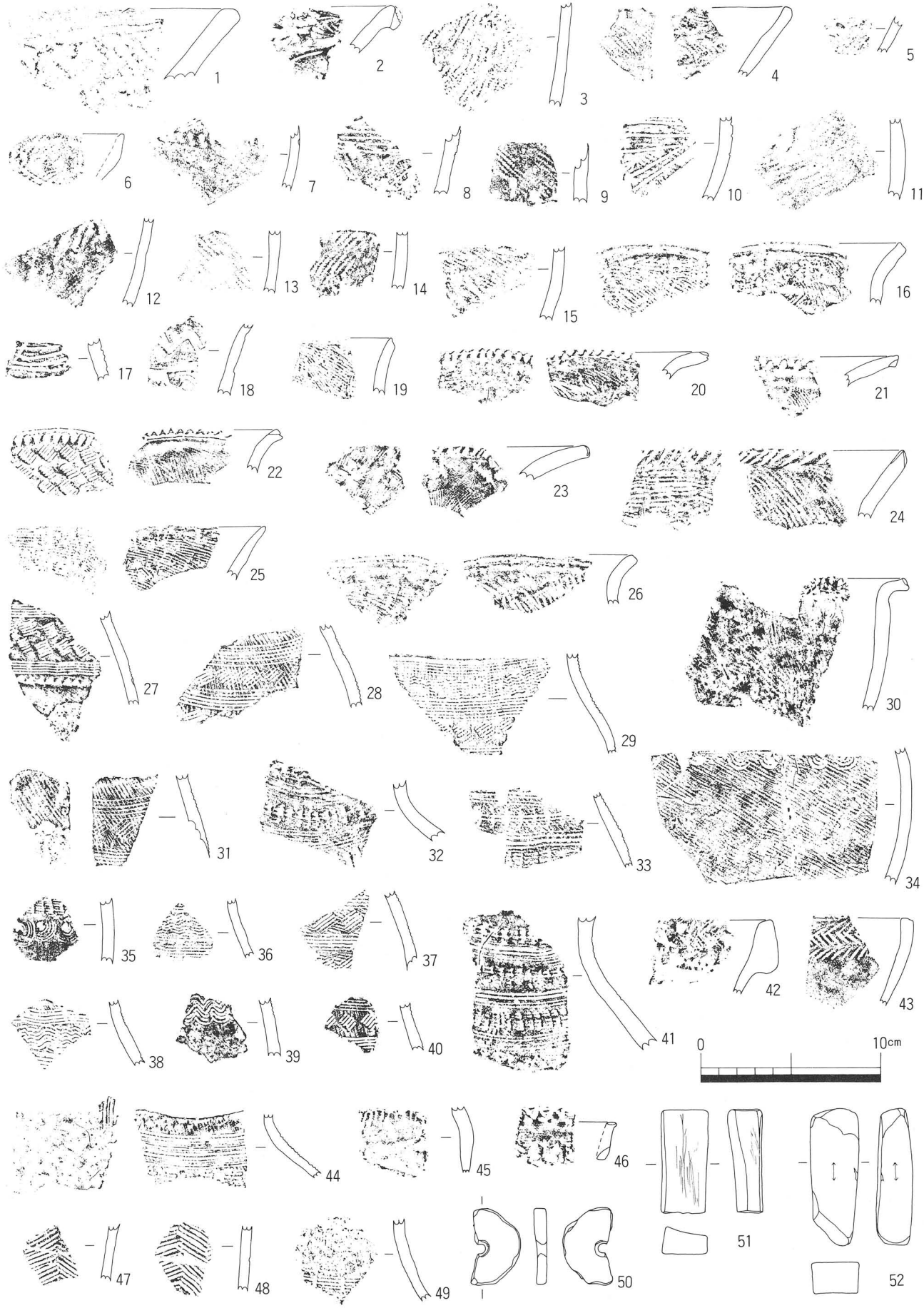
第31図　遺物実測図　8･9.溝-03　1～7･10～16.溝-05



第32図　遺物実測図　4・5・8・16.穴-05　9・10・27.穴-08　1～3・6・7・11～13・21～23・25.穴-09　14・17・26.溝-08
15・18～20・24.溝-09



第33図　遺物実測図　1～5.溝-10　その他.包含層



第34図　遺物拓影・実測図　24・47・48.穴-05　22.穴-09　32.穴-15　4.溝-03　20・25・27・31・35・37・39・40・50.溝-05　8・41.溝-08　13・16・18・26.溝-09　その他.包含層

(6) 弥生時代後期の遺物

弥生時代後期の遺物は溝－08・09・10に伴って出土したものと、包含層からの出土がある。包含層出土の遺物は調査区全体から出土したが、量は上記遺構の周辺が多い。

溝－08出土遺物（第32図14）有段口縁の壺。縁端部は外傾し、屈曲部に鋭い稜をもつ。体部外面は丁寧なナデ調整。

溝－09出土遺物（第32図15・18～20・24）19は有段口縁の壺。有段屈曲稜は明瞭でなく、端部は大きく外傾する。口縁帯には幅広の擬凹線がめぐる。20は無頸の壺で体部とは鋭角に折れ、鋭い稜を残す。外面横方向のヘラ磨き、内面ハケメ調整。15・18は無文の有段口縁の甕。15は比較的幅広の口縁帯をもち、端部を丸くおさめる。体部内・外面ハケメ調整。18は小型甕で、縁屈曲部外面に突出した鋭い稜をもつ。体部最大径は上位にあり、底部は小さく尖底をなす。体部外面肩に横方向のハケメ、中・下位に粗い斜方向のハケメを残す。内面はケズリ調整。口径12.7cm、高さ13.8cm。24は小型高杯の脚部破片で端部は面取りされる。外面ヘラ磨き、内面にしぼり痕を残し、ハケメ調整。

溝－10出土遺物（第33図２～４）２は有段口縁をもつ高杯杯部。体部との境には内・外面に段をもち、全面赤彩する。３は直線的に開いた体部をもつ蓋で、内・外面ヘラ磨きを施し、外面赤彩。４は内彎気味にのびる口縁部をもつ鉢で小さな台が付く。内・外面ヘラ磨きし、赤彩する。

包含層出土遺物（第35図１～20）１・２は「く」の字状に外反し、端部は内傾した面をもつ甕。３・４は無文の有段口縁の甕。３の口縁部はわずかに外傾する。端部近くの内面は器厚を増し、連続する指頭圧痕を残す。４は直立する幅広の口縁帯をもち、体部外面は斜方向のハケメ、内面はケズリ調整。５・６は擬凹線を施した有段口縁の甕。口縁部の外傾度が強く、端部は尖り気味におさめる。擬凹線は５に５条、６に６条施す。６の体部外面に刺突列点文が施され、内面はケズリ調整。７は「く」の字口縁の甕で、口縁部内面にハケメ調整する。８は長頸の壺で、端部は折り返された口縁帯をもつ。頸部内・外面ハケメ調整。９・10・17～20は高杯杯部・脚部破片、９は有段口縁をもつ高杯で、小さな脚部が付く。脚部内面以外赤彩する。11～15は蓋。つまみの頂部は平坦なもの（11・13・14）、中央部が凹むもの（12・15）があり、体部は直線的に「ハ」の字状に開くものが多い。12は内・外面赤彩され、口径9.2cm、高さ3.7cm。15は口径9.0cm、高さ4.4cmを測る。

弥生時代後期の遺物について

出土遺物は溝－08～10の遺構内及び周辺包含層からの出土が大部分である。器種には、壺・甕・高杯・鉢・蓋がある。甕は在地系の有段口縁甕と畿内系の「く」の字口縁の甕、山陰系の甕がある。高杯・蓋には赤彩する個体が多く、遺構の性格を暗示するのかも知れない。これらの遺物の時期は、辻遺跡第１群土器と第２群土器の間に入る遺物が大部分と推定される。

(7) 古墳時代後期の遺物

古墳時代後期の遺物には土師器・須恵器がある。全て包含層出土遺物である。

土師器

甕（第35図22・23）「く」の字に外反した口縁部をもつ甕。体部の張りは弱く、外面斜・内面横方向のハケメ調整。

須恵器

高杯（第35図24）短脚１段の長方形の透しをもつ有蓋高杯。縁端部の内傾度がいちじるしく、底部外面に右まわりのロクロ削りを施す。口径10.7cm。

杯蓋（第35図47）内面にかえりをもつ杯蓋の小破片。かえりの先端は縁端部と同一。口径16.7cm。

古墳時代後期の遺物について

古墳時代後期の遺物の出土量は非常に少ない。須恵器高杯は陶邑編年〔田辺　1966〕のＴＫ47に近く６世紀前半の遺物であろう。土師器甕・須恵器杯蓋はほぼ同一時期で７世紀末頃に推定しておく。

(8) 平安時代の遺物

平安時代の遺物には須恵器・土師器がある。調査区全体から出土しているが、特に建物－01～03周辺の包含層からの出土量が多く、遺構内からの出土は数点と少ない。分類は、同一特徴をもつ遺物であることから一括記述する。

須恵器

須恵器は杯Ｂ蓋・杯Ｂ・杯Ａ・皿Ａ・瓶・甕・壺・壺蓋などの破片がある。

杯Ｂ蓋　杯Ｂ蓋は、つまみの有無、上末窯跡群の製品と生産地不明の製品によって４群に大別できる。Ⅰ群はつまみが付き、頂部切り離しに糸切り技法を用い、頂部肩に１・２条のロクロ削りを施すもの。Ⅱ群はつまみが付き、頂部はヘラ切り技法によって切り離し、ロクロナデ調整する。ロクロ削りを用いない。Ⅲ群はつまみが付かず、頂部は糸切り技法によって切り離される。Ⅳ群はつまみが付かず、頂部はヘラ切りによって切り離し、ロクロナデ調整及び未調整のものである。

Ⅰ群（第35図25・26・34～36・38～40・45・48・49）口径10.8～17.6cm、高さ2.4～2.8cmのものがある。つまみは中央部がわずかに高くなるものが多く、最大径は2.3～2.4cm。頂部は平坦で肩が張って斜下方にのび、縁部近くで小さく屈曲する。縁端部は丸味をもって折れ、垂下、まき込み気味のものがある。頂部内面は中心部までロクロナデを施す。

口径によって杯ＢⅠ蓋（25･26･34～36･38～40･45、口径10.8～12.4cm）最も出土量が多い。38は穴－20出土。杯ＢⅢ蓋（48、口径17.6cm）に分かれる。

Ⅱ群（第35図27・28・37・41・50）全形を知りえるものは非常に少ない。つまみの最大径は1.6～1.9cmと小さく、中央部がわずかに高くなる。全体に焼成のあまいものが多い。口径11.8～12.4cm、高さ2.2～2.7cmのものがあるが、細分出来る出土量はない。

Ⅲ群（第35図29・30・32・42）つまみが付かない頂部は平坦で、肩から斜下方にのび縁端部近くで小さく屈曲し、端部はまき込み気味におさめる。頂部外面は糸切り痕を残し、軽くナデを施すものもある。頂部内面は中心部までロクロナデ調整。口径11.8～12.4cm、高さ2.2～2.7cmのものがある。

Ⅳ群（第35図33・46）ヘラ切りされたやや丸味をもつ頂部から斜下方にのび、縁端部近くで小さく屈曲し、丸く折れてまき込む形態。端部は完全には丸くならず稜を残す。焼成はややあまく、右まわりのロクロを使用し、頂部外面は軽いナデ調整。口径12.0～14.2cm、高さ2.3cmのものがある。

杯Ｂ（第35図51～59、第36図１～５）明確な特徴差はなく、分類が困難な個体もあるが、図示できた個体の大部分はⅠ群土器である。また、第35図59・第36図５は古い様相を持ち、奈良時代に含まれるであろう。

Ⅰ群（51～57）口縁部は直線的に外傾するもの、端部近くで外傾度を増すものがある。高台は低く、細いものが付き、外端部は平坦、わずかにあがるものがある。

法量によって杯ＢⅠ（52～57、口径10.4～12.0cm、高さ3.9～4.4cm）最も出土量が多い。底部内面は中心部までロクロナデするものが大部分で仕上ナデしたものが１点ある。外面はヘラ切りし、高台貼り付け後、周辺部をロクロナデしたものが多い。54は穴－34からの遺物。杯ＢⅡ（51・58・口径14.0～15.4cm、高さ5.7～6.2cm）58の底部内面には一方向のナデ、51には不定方向のナデが施され、底部外面はヘラ切り・ナデ・ロクロナデ調整。

杯Ａ（第36図６～14）小破片が多く、図示できた個体は少ない。６は建物－01・P_5からの出土。

Ⅰ群（７～12）口縁部が直線的に外傾するもの、端部近くで内傾・外傾するものがある。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け調整。内面は中心部までロクロナデ。口径11.0～12.0cm、高さ3.2～4.0cmの１種のみ。

Ⅲ群（13・14）糸切りの底部をもつ（13）とヘラ切り（14）がある。所属群が明確でないが、本群に含める。

Ⅲ Ａ（第36図15・16）底部ヘラ切り（15）と底部糸切り（16）がある。上末窯跡群の製品と推定され、15は口径13.4cm、

高さ2.6cmを測る。底部内面は中心部までロクロナデ調整。16は口径14.3cm、高さ2.8cmを測る。

瓶（第36図18～20）18は建物－03・P₈より出土した小型の瓶で口径4.4cm。19は長頸瓶の口縁で口径8.8cm。20は双耳瓶の口縁部で、縁端部は直立し、受口状を呈する。頸部外面中位に1条の沈線がめぐる。口径11.8cm。

壺（第36図17）小型壺。口縁部は小さく外反してのび、端部は平坦。体部内・外面ロクロナデ調整。口径4.6cm。

土師器

土師器は、杯A・杯B・甕・堝がある。出土総数は少なくないが、復元・図示できる個体が少ない。杯類は内・外面赤彩した杯Aの破片が最も多く、少量の内面黒色の杯A・杯Bが見られる。

杯A（第36図21～23）ロクロ成形された高台の付かない杯。21は全形を知りえる唯一の資料。口縁部は内彎気味にのび、端部で外傾度を増し、丸くおさめる。底部は糸切り未調整。口縁部内・外面赤彩し、口径12.8cm、高さ4.0cm。

杯B（第36図24・25）高台が付く杯。25は高台が高く、外端部はあがる。24・25とも底部に糸切り痕を残す。

甕（第36図26～45）全形を知りえるものはない。口径10.8～30.6cmのものがあり、大・中・小の3種が予想される。口縁部形態はバラエティーに富むが、4類6形態に細分する。A(29・38)縁端部をつまみ上げて断面三角形の小さな口縁帯を作るもの。B(28・41)端部を内面に巻き込む形態で端部先端と内面に隙間をもつ。C_1(27・34・43・45)縁端部近くで内屈し、端部を肥厚させたもの。34は穴－24から出土。C_2(42)内端部を小さくつまみ出したもの。D_1(33・39・40)縁端部内面を肥厚気味に仕上げたもの。D_2(31・32・35～37・44)縁端部を内側に折り返して肥厚させたもので、完全には丸まらず稜をもち肥厚幅も狭い。D_3(30)縁端部外側を肥厚気味にしたもの。型式学的にはAからCに推移すると想定されるが、遺跡では数形態併存が考えられる。26は小型甕で体部はロクロ成形され、底部との境に横方向のケズリを施す。底部は糸切り未調整。34の体部外面上半にカキメ、内面にカキメ、ロクロナデを施す。下半は外面タタキメ、内面にハケ・ナデ調整しアテ具を残さない。又、放射状アテ具痕を残す破片が数点ある。

堝（第36図46～48）口径31.6～40.8cmのものがある。口縁部形態は、C_2(48)、D_2(46・47)がある。

平安時代の須恵器について

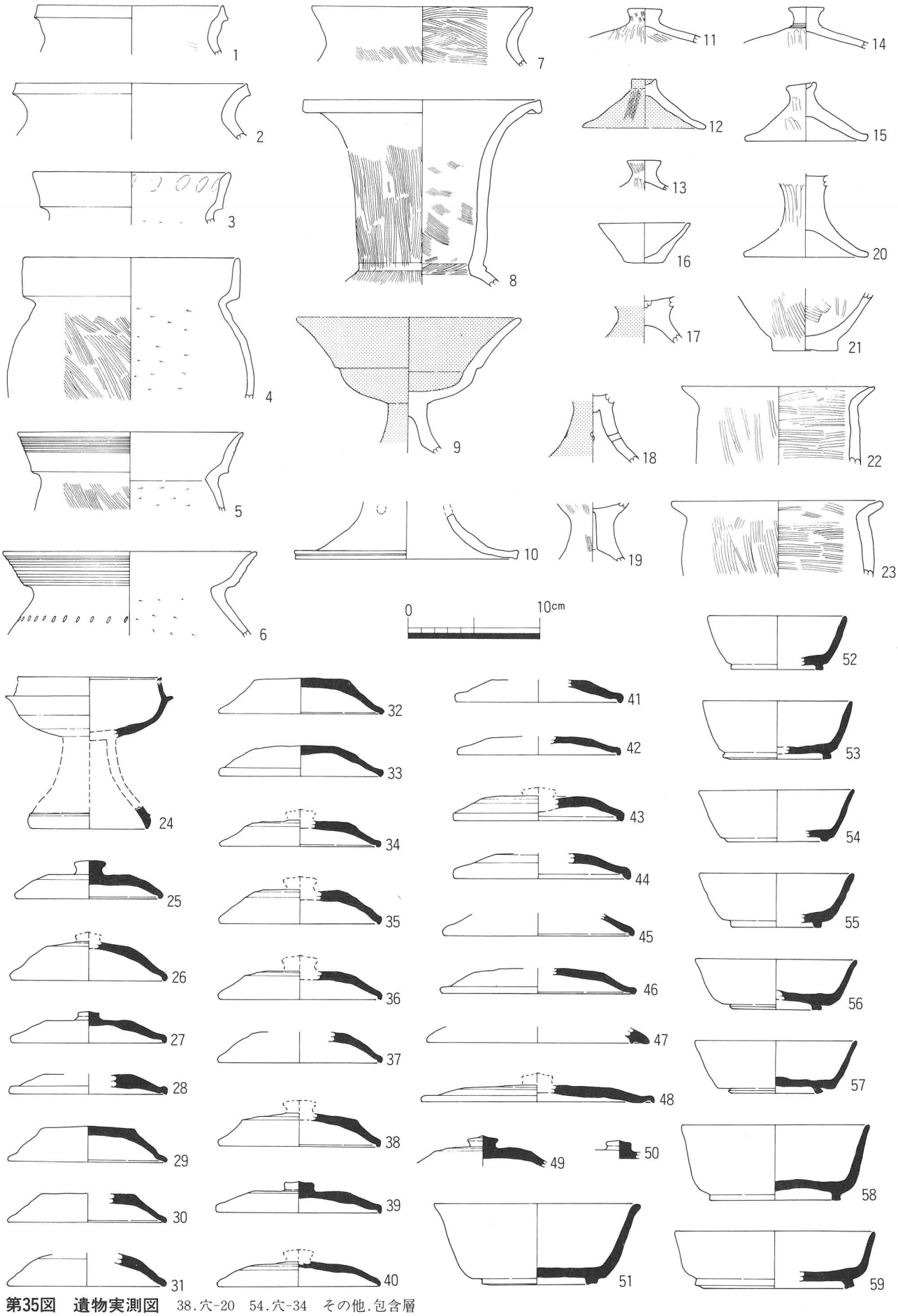
須恵器杯B蓋・杯B・杯AをⅣ群に分類した。Ⅰ・Ⅲ群土器は、胎土・焼成・糸切り技法から、当遺跡より南南東9kmに所在する上末窯跡群の製品と推定される。Ⅱ・Ⅳ群土器はⅠ・Ⅲ群土器と識別の困難な個体も含まれるが、頂部切り離しにヘラ切り技法を用い、胎土・焼成が若干異なることから別の窯跡群の製品と推定できる。

Ⅰ群土器は上末窯跡群の法光寺谷1号窯〔藤田　1974・酒井　1979〕の遺物と推定する。杯B蓋は杯BⅠ蓋（口径10.8～12.4cm）のものが大部分で、杯BⅡ蓋はみられず、杯BⅢ蓋（口径17.6cm）が1点ある。杯Bも同様に杯BⅠ（口径10.4～12.0cm）が大部分で杯BⅡが少量出土。Ⅲ群土器の杯B蓋はつまみが付かず、頂部に糸切り痕を残し、胎土・焼成がⅠ群土器と同一であ　ことから上末窯跡群の製品と推定される。しかし、現段階では窯跡名まで特定できない。Ⅱ・Ⅳ群土器の特徴をもつ窯跡は県東部では知られておらず、現段階では県西部の窯跡群からもたらされたものと推定しておく。

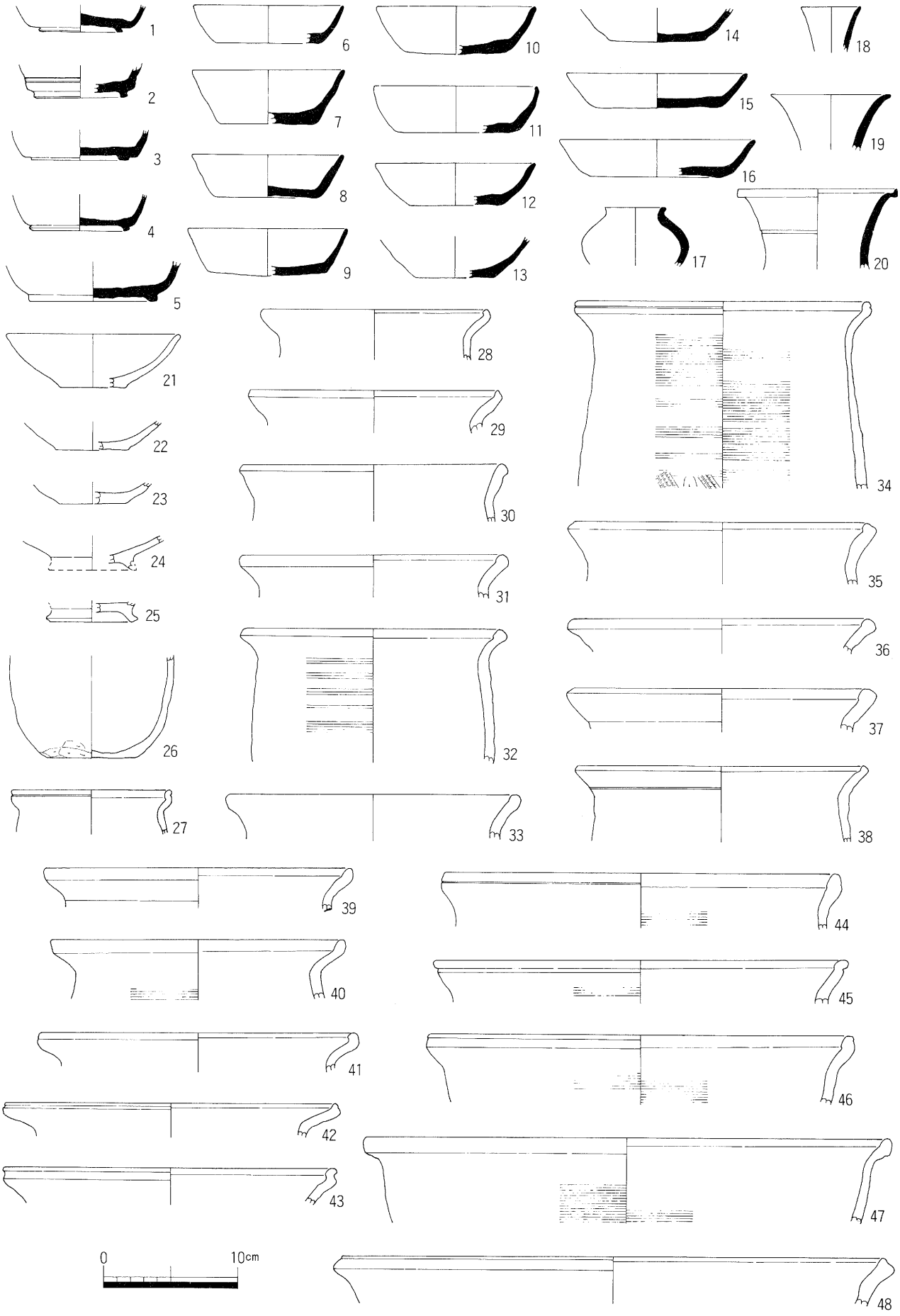
上記土器群の時期及び併行関係について触れる。Ⅰ・Ⅱ群土器、Ⅲ・Ⅳ群土器はそれぞれほぼ併行関係にあり、Ⅰ・Ⅱ群土器が先行する。しかし、高岡市末窯跡群〔西井　1986〕では、つまみをもつ蓋、もたない蓋の2形態が同一窯跡から採集されており、Ⅰ・Ⅱ群土器とⅢ・Ⅳ群土器は非常に近接した時間幅であろう。

実年代については、平城京の調査〔小笠原　1975〕、篠窯跡群の調査〔石井　1983〕から少なくとも9世紀後半代にはつまみの付かない蓋が出現しており、Ⅲ・Ⅳ群土器を9世紀後半代から末頃におきたい。また、先行形態であるⅠ・Ⅱ群土器は9世紀中頃を中心とする年代と推定しておく。

土師器と須恵器の併行関係については明確にできないが、少なくともA形態からC形態への変化があり、実年代も須恵器と同様であろう。　（池野）



第35図　遺物実測図　38.穴-20　54.穴-34　その他.包含層



第36図　遺物実測図　6.建物-01・P_5　18.建物-03・P_8　26.溝-12　32.建物-01・$P_1$34.穴-24　その他.包含層

Ⅳ　調査成果

1．辻遺跡

(1)　弥生・古墳時代の遺物について

弥生・古墳時代の遺物は、調査区西側の包含層からの出土が大部分で、遺構からの出土は少ない。時期幅を考慮する必要があるが、この中でも、Ｘ５Ｙ５区土器ダマリ出土遺物は、一括遺物に近い状態と推定される。以下、前述した器種分類に従って各遺跡出土遺物と比較しながら記述する。器種は、壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋があり、甕の出土量が最も多い。

壺

12類16形態に分類したが、各形態とも量が少なく、１～２個体程度である。Ａは、いわゆる長頸壺に属する壺で、長い体部が付くと推定される。調整はハケメ仕上げで、ヘラミガキを加えたものはない。Ｂは類例に乏しいが、口縁部断面三角形を呈する形状は古い様相である。Ｃは外反してのびた口縁部をもち、端部は面をなす壺で、C_1は大きく張った体部が付く。類例は江上Ａ遺跡ＳＤ01〔久々　1982〕に見られる。C_2は縁端部を上方・下方に広げた壺で、佐伯遺跡〔池野　1979〕に類似例がある。Ｄは屈曲の稜が不明瞭な甕口縁に似た壺で、類似例は奥原遺跡７号住居跡〔西野　1982〕に近い。Ｅは大きく外反する壺で途中に形骸化した有段状の段をもち、この特徴が時期を知る手がかりになろう。Ｆは有段口縁の壺で、F_1は中山南遺跡〔橋本　1971〕、串田新遺跡第４号住居跡〔高橋　1981〕など類例は多い。F_2は中型の有段口縁壺で、屈曲部が中位に位置し、外傾度は強くない。F_3は底部が尖り気味におさめる特徴をもち、口縁帯の幅広な例が中山南遺跡にみられる。Ｇは無頸の壺で脚の有無は不明。Ｉは土器ダマリ出土の装飾壺。中山南遺跡、須田遺跡〔上野　1972〕に類似例がある。Ｊは直線的に開く口縁部をもつ小型壺。Ｋは「く」の字口縁に平底の大きな底部をもつ壺で、南太閤山Ⅰ遺跡〔岸本　1985〕に類似する。

甕

15類38形態に分類した。Ａは擬凹線を施す有段口縁甕。A_1は口縁帯の幅が狭く、上方向につまみ上げた程度のもので、端部は内傾するものはない。類例は江上Ａ遺跡のＳＤ01にある。A_2はA_1より口縁帯が幅広になるが、同一期であろう。A_3は前２者と製作を異にし、頸部と口縁部の器厚が同一のもの。A_4は口縁端部が面取りされたように平坦になり口縁部は幅広い。A_5は全て土器ダマリから出土し、体部内面はナデ調整。小型甕の体部は丸味をもち、小さな底部が付く。Ｂは無文の有段口縁甕。B_1とA_1と口縁部形態が同一。B_2は狭い口縁帯が外方向にのびた甕で、第９図４は住居跡出土。江上Ａ遺跡ＳＤ01に類例がある。B_3は口縁屈曲部が明瞭な甕。B_4は口縁屈曲部がふくらむもので、第９図８は住居跡出土。B_5は屈曲部の稜が明瞭でないもの。B_6は口縁が直立し、体部の張りが強いもので、中山南遺跡に類似例がある。B_7の大部分は土器ダマリ出土。体部内面調整はナデが主体で、頸部内面に綾杉状のハケメを残す。この特徴は、A_5・K_4・K_5にもみられる。Ｃは近江系の受口状口縁の甕。４形態に細分したが、縁端部を外方に引き出した形態のものはなく、端部は面取りされて平坦となり、内傾するものが多い。C_1は大きく弧を描いて外反し、C_2は頸部が明瞭に折れる。両者は平行沈線文・刺突列点文が施文され、古い様相をもつ。C_3は口縁部が外傾するもの、C_4は内傾気味のもので刺突列点文をもつ。C_5は施文されていないもの。体部内面の調整はハケメを施す。Ｄはつまみあげた小さな尖り気味の口縁をもつ甕で、D_1・D_2とも江上Ａ遺跡ＳＤ01に類例がある。Ｅは内傾する口縁帯をもつ小型甕。Ｆは斜下方に折り返した口縁の甕で、徳前Ｃ遺跡〔浜野　1983〕に近いものがある。Ｇは上方向につまみあげた小さな口縁帯をもつ甕で小型が多い。Ｈは屈曲の弱い「く」の字状をなし、端部は内傾気味。土器ダマリ出土。Ｉは広口の体部が張る甕。Ｊは「く」の字状に外反した口縁の端部は面をもつ。Ｋは「く」の字口縁で端部に面をもつ甕で９形態に細分した。K_1・K_2はＫ類の中で古い様相をもつ。K_3～K_5は全て土器ダマリからの出土で、

口縁部の形態差から細分したが微妙な個体もある。体部の最大径は上位にあり、平底の小さな底部が付く。体部内面調整は、ナデが主体を占め、ハケメ、浅い部分的なケズリが少量ある。口縁部内面は強いヨコナデによって凹み、縁端部は内傾し、面は丸味をもつ特徴がある。K_6は大きくカーブを描いてのびる口縁部をもち、端部は面をもつ。第17図12は土器ダマリ出土。第12図20の体部は長く、K_3～K_5に比べて新しい要素をもつが、体部内面が丁寧なナデ調整する共通点もみられる。K_7は小型の甕で第16図9・10が土器ダマリ出土。第11図28は大きな平底の底部が付き、趣を異にする。K_8は大きく長く「く」の字状に開く甕で、体部内面はナデ調整する。類似例は徳前C遺跡にみられる。Lは穴－25出土。Mは「く」の字口縁の甕で、端部に外傾した面をもつ。類例は徳前C遺跡にある。Nは口縁部内面を肥厚気味にしたもの。Oは端部を丸くおさめた甕。O_1はK_6の頸部形態に似る。体部内面調整は、第17図7がハケメの後ナデる。類例は飯野新屋遺跡溝状遺構1〔古川　1984〕、徳前C遺跡にある。第17図7・11が土器ダマリ出土。O_2は縁端部の器厚が薄くなる甕で、第12図25の体部は球状をなし、体部内面調整は、ハケ、ナデを併用するがナデの範囲が広い。この手の土器は、出土例が少ないが南太閤山Ⅰ遺跡旧河道〔池野　1983〕に最も近い。

鉢

6類17形態に分類した。出土量は、E・Fを除くと各形態1～2点程度である。Aは有段口縁をもつ鉢。A_1は頸部が斜上方にのび、内面は体部との境に稜をもつ鉢で江上A遺跡SD01に類似する。A_2は近江系の鉢で体部外面はハケメ調整。A_3は口縁が長くのび、奥原遺跡第4号住に近い。A_4は大型鉢。A_5は畿内系の鉢であろう。Bは2段に折れる鉢で塚崎遺跡6号竪穴〔小嶋　1976〕に近い。Cは「く」の字状の口縁をもつ鉢で、第13図6は江上A遺跡SD01に類例がある。第13図4は体部に丸味をもち、新しくなる要素をもつ。D_1はいわゆる小型丸底壺に入るが、第13図7は外傾度が強く、第13図8は口縁部が小さく、体部のくびれが弱い。後者の類似例は串田新遺跡第2号住居跡にみられる。D_2は脚が付く鉢で土器ダマリ出土。E_2は皿状の鉢で類例は乏しい。E_3・E_4は椀状の鉢。E_5の体部形態はF_2の有孔鉢に似る。土器ダマリ出土。F_1は5個の円孔を底部にもつ有孔鉢。F_2の内第18図12は土器ダマリ出土。

高杯

8類9形態に分類した。全形を知りえる資料が少なく、杯部の形態差によった。A_1・A_2は口縁部の長さが短いもので江上A遺跡SD01に類似する。Bは棒状有段脚に、口縁高が体部高を越える杯部が付く。Cは口縁部が外彎して、長くのびた杯部が付く。Dは在地系の高杯。有段口縁の屈曲が明瞭でなく、体部は丸味を失う。Eは内彎して開く杯部に、直線的に開く脚部が付く。Eは東海系の高杯。Gは椀状、逆台形の小さな杯部が付くと推定される高杯。Hは脚部が途中で屈曲するもので畿内系の高杯。土器ダマリ出土。

器台

4類5形態に分類した。Aは筒形の器台。A_2は受部が未発達で、端部に面を残すなど古い様相をもつ。Bは大型器台で、口縁部形態は高杯Cに似る。Cは有段状の小型器台で、祖形は江上A遺跡SD01にみられる。第18図16は土器ダマリ出土。Dはいわゆる小型器台で、孔は円柱状をなし、受端部を丸くおさめる。第18図14・15・17は土器ダマリ出土。

蓋

2類に分類した。Bは小型壺の蓋。

以上、各器種について検討したが、これらの併行関係について触れる。前述の検討から出土遺物は、3群に分けることが可能であろう。第1群土器は、江上A遺跡SD01出土遺物を中心とする群、第2群土器は本江遺跡第1号住居跡出土遺物〔小島　1979〕を中心とする群。この群は土器ダマリ出土遺物が主体となる。第3群土器は南太閤山Ⅰ遺跡旧河道出土遺物を下限とする群である。

第1群土器

壺A_1・A_2・B・C_1・C_2・D・G、甕A_1・A_2・A_3・B_1・B_2・B_3・B_4・B_5・C_1・C_2・C_3・C_4・C_5・D_1・D_2・F・G・I・J・K_1・

K_2・M、鉢A_1・A_2・A_3・A_4・C・E_1・F_1・F_2、高杯A_1・A_2・B、器台A_1・A_2・Bが含まれる。上限は甕C_1・C_2の出土により、江上A遺跡SD01より古くなるであろう。また、近江系土器の出土量の多さも注目される。

第2群土器（第37図）

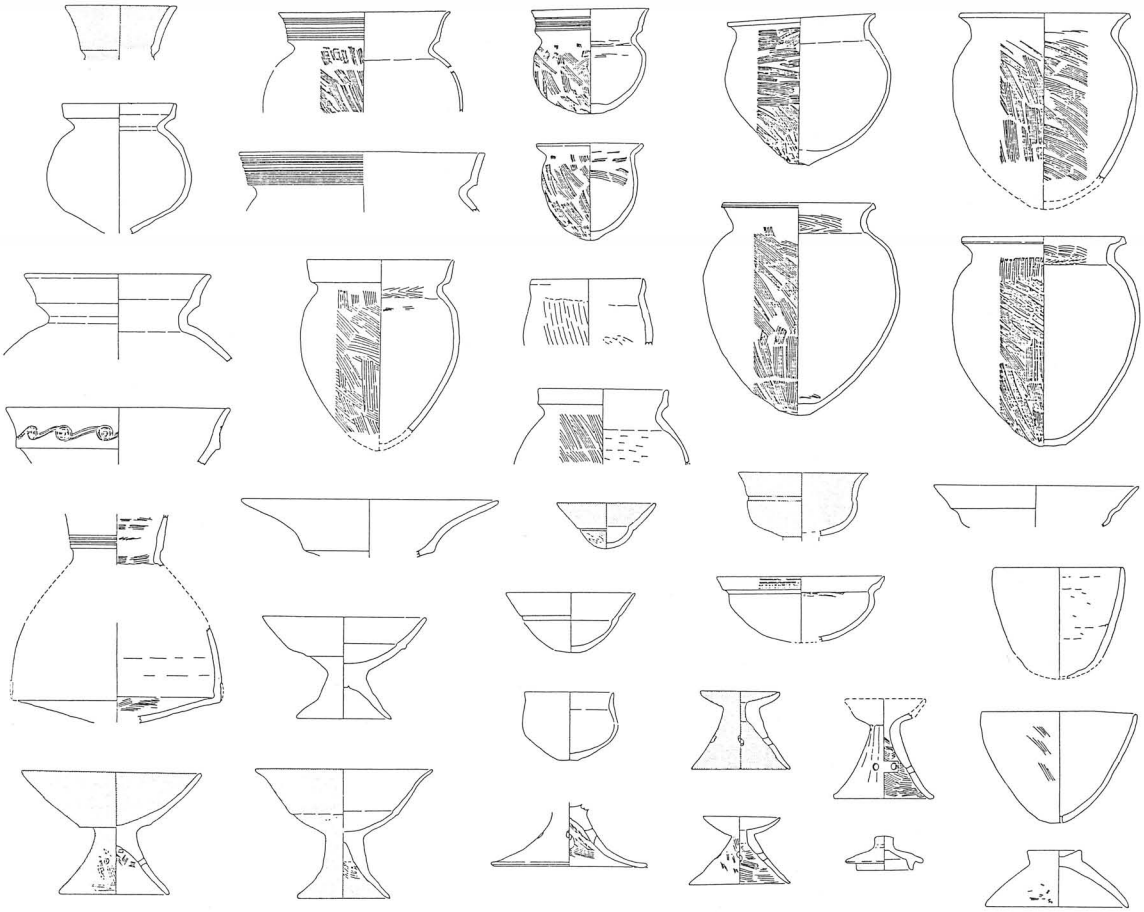
壺F_1・F_2・F_3・H・I、甕A_1・A_5・B_6・B_7・E・H・K_3・K_4・K_5・K_7・K_9、鉢A_5・B・D_1・D_2・E_3・E_4・E_5、高杯C・D・E・F・G・H、器台C・D、蓋A・Bが含まれる。本群は土器ダマリ出土遺物が主体を占めることから、Ⅰ・Ⅱ群より時間幅は短いであろう。壺Ⅰは石川県では法仏期の遺物とされているが、中山南遺跡にみられることから本群に含めた。甕E、鉢E_3・E_4の所属時期が明確でないが、E_3の一部が第1群土器へ、E_4の一部が第3群土器に入る可能性がある。また、鉢F_2の一部も本群に入るであろう。

本群の特徴は、甕の主体が伝統的な有段口縁甕から「く」の字口縁甕K_3～K_5に変わる。また、体部内面調整もケズリ調整からナデ調整へ主体が移行する。鉢はD_1が出現し、高杯には在地系のC・Dの他に、新たにE・F・G・Hがみられる。器台は在地系のCに新たにDが加わるなど土器組成に大きな変化がみられる時期である。

第3群土器

壺E・J・K、甕K_6・K_8・M・N・O_1・O_2、鉢E_2・E_6が含まれる。壺Jは本江遺跡1号住居跡に類似する壺がみられ、第2群土器に入る可能性がある。甕K_6・K_8・O_1は、第2群土器甕の主体になるK_3～K_5に類似点を多くもち、K_6・O_1の一部は土器ダマリからも出土している。しかし、頸部・体部形態が大きく異なることから後続する時期と推定しておきたい。また、本群の中でも新しい様相をもつ甕O_2は、体部が球形に近く、内面調整がナデを主体に施されることなどから、南太閤山Ⅰ遺跡旧河道出土遺物と同時期にしておく。県内では古墳時代前期・中期前半の土器が明確でなく、山陰系の内面肥厚した土器の出土も県西部を除くと皆無に等しい。甕Nがその影響下に生まれた器種とも推定されるが今後の類例を待ちたい。

（池野）



第37図　第2群土器

(2) 中世の木製祭具について

辻遺跡出土の木製品は生活・生産用具と祭具に大別されるが、生活・生産用具の割合に対して、祭具の量が比較的多い。祭具には板碑状木製品、形代（人形等）、刀形、陽物、底部穿孔漆器椀等が挙げられ、B～D区に集中して出土している。溝底面で部分的に集中した状態で出土したこれらは、他の場所で何らかの祭祀を行い、終了後に一括廃棄されたものと思われる。その祭祀とはどういうものであったか、個々の遺物から検討したい。

板碑状木製品　頭部の形態から筆者が任意に命名したものであるが、まず、これに形態上類似するものとしては、

①富山県上市町江上B遺跡SD－070〔(204)×33×5〕・SD－004〔267×28×5〕〔宮田　1984〕

②新潟県白根市馬場屋敷下層遺跡G3区「☆蘇□　□　九□八十一」「☆(梵字)」〔268×33×3〕〔遠藤　1983〕がある。

②は平安時代末から斎串に代わって出土量が増加する呪符木簡の一種である。呪符木簡については、志田原重人氏が4型式を11分類しておられる〔志田原　1984〕。長方形で方頭・圭頭のもの、下端部を尖らせて頭部が方頭・圭頭のものが主流を占めているようで、頭部を圭頭にし、左右2ヶ所の切れ込みを入れ、下端部を尖らす型式は呪符においても少ないようである。下端部を尖らす事は斎串の影響と思われるが、頭部を板碑状にするのは、板塔婆、又は、13世紀に急激に増加した板碑の影響であろうか。時期は、①は14世紀、②は13世紀末から14世紀初である。

次に、墨痕の「大般若経」の類例をあげる。

③石川県鳳至郡穴水町御館遺跡包含層「大般若経転読□□」〔(135)×(45)×3〕

④福井県福井市城戸ノ内町一乗寺谷朝倉氏遺跡北外濠「(梵字)奉轉□」(梵字は大般若の種字)〔(148)×71×5〕

⑤大阪府東大阪市若江東・北・南町若江遺跡堀跡(溝－18)「奉轉讀大般若経難信解品之砌也　正月三日」〔180×29×5〕

⑥高知県南国市田村田村城跡堀跡「(梵字)奉轉讀大般若経一部六□　㊞帰命十六善神□□　㊟大永□年□□」〔(252)×43×7〕(文頭に金剛界大日如来を表わす梵字。右下文頭に般若菩薩を表わす梵字。)

⑦高知県吾川郡春野町芳原城跡包含層「奉轉讀大般若経□一部　明應二年七月」〔322×29×2.5〕

⑧静岡県焼津市小川小川城遺跡井戸跡「奉轉讀大般若経」〔(134)×48×5・(98)×(23)×6・(76)×(31)×5〕

⑨広島県福山市草戸千軒町遺跡SD760「(梵字)奉轉讀大般若経一筥除□□　永　二月□」〔(315)×60×5〕(四方四仏を意味する符号の下に般若菩薩を表わす梵字。「永」は「永」の異体字。)

⑩　〃　〃　SD620「大般若経轉讀」〔(154)×44×6〕

⑪広島県尾道市久保尾道市街地遺跡B地点包含層「大般若経轉讀砌也□　正月十三日」〔342×56×5〕

③～⑪〔広島　1984〕〔長さ×幅×厚さ〕(単位はmm)

赤外線写真撮影の結果、当遺跡の6点（第38図）は、1が「大般若□□」、2が「大般若経」、3が「大□□」、4・6が「大般若心経」か、8は「大般若経」と読める。③～⑪は主に15～16世紀の館跡等から出土しており、頭部を圭頭、又は丸く仕上げた御札である。当遺跡の如き形態で、「大般若経」の墨痕を残す類例は見当らず、時期的にも幾分新しい。大般若経は全600巻から成る経典で、転読とは、全巻を読まずに経巻の初めの数行又は経題、巻数、訳書名だけを読み、巻を捧げて翻播して全巻を読誦したことにするものである。大般若経を転読する大般若会の儀式は、古くは8世紀初めより鎮護国家、除災招福を目的として国家的規模で行われ、後には疾病退散、天災消除、怨敵降伏等種々の祈願に功徳があるとされ、民間にも広がったらしい。特に雨乞いに頻繁に行われたと言う〔藤井　1984〕。大般若経を転読することでどのような祈願が成されたかについては、他の伴出した祭具や出土状況から推測するしかない。③は近くに配石墓が有り、⑩は板塔婆や位牌、卒塔婆が伴出しており、共に追善供養の色彩が強い。④は船形3、魚形1、人形7が伴出している。⑥では周辺1mの範囲に完形の手捏ね土師質小皿8と杯4が一括出土している。

刀形　刀形は、祓の場を罪穢、悪気から遮断する効力を持っているとされ、早くは6世紀代より出現する〔金子1980〕。中世に至ってもその効力は失わず、各地で出土している。一般に刀形は、実物よりデフォルメされ、造りも

平坦かつ粗雑なものが多い。当遺跡出土例は、刀形というよりは木製の刀のミニチュアと言っていいような精良品である。又、別造りの鍔を装着したまま出土した例は他に類例が見られない。一般に、鍔そのものは造り付けに表現したものが多く、神奈川県千葉地遺跡〔広島　1984〕では、刀身と鍔状木製品と鞘が出土した例がある。刀身先端が切り取られたようになっているのは、造りから見て、造った当初の時のものではなく、故意に切り取ったと思われる。何らかの意味があるのかもしれない。

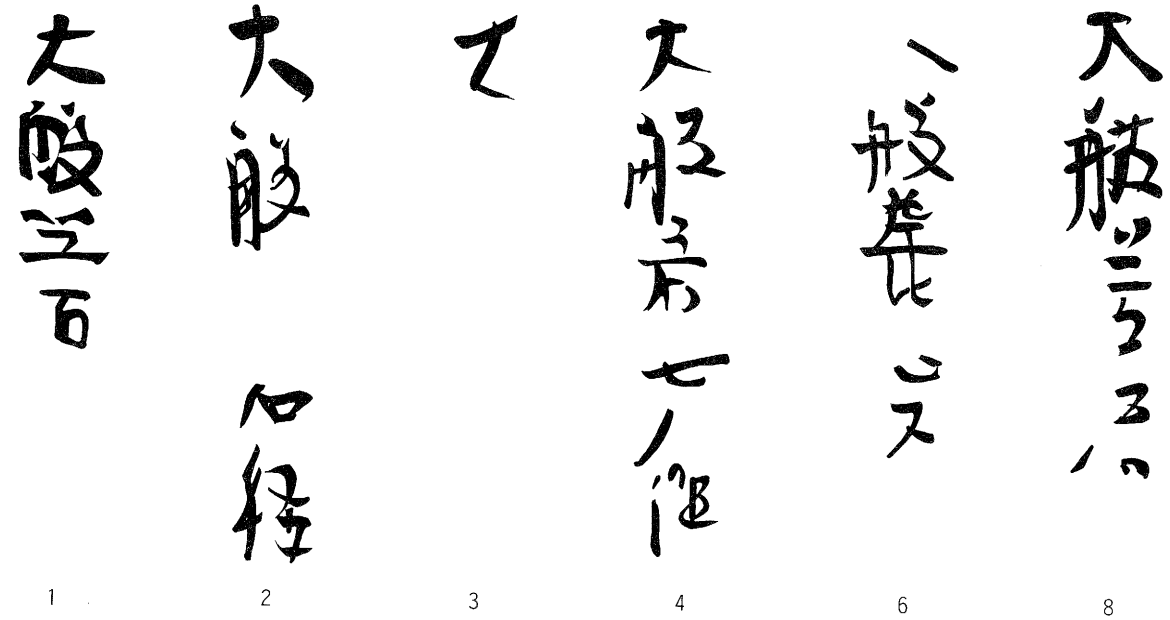
人形　撫でることによって身体に蓄積した穢れや罪悪を人形に移して、身体を祓え浄めるためのもので、7世紀後半の律令的祭祀の普及に伴い増加する。当遺跡出土例の類似例としては、石川県穴水町白山橋遺跡の井戸跡周辺の方形の掘方から、箸状木製品に覆れた状態で獅子頭、舟形、刀形、矢形、鳥形と伴出している〔四柳　1984〕。

陽物　8世紀に出現し、中世にも受け継がれ、陽を呼び、陰なり病気の類を除き祓う要素を持つ〔水野　1979〕。

底部穿孔漆器椀　管見の範囲では類例を見ない。神奈川県鶴岡八幡宮境内では、土師器に穿孔する例がある。

その他、祭具に成り得るものとして、箸は形状が箸に似ていても必ずしも箸とは言えず、古代の斎串のように聖空間（結界）を示す祭具の可能性があるという〔四柳　1984〕。第22図15・24・36・39・40・45～50・53～58は径が1cm内外、側面を削って円柱状に加工したものであるが、15の如く両端先細りのものもあり、箸状品と同様の意味を持つ木串の可能性がある。又、長さが50cm以下、幅2～3cmの建材を割り砕いた木片が大量に伴出しており、その中には端部が炭化したものが数多く見られる。火を炊く時に使用した焚木材であろうか。

県内において、中世の木製祭具がこれほどまとまった形で出土したのは初めてである。ただ、当遺跡は祭具の廃棄場であった溝の部分的検出であったため、祭祀の場やその社会的背景などの性格は把み難い。推測の域を出ないが、墨痕から大般若経の奉読を行い、除災招福等を祈願したことは間違いないであろう。その儀式は、律令的祭祀の残存である人形、刀形、陽物等に加えて、頭部を板碑状にし、下端を尖らせた道教思想の影響が窺える形態の木製品を使用し、「大般若経」という仏教的要素を加えた過渡的形態であったと思われる。①の江上B遺跡出土の2例には墨痕が見られなかったが、時期的には距離的にも近接しており、同様な祭祀が行われた可能性がある。　（北川）



第38図　板碑状木製品墨書（番号は第21図に準ずる）

2　浦田遺跡

(1) 弥生時代中期の遺構と遺物

遺構

検出された遺構は、中期の穴７・溝２条、中～後期の溝３条であるが、その性格は不明なものが多い。従ってここでは中期の遺構について、遺物から相互の時期関係を知り得るものについて簡略に記す。

まず穴－05･09と溝－05については、各遺構から出土した破片で一個体(第32図６)が復元されたこと、穴－05･09からは後述するⅡ期の特徴的器種である甕Ｂ類が多く出土していること等から、ほぼ同時期(Ⅱ期)の遺構と考えられる。

また穴－08からも甕Ｂ類（第32図９）が出土しており、やはり同時期あるいは近い時期の遺構と考えられる。

遺物

調査では弥生時代中期の土器が多く得られた。これらは遺構・包含層各々から出土しているが、復元されたもののほとんどは遺構から出土したもので、相互の関係をおさえうるものである。県内においては弥生時代中期の遺跡は少なく、土器がある程度一括して出土している遺跡としては石塚遺跡・魚躬遺跡・小杉流通業務団地内No21遺跡〔上野 1985〕・中小泉遺跡〔狩野　1982〕などが挙げられるにすぎない。その中で今回出土した土器は、相互の時期関係もある程度おさえられ、きわめて良好かつ重要な資料であるといえよう。

県内の弥生時代中期の時期区分は、『富山県史』考古編の中で上野章氏によって初頭期・石塚Ⅰ～Ⅳ期の５期に区分されたのが基本となっている〔上野　1972〕。その後、上野氏は石塚Ⅳ期の土器をⅠ・Ⅱ期に伴うものとし〔上野 1985〕、中期櫛描文土器群をⅠ～Ⅲ期に区分して現在に至っている。

ここでは以上の研究成果をもとに浦田遺跡出土資料を加え、中期櫛描文土器群について検討する。以下にその概要を記す。なお今回は、比較的多量に出土している甕・壺・鉢について検討した。また分類方法は、Ａ・Ｂは器形によるもので、１・２類は１類が櫛描文を施すもの・２類がハケメのみのものとしてある。

Ⅰ期（第40図①１～６、第40図②28～33・52）

甕　Ａ類には１類と２類があるが、Ｂ類は１類のみで数もＡ類に比べ極端に少ない。

壺　Ａ類には１類と２類があり、Ｂ類は１類のみである。

鉢　Ａ類のみである。

器形の特徴としては、甕・壺Ａ類の口縁部が直線的に開くこと、口縁部に突起がつくものの存在（１・５）などがあげられる。特に後者は前代から続く古い要素と考えられる。

文様では扇形の連続した波状文（２・32)、大きな波状文（33)、横型の流水文（29）など、回転台の活用が不充分な結果と考えられる文様が目立ち、櫛描文が全体に整っていない。

Ⅱ期（第40図①７～21、第40図②34～44・53～56）

甕　Ａ１類が見られなくなり、Ｂ類では１類の量が飛躍的に増えて２類も出現する。またＡ３・Ｃ類も出現する。

壺　Ｂ２・Ｃ・Ｄ類が出現する。Ｂ２類には完形品はないが、38は口縁部内面の羽状刺突文などⅢ期のＢ２類に共通した要素が見られる。またＣ・Ｄ類は外来系のものであろう。

鉢　Ｂ類が出現し、量的にもⅠ期に比べて多い。

器形の特徴としては、甕・壺Ａ類の口縁部が先端部で再度外反するものが多数を占めることがまずあげられる。これはＢ類器形の盛行と関連していると考えられる。この他に甕Ｂ類の胴部が円筒状になること、壺Ａ１・Ｂ１類と鉢に口縁部が肥厚したもの（34・40・53・55・56）が現われること、鉢に口縁部がやや直線的に開くＢ類が現われること、甕の口縁部形を模した鉢（54）が存在すること等があげられる。

文様の特徴としては、櫛描文が全体的に整っていること、連続圧痕文（14など）が使用されること、Ｂ類器形の粗

製品（Ｂ２類）が現われること、甕に羽状ハケメが目立つこと（９など）があげられる。

また外来系と考えられる土器（甕Ａ３・Ｃ類、壺Ｃ・Ｄ類）が増加するのも特徴的である。

Ⅲ期（第40図①22～27、第40図②45～51）

甕　櫛描文を施すもの（Ａ１・Ｂ１類）が見られず、Ａ３類の量が若干増加する。またＢ２類も極端に減小する。

壺　Ｃ・Ｄ類が見られなくなり、全体的に粗製のものが多くなる。

鉢　完形品は見られず、量的にごく少ないと考えられる。

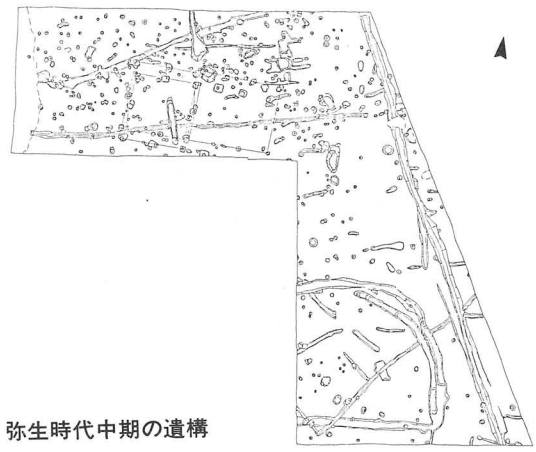
器形の特徴としては、甕では全体的に胴部の張りが弱くなること（22など）、甕Ｂ類の口縁部が萎縮すること（27）、甕Ａ３類の口縁部が内湾して受口状を呈するものが現われること（25など）、甕・壺ともに口縁端部をヨコナデして面をもつものが現われること（23・45など）があげられる。

文様の特徴としては、櫛描文が壺にしか見られないことがあげられる。

以上、各期別に述べてきたが、各期を通してみるならば、櫛描文はⅠ期に普及し、Ⅱ期に盛行し、Ⅲ期に衰退するといえる。また器形の変化は甕において著しく、Ⅰ期にはＡ類が盛行し、Ⅱ期にはＢ類が盛行し、Ⅲ期にはＡ・Ｂ類ともに衰退するが特にＢ類の衰退が著しいといえる。

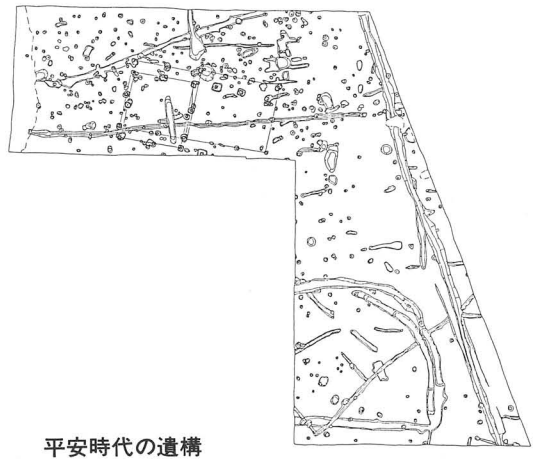
また県西部にある石塚遺跡ではⅠ期から土器が出土しており、櫛描文をもつ甕の主流はＡ類になっている。一方県東部にある浦田遺跡ではⅠ期と考えられる土器はごく少なく、櫛描文をもつ甕の主流も在地的器形と考えられるＢ類で占められており、県東部と西部の地域性の違いと考えられる。

最後に、これまで県内の弥生時代中期の時期区分としては石塚Ⅰ～Ⅲ期の区分が用いられてきたが、今回浦田遺跡で得られた資料は各期の特徴をより明確にしたといえよう。しかしながら、各類の特徴の中には時期差によるものかどうか確かでないものも多く、絶対的な資料の不足が強く感じられる。今後の資料の増加が待たれるところである。



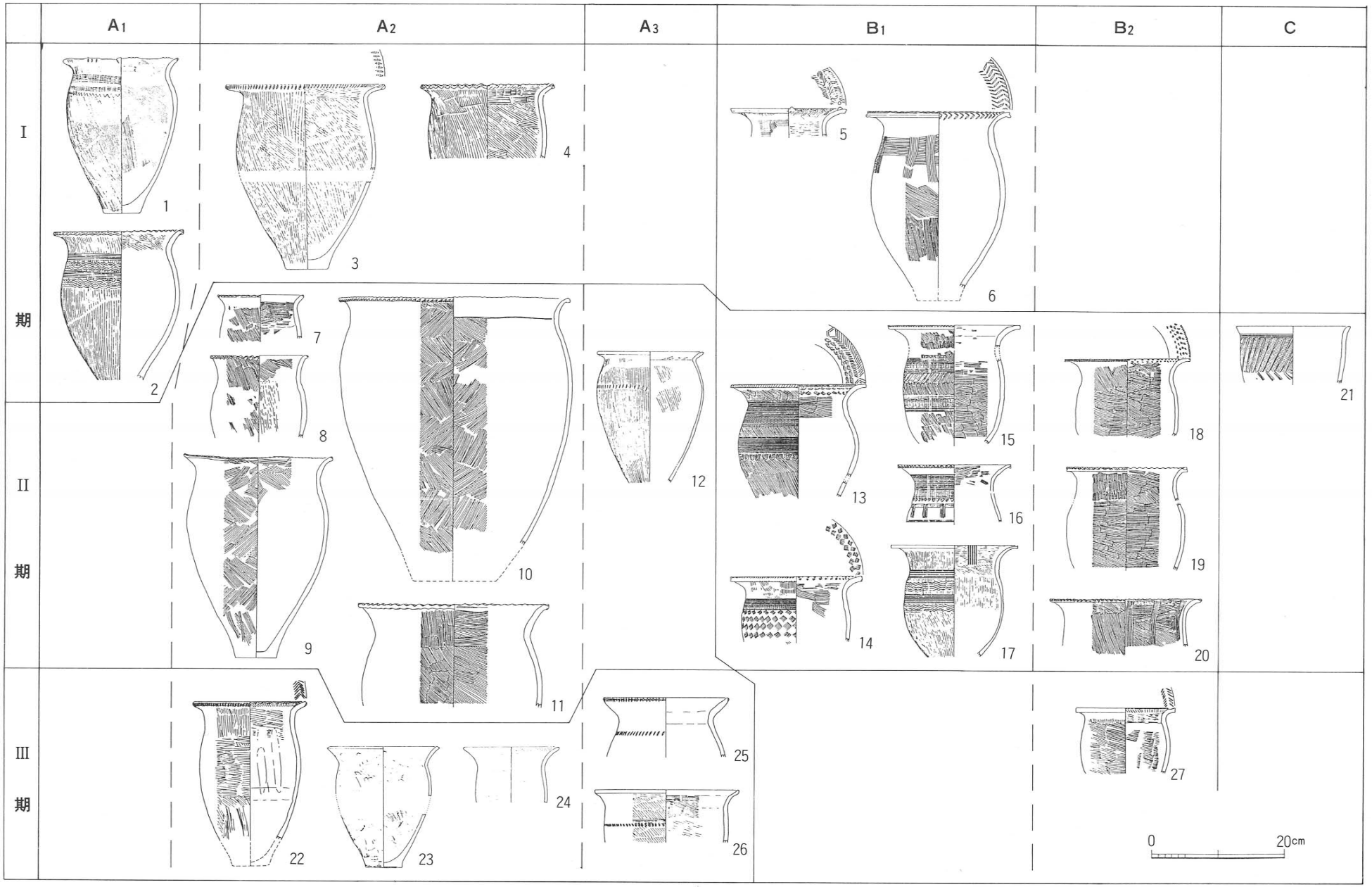
弥生時代中期の遺構

弥生時代後期の遺構

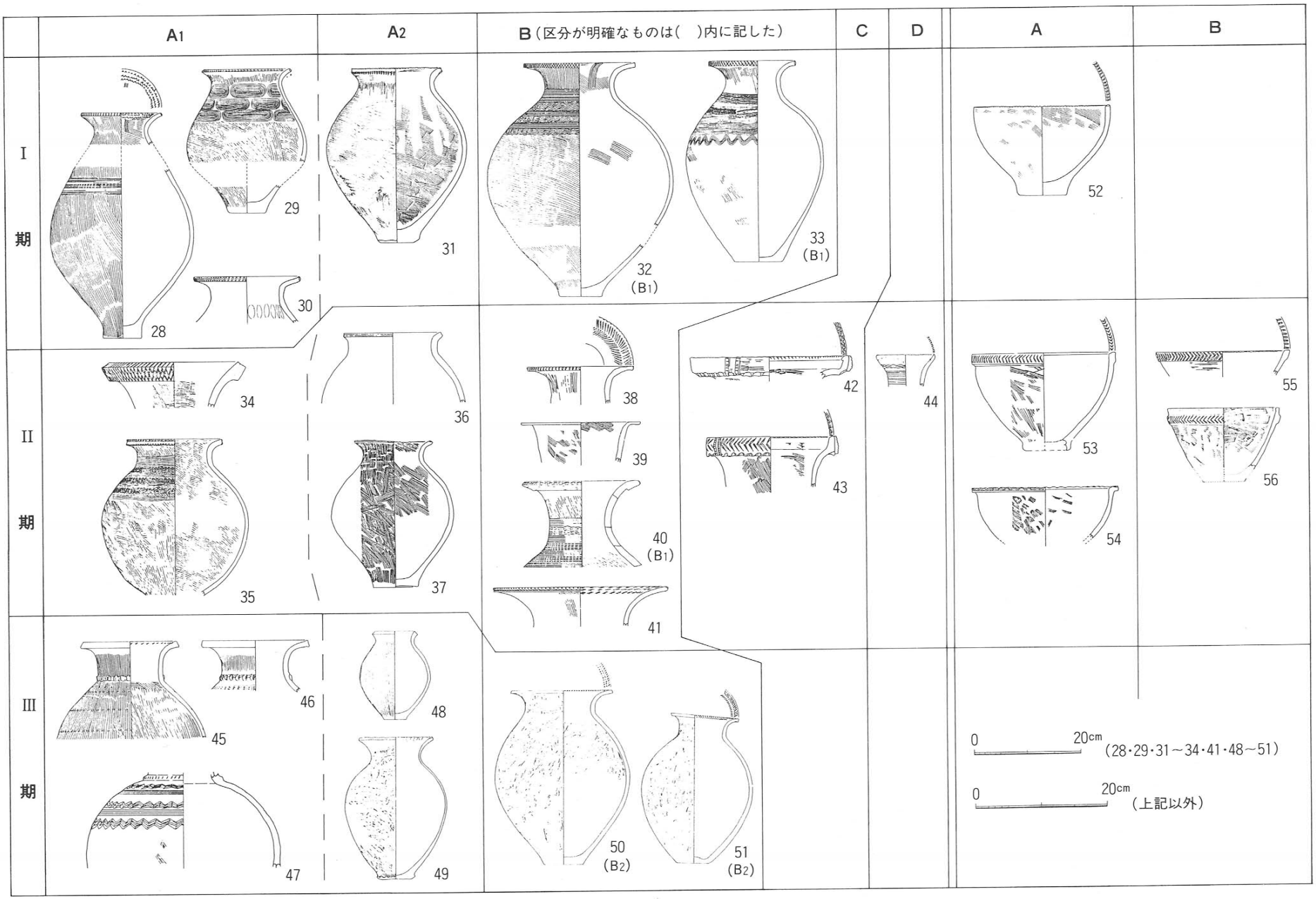


平安時代の遺構

第39図　遺構変遷図



第40図①　浦田遺跡出土土器群の位置(甕)　1～5・12・17・23・24(石塚遺跡)　22・25～27(小杉流通業務団地内No.21遺跡)
6～11・13～16・18～21(浦田遺跡)



第40図②　浦田遺跡出土土器群の位値（壺・鉢）　28～33・35・36・40・44～46・48～52・56（石塚遺跡）　34・41（魚躬遺跡）
37～39・42・43・53～55（浦田遺跡）　47（小杉流通業務団地内No.21遺跡）

(2) 平安時代の遺構

今回の調査で検出された同時期の遺構は、掘立柱建物４棟、掘立柱建物の柱穴５、穴２、溝１条である。これは調査対象区が古代集落の一画にすぎなかったことによる。このため集落構造を明らかにすることは困難である。

従って、ここでは富山・石川両県の掘立柱建物との比較を通し、また遺物の出土状況も考慮して、集落の時期・性格を検討する。

建物の規模と構造

検出された建物は、３間×２間が１棟（建物－03）・２間×２間が２棟（建物－01・02）・１間×１間以上が１棟（建物－04）の４棟である。これらはいずれも古代集落を形成する普遍的規模の建物であり〔岸本　1986〕、建物全体の中で同規模のものが占める率は64％にもなる。しかし２間×２間の建物に限って比較すると、浦田遺跡の２棟には若干の特殊性が見られるため、以下ではその２棟（建物－01・02）についてとりあげる。

建物の規模からみると、浦田遺跡の２棟は建物－01が桁行・梁行ともに総長5.4ｍ（18尺）で平面積29.16㎡、建物－02が桁行総長5.4ｍ（18尺）・梁行総長4.8ｍ（16尺）で平面積25.92㎡である。これは富山・石川両県の２間×２間建物のほとんどが平面積20㎡以下であることから、かなり大きいといえる。この２棟に対比しうるのは、入善町じょうべのま遺跡〔橋本他　1975〕にＳＢ００４（平面積27.4㎡）・ＳＢ０２５（平面積34.2㎡）の２棟が見られるだけである。実際、両県下における平面積20㎡以下の２間×２間建物32棟中には総柱建物が16棟（50％）も存在し、この規模のものは倉庫が多数を占めている。これに比べて浦田・じょうべのま遺跡の４棟は、規模がひとまわり大きくなっていながら総柱ではなく、何らかの特殊な性格をもっていたものであろうと考えられる。

次に柱間寸法についてみると、浦田遺跡では建物－01は桁行・梁行ともに2.7ｍ（９尺）、建物－02は桁行2.7ｍ（９尺）・梁行2.4ｍ（８尺）といずれも完数尺を用いている。これを他遺跡についてみると、完数尺を用いている建物はじょうべのま遺跡に２棟（ＳＢ００４・ＳＢ０２５）、東江上遺跡〔岸本　1981〕に２棟（建物11・13）、石川県法仏遺跡〔湯尻　1983〕Ｂ地区に１棟（建物11）、石川県寺家祭祀遺跡〔小嶋　1979・1981〕に１棟（建物06）の６棟だけであり、２間×２間建物32棟中の８棟（25％）と少数派である。さらに大型で完数尺を用いるものに限れば、32棟中の４棟（12.5％）とさらに少数派となり、やはり若干の特殊性が認められる。

遺跡の時期と性格

遺構の時期は出土遺物から知ることができ、建物－01の柱穴P_1・P_5から９世紀後半の土師器・須恵器が出土している。また遺跡全体からの出土遺物も９世紀中頃～末のもので占められており、建物の時期と一致する。

遺跡の性格を知る手がかりとしては遺物と集落構造があるが、当遺跡では集落構造は参考にできない。

遺物について県内を概観すると次のような傾向がみられる。すなわち官衛・庄家など公的性格の強い遺跡では食膳具には土師器を用いる率が高く、農村など一般集落では食膳具には須恵器を煮炊具には土師器を用いる率が高い[註2]。この観点からみると、浦田遺跡では須恵器の食膳具・土師器の煮炊具が多量に出土しており、一般的農村の傾向が現われている。

古代集落の類型化は湯尻修平氏によって石川県下について行われており、掘立柱建物集落は第Ⅰ～Ⅳ類に分類されている〔湯尻　1983〕。この分類に従うと当遺跡は第Ⅳ類の一般集落に入れられるが、前述したじょうべのま遺跡のものに類似した２棟という特殊な要素も存在し、この２棟の存在が一般集落においていかなる意味をもつかは今後の課題であり、資料の増加を待ちたい。

また、当遺跡の所在する浦田地区周辺は「東大寺領大藪庄」に比定されており〔石原　1977〕、存続期間は文献より８世紀中頃～10世紀末と考えられている〔奥田　1976〕。そして当遺跡の営まれた時期も荘園存続期間に含まれており、大藪庄と当遺跡を含む周辺遺跡との関係の解明も今後の大きな課題といえよう。　（森）

(3) 法光寺谷１号窯跡の遺物

平安時代の須恵器のうち、１群土器を法光寺谷１号窯跡の遺物に比定した。法光寺谷１号窯及び周辺は昭和53年に試掘調査が実施されている〔酒井　1979〕。調査所見によると、灰層の一部を確認し、数基の窯跡が認められた。

出土遺物（第41図、表１）

出土須恵器は、杯Ｂ蓋、杯Ｂ、杯Ａ、皿Ａ～Ｄ、長頸瓶、双耳瓶、盤、横瓶などがある。ここでは杯Ｂ蓋、杯Ｂ、杯Ａ、皿Ａ～Ｄを紹介する。

杯Ｂ蓋（１～22）平坦な頂部からなだらかに縁部に至るもの、肩が張り稜をなすものがある。頂部は糸切り技法によって切り離され、頂部肩に１～２条のロクロ削りを施す。頂部外面は糸切り痕を残すもの、ロクロナデによって消えたものがある。17・19の頂部は笠状を呈して高く、ロクロ削りの範囲が広く、また、縁部の形態が異なることから混入と推定され、辻遺跡出土遺物（第20図１・２）に似る。14はつまみの付かない蓋で、１点出土。頂部外面は糸切り、ロクロナデ調整する。

縁端部は丸味をもって短く折れ、端部がまき込み気味のもの、垂下するものがあり、前者が多い。頂部内面は中心部までロクロナデ調整。ロクロの方向は、51点のうち、右まわりが45点、左まわりが６点で右まわりが約９割を占める。

口径によって杯ＢⅠ蓋（１～11・13、口径9.8～13.4cm、高さ1.9～2.9cm）、杯ＢⅡ蓋（15・16・18、口径15.2～16.9cm）、杯ＢⅢ蓋（20～22・口径17.5～17.9cm）に分ける。量は46・６・３点をそれぞれ数え、杯ＢⅠ蓋が約８割強を占める。杯ＢⅠ蓋は口径10cm以下のものがあり、細分の可能性をもつ。つまみは中央部がわずかに高くなるものが大部分で最大径2.2～2.8cm。杯ＢⅢ蓋の頂部外面のロクロ削りの範囲は広い。22は縁端部近くで大きく屈曲し、端部より下方にのびる。

杯Ｂ（23～46）外傾する口縁部に高台が付く杯。口縁部は直線的に外傾するもの、端部近くで外傾度を増すもの、内彎気味にのびるものがある。高台は細くて低い。端部は平坦なものが多い。底部外面はヘラ切り、ロクロナデ調整。

法量によって杯ＢⅠ（23～39、口径10.6～13.0cm、高さ3.5～4.5cm）、杯ＢⅡ（40～45、口径14.0～16.0cm、高さ5.0～6.5cm）、杯ＢⅢ（46、口径17.0～19.0cm、高さ7.2cm）に分ける。量は27・13・２点をそれぞれ数え、杯ＢⅠが約６割強を占める。杯ＢⅠの底部内面は中心部までロクロナデにするものが大部分で、仕上ナデを施すものもある。杯ＢⅡ、杯ＢⅢは一方向のナデを施すものもある。

杯Ａ（47～54）無高台の杯。口縁部は直線的に外傾するものが多く、底部は平底のもの、丸底気味のものがある。また、口縁部との境は丸味をもつもの、稜をもつものがある。底部外面はヘラ切り、内面は中心部までロクロナデ。

法量は杯ＡⅠ（47～54、口径11.5～13.0cm、高さ3.0～4.1cm）のみ。

皿Ａ（55～61）平坦な底部に外傾した短い口縁部が付く。口径13.5～15.0cm、高さ2.7～3.1cmの１種のみ。底部外面は、55が削り、56がヘラ切り、57～61が糸切り痕を残す。

皿Ｂ（63・64）高台が付く皿。細くふんばった高台が付き、口縁部は直線的に外傾する。64の底部外面は糸切り。

皿Ｃ（62）外傾度の強い直線的にのびた口縁部が付く無高台の皿。底部外面はヘラ切り。口径12.4cm、高さ2.3cm。

皿Ｄ（65）高い高台が付き、口縁部は途中で折れて外傾度を増す。底部外面はヘラ切り。口径17.3cm、高さ3.9cm。

以上、試掘調査出土須恵器について述べたが、窯跡の特徴を要約すると、１、糸切り技法は、杯Ｂ蓋、皿Ａ・Ｂに用いられる。２、杯Ｂ蓋は杯ＢⅠ蓋（口径9.8～13.4cm）を主に焼成する。杯Ｂも同様に杯ＢⅠ（口径10.6～13.0cm）を主に焼成し小型化が著しい。３、杯Ｂは杯Ａより多く焼成されている。また杯Ｂは、口径による分化のみで、高さによる器種分化は認められない。４、瓶類は双耳瓶の焼成量が最も多く、長頸瓶の体部は、肩の張るもの、丸いものがある。

(4) 上末窯跡群について

上末窯跡群は8世紀末から10世紀におよぶ窯跡群である〔藤田　1974〕。8世紀末に比定されている釜谷窯跡の杯B蓋の頂部外面は、ロクロ削り、ロクロナデが併存し、法光寺谷1号窯で糸切り技法が認められるようになる。以後糸切り技法が用いられ、最も新しいとされる法光寺谷3号窯ではみられないという。採取遺物が少なく、実態把握が今後に残された課題である。

上末窯跡群の特徴である糸切り技法及び独特の胎土焼成から供給された遺跡をみると、立山町浦田遺跡、辻遺跡をはじめ、立山町利田横枕遺跡〔藤田　1974〕、魚津市佐伯遺跡、入善町じょうべのま遺跡、朝日町馬場山D遺跡があげられ、県東部に広く供給されている。西は大沢野町野沢遺跡で確認でき、現在のところ神通川が西端になる。また、前掲遺跡の内、9世紀には当窯跡群の製品以外のものが多く含まれており、県西部の窯跡群からもたらされたものか、東部に未発見の窯跡群が存在するのか追求する必要がある。　（池野）

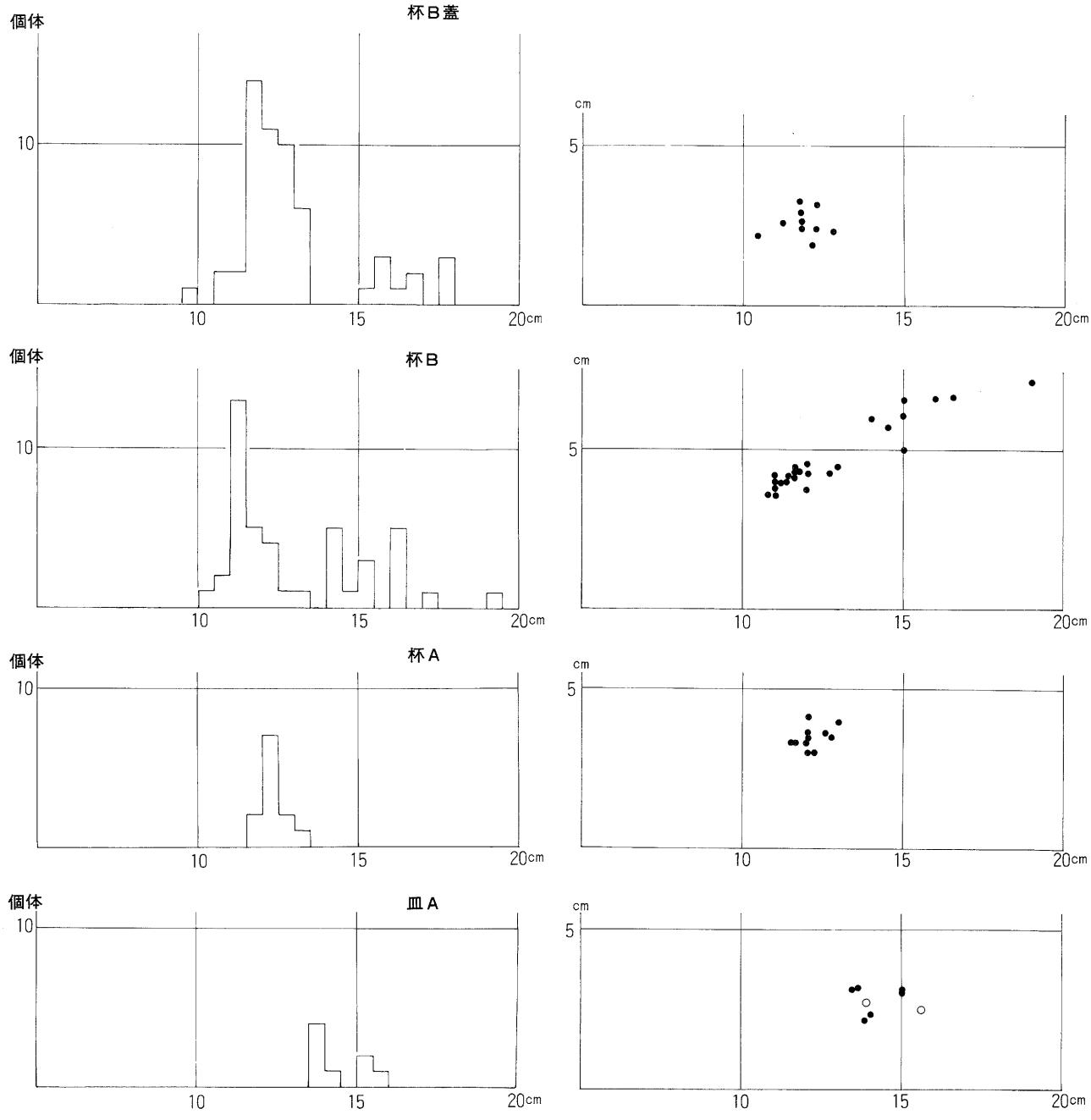
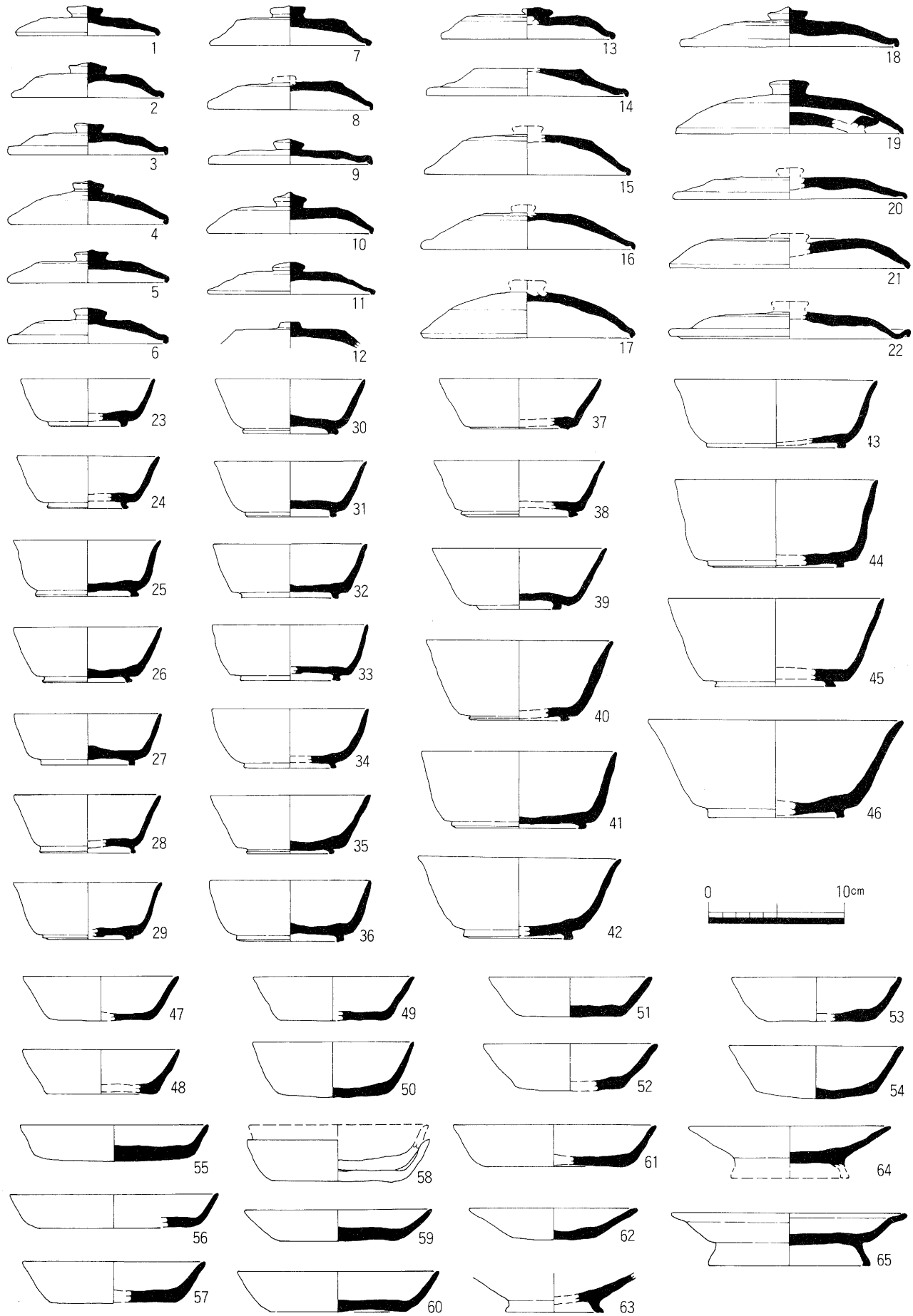


表　口径・法量表（皿Aの・印は糸切り底）



第41図　法光寺谷1号窯跡出土遺物

註

註１　宇野隆夫氏の御教示を得た。

註２　宇野隆夫氏の御教示を得た。

引用文献

イ　池野正男　1979　「Ｂ土器」『魚津市佐伯遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会

池野正男　1983　「３南太閤山Ⅰ遺跡Ａ地区の遺物について(1)古墳時代の土師器について」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』富山県教育委員会

石井清司　1983　「篠窯跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第７号　京都府埋蔵文化財調査研究センター

石原与作　1977　「古代の荘園と条理」『立山町史』上巻

ウ　上野　章　1972　「６弥生時代附古式土師器」『富山県史』考古編

上野　章　1973　「Ⅳ遺物の概要　土器」『富山県滑川市魚躬遺跡発掘調査報告書』滑川市教育委員会

上野　章　1985　「５出土遺物(1)弥生時代の土器」『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第７次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

エ　遠藤孝司　1983　「Ⅵ馬場屋敷下層遺跡３遺物」『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』白根市教育委員会

オ　小笠原好彦　1975　「Ⅳ平城京の遺物３土器」『平城宮発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所

奥田淳爾　1976　「東大寺の墾田地」『富山県史』通史編Ⅰ原始・古代

カ　金子裕之　1980　「古代の木製模造品」『研究論集』Ⅵ　奈良国立文化財研究所

狩野　睦　1982　「Ⅳ中小泉遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』上市町教育委員会

キ　岸本雅敏　1981　「８東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町遺構編－』上市町教育委員会

岸本雅敏　1985　「２古墳時代(1)土師器」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要Ⅲ』富山県教育委員会

岸本雅敏　1986　「Ⅴ新町Ⅱ遺跡の古代掘立柱建物群の性格」『新町Ⅱ遺跡の調査』婦中町教育委員会

ク　久々忠義　1982　「Ⅶ江上Ａ遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』上市町教育委員会

コ　小島俊彰　1979　「本江遺跡」『滑川市史』考古資料編

小嶋芳孝　1976　「Ⅲ遺構と遺物１竪穴・掘立柱建物」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ塚崎遺跡』石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団

小嶋芳孝編　1979　『寺家1978年度調査概報』石川県立埋蔵文化財センター

小嶋芳孝編　1981　『寺家1980年度調査概報』石川県立埋蔵文化財センター

小林行雄　1932　「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」『考古学』３－５

サ　酒井重洋　1979　「１辻遺跡」『立山町埋蔵文化財予備調査概要』立山町教育委員会

酒井重洋　1979　「法光寺谷窯跡」『昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧』富山県教育委員会

シ　志田原直人　1984　「中世遺跡出土の呪符」『第４回中世遺跡研究集会中世の呪術資料』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・広島考古学研究会

タ　田辺昭三　1966　『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園創立90周年記念研究論集第10号

ナ　中山修宏　1981　『串田新遺跡Ⅱ』大門町教育委員会

ニ　西井龍儀　1986　「18末窯跡」『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』高岡市教育委員会

西野秀和　1982　「第４章第２節奥原遺跡の遺構と遺物」『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』石川県立埋蔵文化

財センター

ハ　橋本　正　1971　「第４章第１節古式土師器について」『小杉町中山南遺跡調査報告書』富山県教育委員会

橋本　正・岸本雅敏　1975　『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(Ⅲ)』入善町教育委員会

浜野伸雄　1983　「第４章第２節弥生・古墳時代の遺物」「第５章第４節弥生時代について」『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告(Ⅳ)』石川県立埋蔵文化財センター

ヒ　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・広島考古学研究会　1984　『第４回中世遺跡研究集会中世の呪術資料』

フ　藤井正雄　1984　「８祈禱の儀礼二祈禱儀礼の論理と意味」『日本人の仏教10仏教の儀礼』東京書籍

藤田富士夫　1974　「富山県立山古窯跡群」『考古学ジャーナル』No97

古川知明　1984　「Ⅳ遺物」『飯野新屋遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会

ミ　水野正好　1979　「祭礼と儀礼」『古代史発掘⑩都とむらの暮し　歴史時代－２』講談社

宮田進一　1981　「７江上Ｂ遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町遺構編－』上市町教育委員会

宮田進一　1984　「Ｅ江上Ｂ遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品・総括編(本文)－』上市町教育委員会

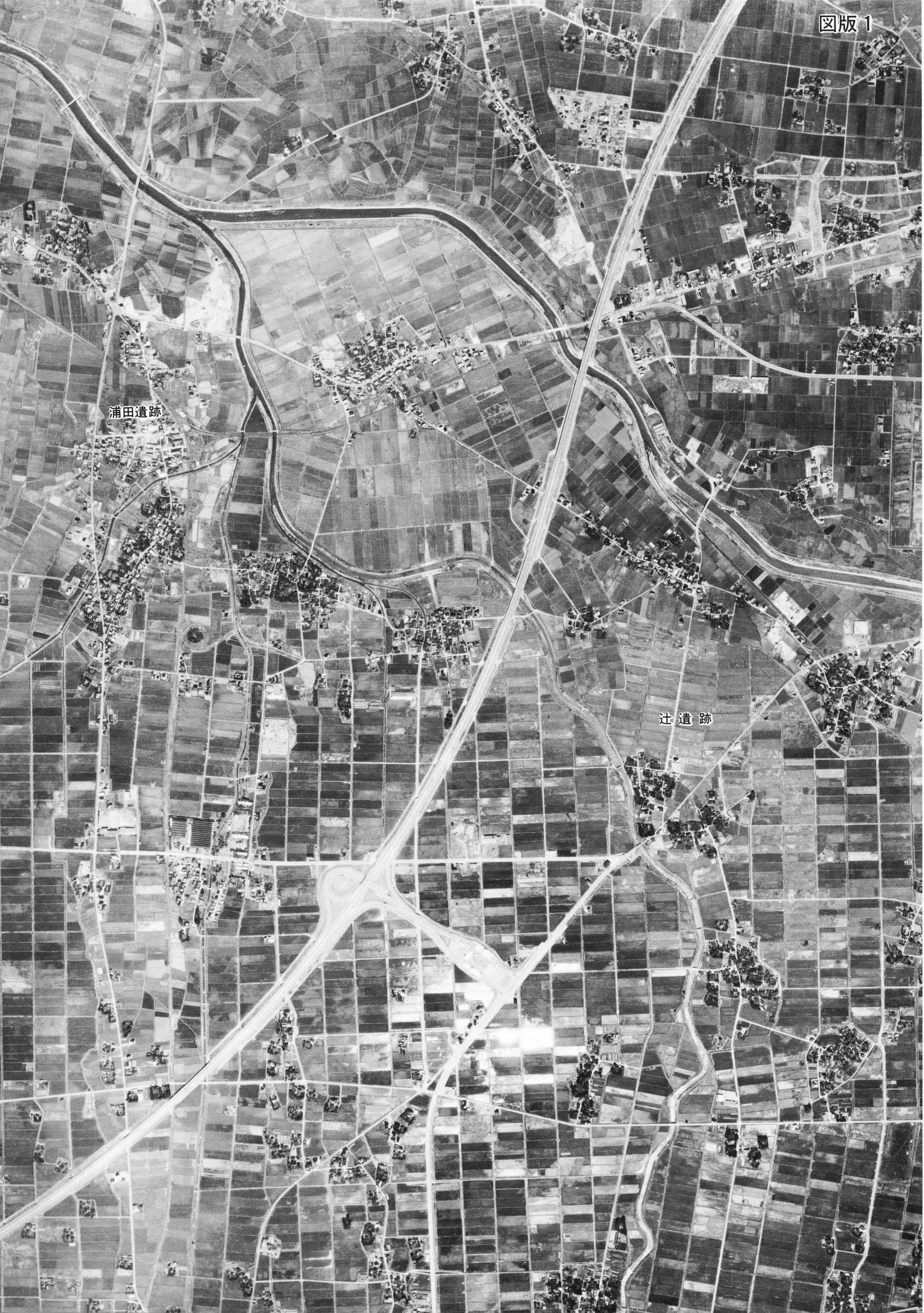
ヤ　安田良栄　1977　「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻

ユ　湯尻修平　1983　「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会

湯尻修平　1986　「第４章第２節弥生・古墳時代の遺物」「第５章まとめ第３節弥生・古墳時代の遺物」『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告(Ⅱ・Ⅲ)』石川県立埋蔵文化財センター

ヨ　四柳嘉章　1984　「能登の中世荘園村落における信仰－穴水町西川島遺跡群の調査から－」『石川県考古学研究会会誌』第27号

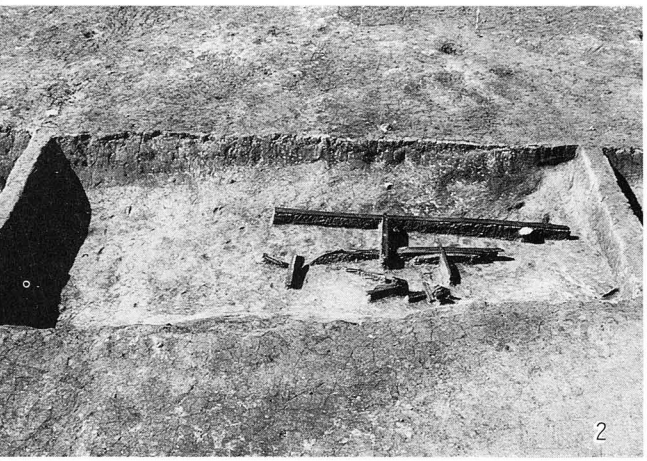
図版１



図版 2

辻遺跡

1. 溝-01・02全景
（東から）



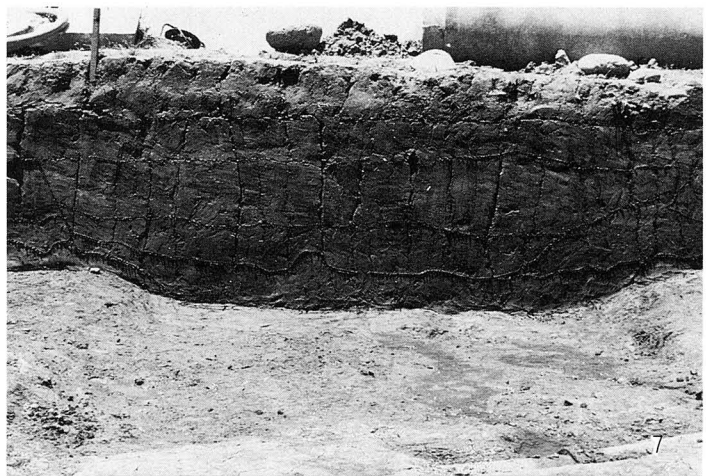
2. 溝-01B区（南から）

3. 溝-01C区（南から）

4. 溝-01D区（南から）

5. 溝-01E区（南から）

6. 溝-01C区出土刀形



7. 溝-01西壁

図版 3

辻遺跡

1．発掘区西側全景
（南東から）

2．住-01周辺（南から）

3．穴-31（西から）

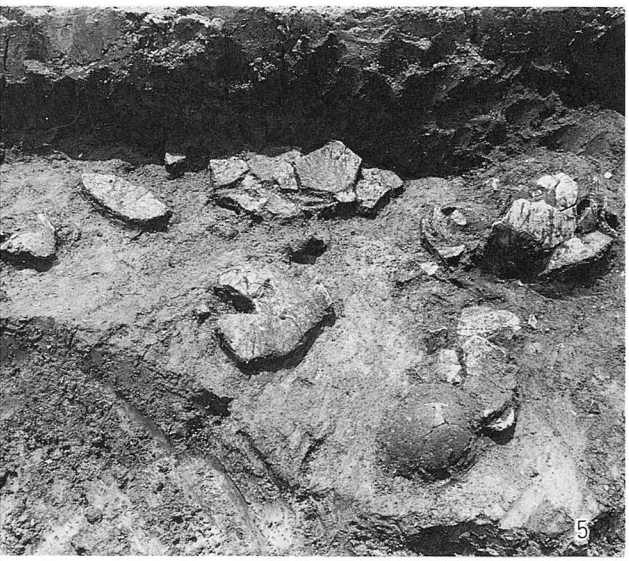
4．穴-77（西から）

図版 4

辻遺跡

1. 住-01
2. X5Y5・6

3. X3・4Y5
4. X5Y5土器ダマリ



5. X5Y6
6. 穴-77

7. X6Y11
8. 穴-76付近

図版 5

辻遺跡

1•2．住-01

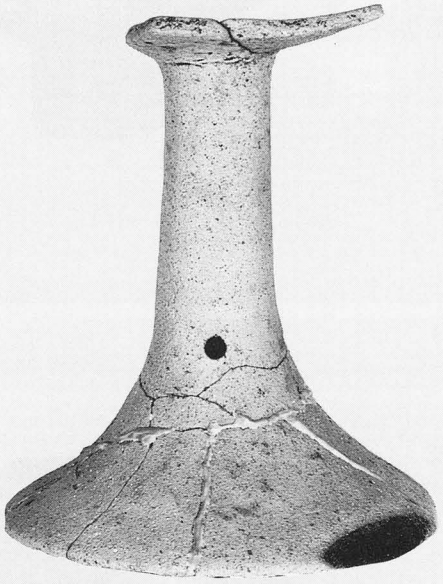
1

2

3．穴-67•68

4．穴-49

3



4

5．溝-12

6•7．溝-01

5

6

7

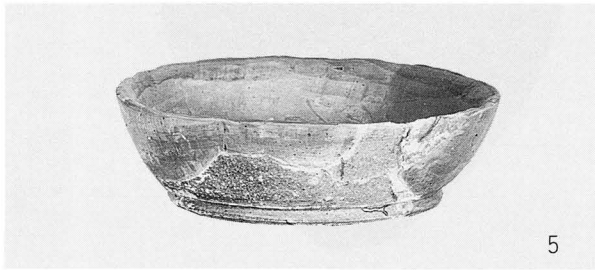
図版 6

辻遺跡

包含層

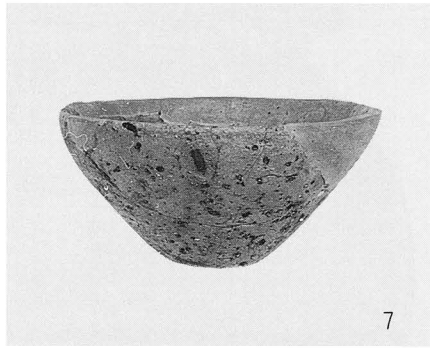
1

4

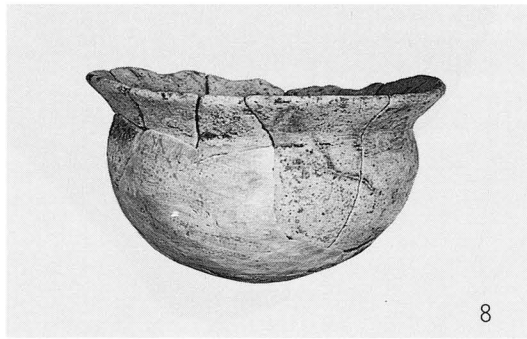

5

2

6


7

3


8

9

図版 7

辻遺跡

包含層

1

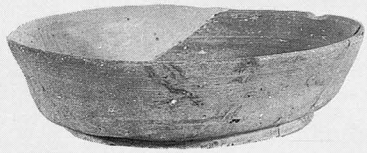
2

3

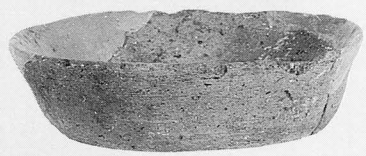
4

5

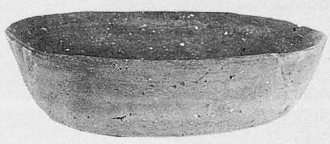
6



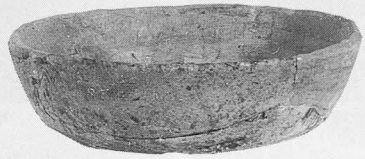
7



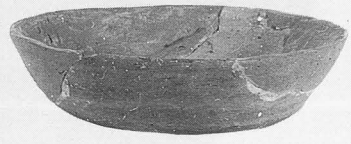
8



9



10

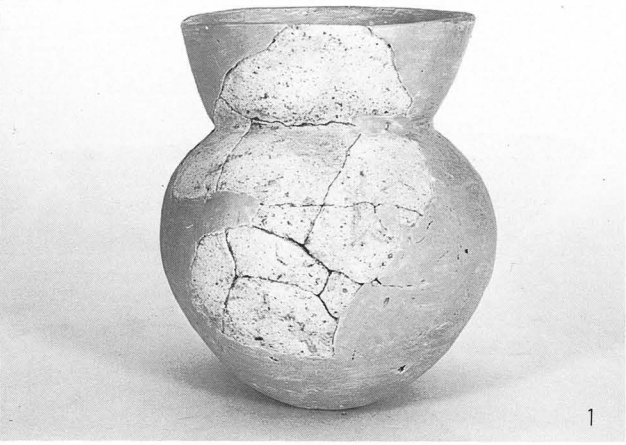


11

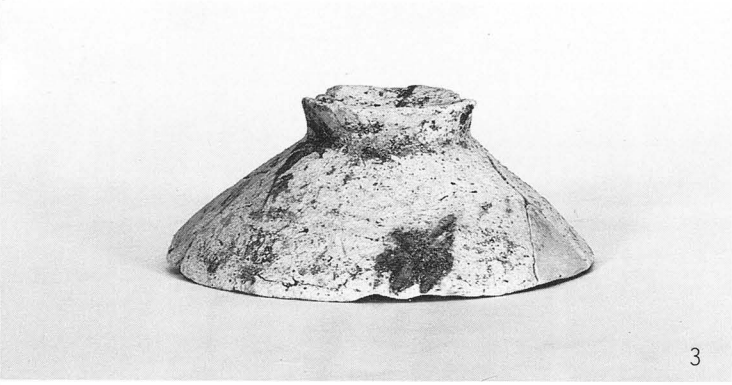
図版 8

辻遺跡

包含層


1

2


3

4

5

6

7

8

9

10

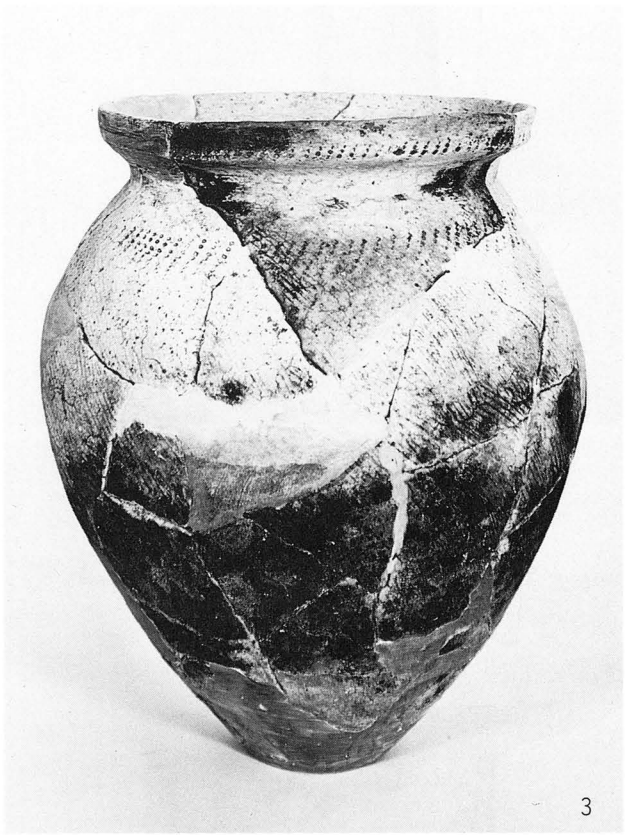
図版 9

辻遺跡

包含層

1

2


3

4

5

6

図版10

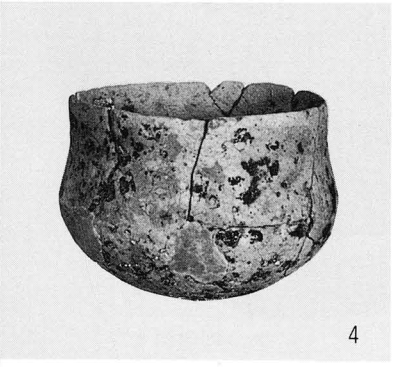
辻遺跡

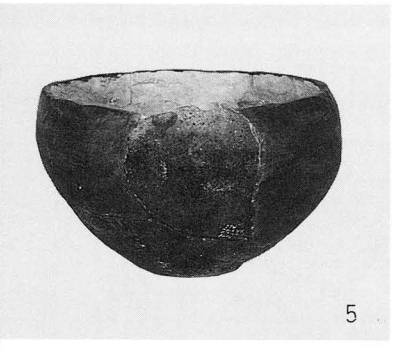
包含層
(7は¼)

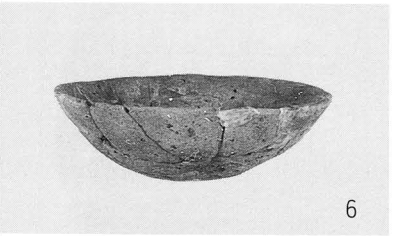
1

2

3


4


5


6

7

8

9

10